計比天公克肖像

小序

兵强カラサレハ。國富マス。國富マサレハ。兵强カラス。富强ノ俱ニ收メサル可ラサルヤ。論チ俟タサルナリ。夫レ海軍ハ。文明ノ利器。富强ノ要具。其効用固ヨリ大ナリ。豈之チ戰鬪專用ノ利器要具視シテ可ナランヤ。今試ニ其用チ擧クレハ。攻戰ニ、防鬪ニ、封港ニ、捕拏ニ、偵察ニ、警備ニ、練習ニ、測量ニ、救難ニ、殖民ニ、貿易漁業ノ保護ニ、異境遠域ノ探討ニ、其用タルヤ。戰時ハ勿論。平時亦甚タ多シ。乃チ我輩海軍士官ハ。戰時ニ在テハ。應ニ忠勇敢死ノ戰鬪者タルヘク。平時ニ在テハ。宜シク精練敢爲ノ航海者タルヘキ者ニアラスヤ。然ラハ則チ奇功偉

勳ヲ奏シテ。其本分ヲ盡サントスルヤ。充ツ戰時ニ盡スヘキノ道ト。平時ニ盡スヘキ道トヲ識別シ。自己ノ長所ニ參考シテ。其目的ヲ定メ。以テ其術ヲ講シ。其素ヲ養フニアラサレハ。安ソ克ク其本分ヲ盡スヿヲ得ン。目的豈之ヲ定メスシテ可ナランヤ。乃チ其目的ヲ定メンニハ千古俊傑ノ中ニ就キ。最モ欽慕スヘキ人物ヲ撰ミ。其言行實跡ニツキテ。鑑ミルヨリ。善ナルハナシ。而シテ今其欽慕スヘキ人物ヲ撰ムニ。英將訥耳遜及公克ノ如キ。眞ニ其人乎。蓋シ此ノ兩將ヤ。俱ニ其天年ヲ終ヘスト雖モ。一ハ忠勇ニシテ。機畧絶倫。即チ戰鬪者トシテ。絶代ノ奇功ヲ奏シ。一ハ堅忍ニシテ。技能精練。即チ航海者

トシテ。無比ノ偉勳ヲ顯シタル名將功臣タルヽ。世ノ既ニ許ス所。乃チ我輩ノ推シテ以テ。龜鑑トスヘキ。俊傑ナラスヤ。嗚呼風帆木船ノ時代。既ニ此空前ノ偉人アリ。汽機鐵艦ノ今日。豈絶後ノ名士ナカルヘケンヤ。此書ハ即チ公克氏カ。前後三回。世界ニ周航セル顚末記事ニシテ。天外子ノ譯スル所ナリ。今之ヲ一讀スルニ。豪膽宇宙ヲ呑ムノ氣慨。忠肝國ニ報ユルノ至誠。慈愛下ヲ待ツノ恩惠。巧妙艦ヲ運ラスノ神算。其正氣ノ發スル所。一トシテ讀者ヲ感動セシメサルハナク。實ニ文弱偷安ノ徒ヲシテ。慙死セシムルニ足ルモノアリ。乃チ我カ海軍士官ノ爲メニハ。訥耳遜傳ト幷ヒ行ハレテ。最モ有益ノ

者ト信ス。是此書ヲ刊行スル所以ナリ。嗚呼之ヲ讀テ奮起セサル者ハ。男兒ニアラサルナリ。嗚呼之ヲ讀テ感泣セサル者ハ。忠臣ニアラサルナリ。讀者宜シク之ヲ頒テルノ微意ヲ諒スヘシ。

明治二十四年十一月

肝付兼行識

凡ソ書ヲ讀テ、人ノ功業ヲ審知精究セントスルニハ、先ツ、其爲人ヲ知ルコト、甚タ肝要ナリ、殊ニ公克氏ノ如キ、貧賤一農僕ノ子ヨリ出デ、顯要ノ地位ニ進ミシ人ニ在テハ、先ツ其爲人ヲ知テ讀ムト、知スシテ讀ムトハ、其感覺ニ深淺ノ差ヲ生スルヿ、甚タ大ナリ、故ニ、此周航記ニシテ、其初メニ、暑傳ノ無ランニハ、或ハ隔靴搔痒ノ憾ナキヲ免レス、是此暑傳ヲ附スル所以ナリ、但刊行ニ臨ミ匆卒ノ起稿ニ係レハ、固ヨリ其躰ヲ得サル所アリ、讀者乞フ之ヲ諒セヨ

婆心子識

計比天公克暑傳

邦人既ニクックト呼フ者多シ、然レ𪜈、余之ヲ英人ニ聞クニクークト言ヘリ、且ウェブスター氏大辭書ノ人名部ニモ、エリザ、クック、又ヲヨシ、フレデリツキ、クックノ如ク、クックト發音スベキ短聲ノ符ヲ附セサルナリ、依テ今之ニ從フテ公克ノ二字ヲ當ツ又本傳ハウィリアム、キングストン氏ノケビテン、クークヒスライフ、ヴヲエーヲ、エンドディスカバリースニ基クト雖𪜈亦鹽島仁吉氏ノクーク

傳ヨリ引用スル所少ナカラズ

公克は其名を庶武と謂ひ、一千七百二十八年十月二十七日、英國ヨークシャ州マルトン村の一茅屋に生れたり、父は其村の農僕にして貧賤に世を送りし者なりければ、初めは村の一女教師に就て素讀を受けたり、而して父の後に斯コットー氏に信ぜられて其莊園守と爲るや、斯氏之を憐みて學資を給しグレート、エートン市の商業學校に入れたり、時に年甫めて八歳なり、夫より其學校に修學すること四年なりしも、其性幼時より海を好みて兩親と全く反對の望を有ちければ、憫むべし十三歳の春を迎ふるや直ちに丁稚奉公としてストライス港市の雜貨商某方へ年季に遣られたり、是に於て公克は誠實には勤むるものゝ、海を好む心は毫も衰へず、日夜唯海上に其身を委ねんとをのみ望みければ、某も遂に年季の契約を解き公克をして自由に其好む所に從事するを得せしめたり、去れ

は公克は幾くもなくして生來の望を得しことなれば、乃ち某方を辭して同市のヘンリー、ウーカー氏に投じ、其所有船なる四百五十噸積ツルーラヴ號に乘込みて其水夫と爲り、專らニューカッスル、ロンドン間の石炭運送に從事しけるが、其勉勵等輩に超え、忽ちにして敏活の働きを顯はしければ、其契約の年季明けて自由の身となりし後ち未だ二年を經ざるに、千七百四十八年に於て、船主ウーカー氏より特に六百噸積の新船スリーブロザー號の艤裝に助力すべき命を受けたり、斯くて其後此新造船は、或は政府の運送船に用ゐられ、或は那威の貿易に用ゐられて、各所に航海を爲しけるが、其間は絶えず其船に乘込みたり、斯くて大西洋の航海に種々の經驗を重ぬるの後、少年の公克は、遂にフラインドシップ號の運轉手とは爲れり、蓋し公克は此間常に航海に必要なる智識を得んことに汲々として他に餘念なかりしが、是其將來に偉業を奏する要素を養ひ

し第一着なりとす、

千七百五十六年、英佛の間に戰爭の起りて、英國政府の大に海員を募集するや、時に公克は年既に二十八歳にしてテームス河に在り、思へらく、國家の爲めに戰役に服するは是男兒の義務且つ名譽なり此場に臨み何の猶豫か之あらんと、直ちに其募集に應して六十門備への軍艦エーグル號に乘組みたり、斯くて其艦長は、間なくして波ルリサー氏に代りしが、公克の敏活なる擧動と其熟練とは、早くも波氏の注目する所と爲れり、是に於て以後波氏の公克に對する親愛益々深く、遂に厚き幹旋に依て航海師たるべき保證を受け、グランパス、ガーランド、メルキュリーの各號に航海師たりしが、其メルキュリー號に在るに當りては、北米クエベックの征討に從事したり、而して當時、其船の彼地に達するや、佛人が英國艦隊の其地に顯はるゝを見て直ちにシントローレンス海峽の航路浮標を盡く取

り去りければ、此に其水深を測らざる可らざるの必要起り、此大任は遂に公克の引受る所と爲れり、是に於て公克は、直ちに測量に從事しけるが、敵の警戒の嚴なるより、暗夜を冒して之れを施し、遂に其北岸及オルレーンス島間の水深を明かにして、其圖を製したり、當時英國艦隊をして無事にオルレーンス島に達せしめたるは、全く此測量の力なり、而して其後、其船のシントローレンス河に錨泊中、又司令長官の命令に依り、其クェベックより下流にして航海に最も困難なる部分を精密に測量したるが、其測量圖は後に水路誌と共に刊行されたり、而して其測量及記事の完備せるとと、今日に至るも尚ほ之に勝るものを出さずと云ふ

斯くて此役、終に英國の勝利に歸し、司令長官ソーンダー大將の大艦數隻を率ゐて英國に歸るや、北米に止どまりし艦隊の司令官はノーサンバーランド號の艦長コルウル大佐の乘る所となり、該艦

は即ち代將旒を揭げて旗艦となれり、是に於てコルウル司令官は、直ちに公克をメルキュリー號より拔きて、ノーサンバーランド號の航海師に擧けたるが、是千七百五十九年九月廿二日にして、夫より其艦隊ハリファキスに冬籠りすることになり、幸ひに餘暇を得たりしかは、公克は毫も之を遊樂に空費せずして、其職務に必要なる知識を得ることに使用し、高等なる數學より、天躰の實測、航程の推算、經緯度の測定等を悉く修め、遂に拔群の伎倆を備へたり、而して又公克は之と同時に、禮義を修めて道德を高めたりしかは、大に其等輩の信認尊敬を博するに至れり、是將來に偉業を奏する要素を養ひし第二着にして蓋し第一着に得たる所を大成したるの時とす、即ち他日に博したる名譽は、全く此時心田に固めし學術德行兼備の結果に外ならず、何となれは、能餘りあるも、德之に稱はさるときは大業は得て遂け難きものなればなり

千七百六十二年、又同艦の新認島(ニウフナウンドランド)回復の役に出軍するや、同地に赴きて廣く同島の海岸を測量して其水路を明かにし、以て永く航海及漁業に無上の便利を與へたるが、同年末を以て歸國も、賢婦エリサベス、バッと結婚せり、而して翌年再ひ同島に航して其全海岸を測量し、之を了りて、英國に歸りけるが、尋て又同島の海軍測量官に補せられ、ラブラドルの海岸測量を命ぜられて同島に赴けり、蓋し公克は日蝕を測量して、其記事を某學會の雜誌に投書し、大に名聲を博したるが、其測量は全く、當時ケープブレーの附近なるポルセチの一島に於て施したるものなりと云ふ

斯くて公克は、其後英國に歸り、後來大に爲す所あらんと、機會の到來するを待ちけるが、恰も好し、第十七世紀以後漸く萎靡振はざりし輿地探檢の氣焰再燃して其熱度の漸く熾んなりしと、偶々金星の日面を經過する貴重の現象期に際會せしとに因り、此目的の爲

め英國政府に於て遠征艦を南太平洋に派遣することゝなり、乃ち海軍大臣より撰まれて、特に海軍大尉を拜し、此遠征艦の艦長たる榮職に補せられたり、是千七百六十八年五月二十五日にして、時に其齢幾んど四十歳なりき

是に於て公克は、數名の學者と共に同年七月三十日を以て、英國のデプトフォードより出發し、八月十八日を以て同國ブリマス浦に投錨し、其後數日にして南太平洋に向ひ解纜しけるが、之を即ち公克周航以前の生活とす、

是より千辛萬苦、剛耐堅忍、世界に周航すること前後三回、造化未た洩さゞるの秘を闡き、先輩未た探らざるの地を探りて周到殆と洩さず、世人の迷夢を覺破するの奇勳偉功を奏し、第一の周航より歸りて少佐に進み、第二の周航より歸りて大佐に進み、尋て、又同國の學士會院より特待の學士に歡迎せられて黄金のコプレー賞牌を

受け、第三の周航に於て不幸にも奇禍に遭ひ、終に千七百七十九年二月十四日を以て、布哇蕃民の毒手に殪れたるが、其詳細は、宜しく本記事に於て、之を審知精究すべし

婆心子玆ニ、公克氏ノ畧傳ヲ稿シ了リテ、感スル所ノ二事アリ、乃チ左ニ揭テ蛇足トナス

夫レ公克氏ノ死ヤ、誰カ之ヲ聞テ痛悼セザル者アラン、彼レ蠻民ノ暴ヤ、誰カ之ヲ聞テ憤怒セザル者アラン、吾ハ則チ之ヲ痛悼シ之ヲ憤怒スル者ナリ、然レ𪜈今其實跡ニ就キ此蠻民ニ此暴行アラシメタル所以ヲ推究スルキハ、此不幸ヤ竟ニ之ヲ氏自カラ求ムルノ禍ニ歸セザルヲ得ズ、嗚呼寛仁公克氏ノ如キ長者ニシテ終ニ此事アルヲ免カレズ、吾人豈深ク此ニ鑑ミル所ナカルベケンヤ、語ニ曰ク天作孽猶可違。自作孽不可活。ト、信ナル哉此言

又公克氏終年ノ齢ヲ按スルニ、正ニ是五十二歳ニシテ、即チ是ヨ

リ先千五百二十一年四月二十六日マツタン島ニ於テ、同ジク蠻民ノ手ニ殪レタル、彼ノ世界一周航ノ卒先者麻是蘭ト、全ク之ヲ同ジクセリ、嗚呼同ジク西土ノ世界周航者ニシテ、同ジク東洋ニ望鄉ノ鬼ト化シ、其終年ノ齡ヲ又同シクストハ、豈奇ト謂ハザル可ケンヤ、

○此書ヲ讀ム者ニ諗ク

吾聞ク瀨戸内ノ三關ヲ觀ント欲スル人アリ先ツ上之關ト中之關トニ抵リ其港市ノ蕭條タルヲ目シテ吁上中ノ兩關ニシテ其港景斯ノ如シ下之關又觀ルニ足ラザルナリトノ言ヲ發セシカバ聞ク者之ヲ大笑セリト今此書ヲ讀ム者若シ其第一第二ニシテ止ミ第三ヲ放棄センニハ亦他ノ笑柄タルヲ斯ノ如キノミ況ンヤ第一第二兩周航記ノ上中兩關ノ比ニ非ズシテ第三周航記ノ又下之關ノ比ニ非ザルヲヤ語ニ曰ク樹ヲ觀ル必ス其果ニ于

テスト旨アル哉此言

婆心子又記

世界三周航實記

ケピテン　クック
水交社譯述
婆心子校訂

第一周航記の一

近代開明諸國の政府及學者か天躰の現象中最も稀有にして且つ最も貴重なる現象即ち金星の日面經過を觀測するに最も便利なる路を得んとして互に相競爭し或は政府の保護に頼り或は學術協會或は一私人たる喜捐家の支辨を待ち該遠征を企てしことは多々實に計ふへからす而して該遠征たるいつれも皆天涯萬里容易に到り得へからさる遼地絶島に測者を派遣して其觀象に從事せしめさるものはあらさりき是より一世紀前に方り同一の現象を觀測せんと世人此に勉むる所ありしか當時は素より近年の如く盛なるを見さりしと雖も此星學上の目的と相伴ふて他に一事業（海上探時を云ふ）の起りしか爲め遂に公克をして偉丈夫たるの芳名を世に顯はさしむるに至れり蓋し我か英國の俊傑を出たせること固より多しと雖も世人をして其傳記を叙述せしめたること彼か如く多き者は未た曾て有らすとは斷言しかたきも亦實に僅々たるのみ而して其航海記事も亦實に許多の發免あれとも之を要するに其精確に於ては公克キング二艦長の原文を主とし最も精密に之に據る者より善きはなし今本篇に於て余輩の取る所は則ち此方向にして之に刪略

を加ふるを憚らす又必要の際には往々當初の發見に見る所の稍ゝ古き語法を現時の言葉に改むるものあり

今此航海の事を說き起さんに曾て一たひ金星の一千七百六十九年を以て太陽面を經過すへしとの算定起るや、當時英王ゼヲルヂ第三世の保護を蒙れるローヤル、ソサイティーと稱する學術協會は一篇の意見を政府に呈しマークェサス若くはフリンドリー諸島の內に於て此經過を觀測せんか爲め一隻の船を艤裝して適當の人を派遣せられたき旨を稟請せり然るに此觀測地の事に就ては恰も此時世界の周航を終りて歸れる艦長ウォーリスより建議ありしに由りソサイティー諸島中のオタハイテ(一名タヒチ)に發りしも此稟請は終に政府の容るゝ所となり愈々遠征船を出たすことに決せり依て海軍大佐サー、フー、パルリサーは之か爲めに適當の一船を準備すへき命を受け乃ち多數の艦船を檢査するの後、終に石炭貿易の爲めに築造せる三百七十噸のエンデーヴォーア號を擇ひたり是に於て海軍本部秘書官スラッデン氏は公氏を其艦長に推薦せしにパルリサー大佐も亦曾て六十門備の軍艦エーグル號に艦長たりしとき公氏を其麾下に用ひ能く其人と爲りを知りしに依り其適任なることを證明せしかは此推薦大に力を得て終に公氏は海軍大臣の命に依り一千七百六十八年五月二十五日を以て海軍大尉に任せられ此遠征艦の艦長たる榮職に補せられたり時に齡幾と四十歲なりき星學官ブラッドレーの同僚チャーレスグリーンは此擧の星學に關する部分に於て公氏を補佐すへきことを命せられ又學術協會の會長パンクス(後ち敘勳者と爲りてサー

ジョセフ、バンクス)も製圖師二名、書記一名、從者四名を携へて之に伴ひ又當時大英博物館に勤仕して博物、物理二學科に長して明敏博識の聞こゑある瑞西人ソランダー博士も此一行に加はれり總して本艦の乘員は八十四名より成れり其食料十八ケ月量、架車砲十門、旋回砲十二門、彈藥及各種の需品も亦之に稱ふて十分に備へたり其樞要なる士官はヒックス、ゴールの二艦士、モリニウ航海師(其一千七百七十一年四月十五日を以て死せし以來はピッカースギル氏)チャーレス、クラーク副艦士(今日のサブリウテナント宮ーメモ)ンクハウス軍醫(其一千七百七十年を以て死せし以來はペルリー氏)なりき

既にして公氏は一千七百六十八年七月卅日を以てデプトフォードより出發し八月十六日を以てプリマス浦に投錨し數日にして海上に進航せり而して英吉利水道を出發するの後九月二日に至て始めて陸を認め同十三日マデーラに着せしか不幸にして副航海師ウェールは海中に落ちて溺死せり九月十九日マデーラを發し二十三日ラチリップの峯頭を認めたり蓋し此峯は高く聳ゆるを以て海上遠き距離より見るへきなり二十九日クープ、ド、ウェルト(綠山岬の義)諸島の一たるボナ、ヴィスタを通過し十月二十五日常例の儀式(初めて赤道を通過する乘組員に潛水せしむること等を云ふ)を執りて赤道を橫截せしか船中糧食に稍ゝ欠乏を告けしを以て一たひリオ、ジャチーロ(セントジャニュアリウスの日に於て發見せしを以て乃ち其名に從て之を呼ふ)に寄港せんことを決し乃ち十一月十三日を以て同處に着し此に必要の供給を得て十二月八日再ひ此港を拔錨せしに二十二日に至り一種異樣のゴトウクジラ大數ありて本艦の周圍に集り其長さ凡十五呎皆一種の灰色を帶ひたり墅

マデーラフンチャル灣

日艦中に在て月蝕を觀測せしか異る哉同朝七時西方に一の微小なる白雲を現出し之より一の火線を發せしか忽ち判然として爆發の狀あり既にして雲忽ち散したり此他一千七百六十八年は別に記すへき出來事なくして終れり

一千七百六十九年一月四日艦中より陸地の現はるゝを認め誤つて之をペピース島と爲し之に向て進航せしか近つくに迨んで其陸地と認めたるは陸地に非すして海員の所謂霧堆（フォグバンク）と稱する景の一と知られたり

十四日に至りルメール海峽に入りしか風浪荒く潮爲めに暴漲して其流勢艦に反抗し再ひ之より逐出たされたり仍て僅に一小澳の入口を認めて之に投錨す公氏は之を名けてセントヴィンセント灣と稱せりソランダー博士及バンクスの二名海濱に上り是迄歐洲植物學者の未た見聞せさる異樣の草花一百餘種を拵へ夜九時頃に歸艦せり

十五日、日曜を以てラルラ、デル、フューゴ内此部分の海岸より凡そ一里（是より以下單に里とあるは皆海里と知るへし）を隔て一小澳の前面深さ十二尋の處に於て石花岩の上面に投錨せり時に二名の土人あり海岸に下り來りて我ゝの上陸を待つ者の如くなりしか此に一も避泊所のなかりしより艦再ひ錨を揚て去りしかは土人も亦去れり同日午後グッドサクセッス灣に投錨し（成功の義）艦長はバンクス及ソランダーと相伴ひて飲水を得るの場所を探り且つ土人と應接すべき爲めに上陸せり而して二氏艦長に先ちて凡そ五十間餘を進みし時此に二名の土人の坐するあり二氏を見るや莞爾として起ち上り其手に拵ふる所の小杖及ブ

ームレランク（敵軍に投入する兵器の名）を地に投して和親の意を示し然後ち其背後數歩に居りし夥伴の許に退きしか忽ち又形容を以て我〻外客に尙ほ進むへきの意を示せり乃ち我〻を遇するに頗る交友の禮節の見えしかは其禮節に報ゆる爲め若干の扣鈕及飾珠を彼等に分與せり斯くして彼我の間に信用一たひ成立ちしかは自餘の艦員も亦後より加はり極めて平和の狀を以て土人と談話し終に公氏及其一行の人〻は土人三名を伴ふて歸艦し之に衣服を與へて着せしめ又食品を與へて歓待せしに彼等大に之を珍味となし其一部分を海岸に携へ歸りしか其時ラム、ブランデーの二酒に至ては之を味ふの後形容を以て其咽喉を燒くことを示し恐れて再ひ之を飲むことを辭せり彼等には孰れも高さ五呎十吋（我か五尺八寸七分）を超ゆる者なかりしも其體格は四肢の小なるに拘らす皆大にして强壯に見えたり面は廣くして平かに頰高くして鼻は扁き方に屬し鼻孔廣く眼小にして黑く口大なれとも齒は小にして並ひ善く髮は直にして黑く耳及額に垂れたり而して其額は一般に茶褐色及赤色の繪具を以て塗り髭は恰も亞米利加の原住民の如く全く之を有せす其衣服は海豹及グッニコー（獸名）の皮にして之を肩の周圍に懸け又男子は頭に一と房の毛糸を戴き之を額に垂れ背後に於て或る動物の蹼（ひくすじ）を以て之を結へり又男女共に多くは身躰の數部を赤色茶褐色及白色を以て塗飾し而して頰及鼻へ横に三四の直線を刺繡せり婦人は各〻脚踝（くるぶし）の周圍に小なる紐を纏ひ且つ中身を繞りて皮のたれを着し又往々背に兒を負ひ一般に家内の勞力及賤業に使役せられたり

パンクス、ソランダー、ブューチャンの三氏は從者と共に内地を散策し同夕歸るべきの見込を以て出發せ

り此日は朝來甚だ快晴なりしが後ち天候變じて漸く寒氣を催し來り風次第に其鋒を尖くして雪の降り始めしより頗る不快を覺えたるが一行は之にも拘らず其通過し來りし路の沼澤なりしより更に好良なる路を覓めんと欲して尙ほ其行を續けたり然るに此に一同をして大に惑はしめたる出來事ともそ起れり即ち一行中ブューチャン偶々途に痙攣を發したれば疲勞したる數輩此に留りて之を看護しパンクス、ソランダー、モンクハウス氏は尙ほ進みて百種の植物を發見し大に其勞苦を慰する所ありしに時に雪大に降り來りしかば進行を此に止どめ漸く雪中を踏分けて一行の許に歸れり而してブューチャンは大に回復の色ありしも時既に夕八時に垂んたりしソランダー博士は經驗上よりして極寒と疲勞と相合するときは容易に抵抗すべからざる眩氣を發する者たるを知れるにより其同行諸友に取て極めて不快の現況なりしに拘らず頻りに運動を連續すへしと勸めたり即ち其言ふ所「坐する者は眠るならん眠る者は再ひ覺めさるならん」との二句にありしかは各人奮つて心に之を決したる者の如くなりしも寒氣の俄然嚴烈を加へたるより終に最も恐るへき結果を生せんとするの勢を呈し何そ圖らん上述せる如く人を說諭したる博士にして自ら第一に休憩を主張するの人とならんとは乃ち博士は一行の人〻の最も懇切に勸むるにも拘らす終に雪中に坐せり仍て之を眠らしめさるには一同大に辛勞を盡せり然るに又黑人種從僕の一人なるリッチモンドも亦疲勞の餘り殆と絶息して將に博士の例に倣はんとせり是に於てブューチャンは一行と共に最寄に便宜の地位を求めて火を燃やさんか爲めに出行きパンクス外四名は博士及リッチモンドと共に後に殘れり斯くて

其後博士とリッチモンドとは一行の切なる勸告に勵まされヤット進行し始めたるか又途に沼澤ありて既に其大半を横截したる時に當りては最早一歩も運ふこと能はすと言ひ出し殊に此時リッチモンドの如きは若し此に留らんには忽ちにして凍死すへしと諫められたるに答へて既に甚しく疲勞したれは死は却て己れに取て苦痛を忘るゝの藥石なるへしと陳したり而してソランダー博士は敢て進行することを欲せさるにあらさるも先つ少しく眠を取らさる可らすとて前に吐露したる自言に全く反對の事を陳し二名共に意を決して坐せしか僅に矮樹の幾に支へられしまゝ暫時にして忽ち熟睡に入れり斯くて此時先發の一行より前面凡そ一哩の四分一に當る處に火を燃やしたることを報道し來りしに因りペンクスは博士を喚起したるに其坐に就きしより未た數分の時間をも經さるに早や殆と四肢の用を失へり然し博士は之にも拘らす尚ほ進行すへきことを諾せしかリッチモンドは之を起さんか爲め百方盡す所ありしも全く其功を奏せす彼尚ほ依然として動かさりし仍て已むを得す寒氣に感したることの最も少く見えたる一の水兵と他の黑人種從僕とに之を托して一旦此を去り他の二名煖を取り此二名に代はるに足るを待て之と交代することになせり既にして博士は甚しき困難を以て火邊に携へられしか彼のリッチモンドと共に殘れる者と交代せしむるか爲めに派遣せる一行は竟に彼等を認むることを得すして歸り來れり

既にして降雪凡そ二時間に渉り今は再ひ彼の三名を見るの望全く絶えたりしか凡そ十二時頃に至り遙か隔ちたる處に一の叫聲あり之を聞き認めてペンクス外四名は直ちに進行し途に水兵に逢ひしに彼尚ほ歩

行を爲すに足るへき氣力を存せしを以て直ちに之を火邊に携へ然後ち尚を進みて他の二名を搜索し恰もリッチモンドの佇立せるを認めしに其兩脚既に其用を爲さす又他の黑人は地上に倒れて全く其感覺を失ひ居りしかは之を火邊に携へんとして百方盡力せしも竟に其効なく又此に焚火を爲さんとせしも既に降り積れる雪と尚ほ降り盛かる雪との爲めに如何とも之を爲すことを得す實に進退維に谷りしかは已むを得す或る樹枝を折りて一の臥床を作り之に此不幸なる黑人二名を載せ尚ほ其上より此樹枝を以て厚く之を蔽ひ然後ち乘てゝ天運に任せたり然るに一行の人々は此憐むへき徒を火邊に携へんとするの勞働に從事し之を遂けんとして凡そ一時半の間寒氣に身を暴露せしより其二三名は行きて救はんとせし黑人と同樣に寒氣の爲めに苦められゝに至り殊にペンクスの他の從僕ブリスコーの如きは漸く其感覺を失はんとせり斯くて一同遂に火邊に達したるも極めて不快の狀を以て一夜を此に過こせり

此日、本艦より出發せし一行は十二名より成りしか其中二名は既に死せる者と斷定せられ一名は再ひ艦中に歸るを得へきや否を疑はれ又ブューチャンは其痙攣の再發せんとするの恐ある者の如くなりき而して彼等は其本艦を隔てると鬱蔚なる森林を經て長日一日程の遠きに在ることを算知せしか又其食糧の貯へは出發の際僅々數時間の旅行に備へたるに過きされは此一行に一食せしむへきの殘量をも有せさりき

十七日黎明に至り四方を眺むるに皚々たる白雪の外一も眥睫に映する者なく殊に風は吹き續きて其勢甚た烈しかりし依て旅行は全く實行すへからさるものゝ如く思はれたりしか朝六時頃に至り雪間日光の洩

るゝを見て聊か愁眉を開きたり夫より一同本艦に向ひ歸路に就かんことを陳出するや先つ使を派して不幸なる黒奴の安否を探らしめしに悲ひ哉終に其訃音を携へ歸れり是に於て一同朝十時の頃を以て出發せしに未た三時間ならずして偶ゝ海岸に出て其先きに慘憺たる豫想中に期せし所よりも本艦に接することは甚だ近かりしかば且つ驚き且つ悅び其狀譬ふるに物なし畢竟此邊は元と一直線に丘陵に攀登らずして幾と圓形に内地を迂廻せしを以て海岸までの路程を誤算せるも亦宜ならずや

二十日パンクス及ソランダー博士は再び海岸に到り未だ曾て世に知られざる貝殼及植物の百種を蒐集し午餐を終るの後内地に上ること凡そ二哩なる一の村落に巡行せり其位置一小丘の上に在りて森林を以て之を蔽ひ凡そ十二軒の小舍より成り之を建るに技術若くは一定の式を用ひず唯數個の丸木を棒糖形に寄せ掛けて之を組立て其丸木を風上の方に於て草及樹枝を以て蔽ひ風下の方は之を開放して火竈并に入口の用に供せり土人の臥床及椅子に供する物は唯小草の外に出でず其器具は手に携ふべき籠背に掛くべき小袋及水を容るゝの勝胱にして土人は其頂上に設けたる孔より水を吸飲せり其村落は一種族の住する所にして男女兒童を併せて凡そ五十名より成り其携ふる所の弓矢は能く磨きたる木を以て奇麗に且つ巧に之を製作し其矢鏃は硝子若くは燧石にして極めて巧に之を附着せり此硝子及燧石と共に綿布、指環、扣鈕の如きもの、其製作を知らざる此人種中に存在する所より觀察すれば此土人は時として北方に旅行する者と斷定すべきなり何となれば船舶のテルラデルフューゴの此部分に來りしことは未だ曾て之あらざれ

ばなり又此土人等は我が兵器を見ても敢て之に驚く樣子なく其用に至ても善く之を知れるが如し蓋し此土人等は人類の甚だ劣等に屬する者にして常に寂寥たる荒野に彷徨し唯貝類のみを食して一生を貧苦の中に送り技工的の器具とては極粗の者をも之を有せず食物を製するに必要なる者と雖も亦然り

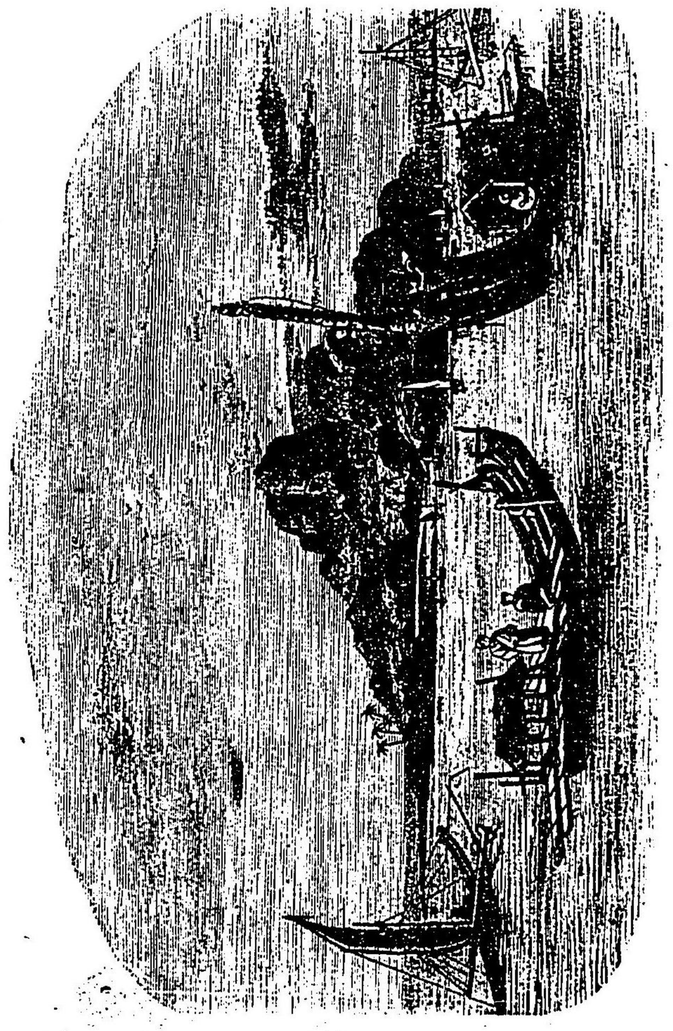
一月二十日公氏はホルン岬に向ふて出艦せり時に天氣甚だ靜穩なりしかばペンクスは島を射擊する爲め小艇を卸して出行き水切り鳥（海鴟の一種）及信天翁（アルバトロス）若干を獵して歸りしが其信天翁は甚だ好食品となりて我々を喜ばせたり當時航海者はホルン岬を回航することを以て百險の巢窟を冒すが如き思をなせしよりマゼラン海峽を通過するの危險少きに若かずとの說一般に行はれしがエンデヴォーア號は之に從はずして此評即ち海員の所謂ゼ、ホルンを回航せしに恰も英國クントの海岸なるノアス、フォアランドを回るに均しく敢て危險を覺えざりき殊に此日は天晴れ風穩にして人に爽快を感ぜしめたるが本艦は海岸に沿ふて航行せしを以て岸上の風景は手に取るが如く明白に之を認め得たり公氏はグッドサクセッス灣を測量して海岸を追索せしが從來ラルラ、デル、フューゴの此部分に係る海圖は一千六百二十四年に於て和蘭の海軍將官ヘルミットの作れる粗畧なる見取圖と同地の發見者シウテン及ル、メールの手に成れる所の前者より尙ほ一層麁惡なる圖とに據れるものなりしが故に殆ど其用を爲さゞりき

二十五日齡凡そ二十歳の一海兵（マリーン）あり窃盗の誣告を受けたりしか痛く之を憂へたるものと見え初夜の暗黑に乘じ自ら海中に投じて溺死せり

四月四日十時頃パンクスの從僕ピーター、ブリスコーは南方に當りて凡そ三四「リーグ」(一「リーグ」は三海里)の距離に陸地を認めたり公氏は直ちに之に向ひ駛行すべきの令を下したるが到達して之を見るに楕圓形の一島にして其中央に鹹湖のありしより之に鹹湖島(クリーンアカウンド)の名稱を下せり此島は四境皆卑低にして狹地多く殊に南方に甚し而して其狹地の水瀕は僅に岩礁の一脈によりて成れり北方には外觀の相同き者三つあり之を概言すれば森林島の數個に相別れたるもの丶如し北方は其一里以内に在て錘索百三十尋を縋下して尚ほ海底に達することを得ず且つ一の好錨地もなし又土人等の數名海濱に在るを認めしに身丈高くして甚た大なる頭を有するが如く見えたり恐らくは或る頭縛物の爲めに其大さを增したる者ならん歟其面銅色にして頭髮黑く中には身丈に二倍する棹又は槍を携へ船と相對して立てるを見たり彼等は皆裸躰なりしが本艦の島に接して過ぐるに迨ひ其退散するを見れば輕き衣服を着し椰子樹の多少繁る處を以て其住居とせり五日エンデヴォーア號は順風を以て其進路を續け凡そ午後三時の頃に於て西方に陸地を認めたり其地低くし形、弓の如く周圍十乃至十二「リーグ」と覺しく其長さ凡そ三四「リーグ」にして幅凡そ二百「ヤード」なり此島に煙の揚りし所を以て考ふれば人の住する者なること知るへきなり之に弓島(ボウアイランド)の名を下せり

四月十日エンデヴォーア號は風浪暴き夜を經過してオスナブェラ島の見ゆる處に來れり土人は此島を呼んてマイアヤと稱せり(此島は一千六百六年キュロス始て來り名けて之をデザイと稱し一千七百六十七年ウォーリス之をオスナブェラと名け一千七百六十八年ブーゲンヴィール之をブードアルと稱せしか公氏は之を土名に呼へり)此島は圓形にして其周圍凡そ四里、半は岩石にして半は樹木にて蔽へり十一日オタハイテ島即ち我か英國の艦長ウォーリスの所謂ゼオルヂ、ゼ、サアド(ゼオルヂ第三世の義)島を認めたり此島はソサイテー群島中の主要なる者にして一千六百六年の昔日に於て西班牙の航海者キロス始て之を發見しサギタリヤと名けしものなるか是に次て此島に到りし歐洲人は我かウォーリス艦長なり即ち同氏は一千七百六十七年に於て此島に到り現場に就て視察する所ありしに疑にキロスは同島に就て記述せし所全く其實を得さりしより彼を以て此島の發見者と爲すを甘んせさりき公氏は即ち之に次きて此島に到りし歐洲人なりとす

ソサイテー群島は總して五大島と數多の小嶼とを以て成り其大島はオタハイテ、アイノオメーチヤ(又曰くマイテヤ)マイアヴィチ、チチュアロと稱し皆な南緯十六度三十分乃至十七度五十四分間西經百四十八度五十三分に在り當時オタハイテ島は其國の治を寘く所なりしか其佛蘭西の所領となりし以來も亦佛國の治所此に在り此島は二個の判然たる山より成りて其高さ六千呎乃至八千呎に上り雙方の間は幅三里許の低地峽を以て分たれ其全周百十餘里にして其海岸は石花礁を以て圍繞し其地の成形は火山質なるも溪谷及山腹は極めて豐饒なり氣候は温暖にして其温度夏日にして六十八度乃至八十六度の間を昇降す一千七百九十七年宣教師の始めて此に至りし日に於ては人口約二萬を有せしに其二十年後には約五千人に減せり然れとも一千八百二十年以來殺見を禁したると新宗教の土人の腦臆に及ほせる影響とに由り人



オタハイテ(ウヒルム)ノ光景

口頓に一千七百九十七年の準度に復し今は再ひ二萬を數ふるに至れり(一千八百五十年龍動府刊行エス、エス、ヒル氏著トラヴェルス、イン、セ、サンドウィッチ、エンド、ソサイティー、アイランツ(サンドウィッチ及ソサイティー諸島旅行記の義)エンデーヴォーア號は四月十二日の朝まて眞の無風なりしか爲めオタハイテに接近することを得さりしか此時風起り數隻の蕃舟相連りて本艦の方に來るを見受けたり然れとも全く近つき來らんとする者少く又其來りし者に就き本艦に上らんことを勸めたれとも敢て之に應ずるものなし此土人等は稗き車前(芭蕉の一種)及樹枝を携へ來りしにより之を本艦の舷側より取上け其窠望に由りて之を索具の見え易き部分に挿せり是即ち和親の徴なるか斯の如くするの後本艦の乘員は彼等か賣品と爲さんと欲して携へ來れる椰子、甘蕉麵果、林檎、無花果等を購買せしに孰れも皆甚た賞玩すへき者たりき

本艦は終夜漂泊し十三日の朝を以てオタハイテ島に於けるポート、ロヤール港に入り海濱より半里以内の位置に投錨せしに數多の土人直ちに蕃舟にて乘出し麵果、椰子、林檎及若干の豕を携へ來り飾珠及其他の小間物を得んが爲め艦員と貿易を行へり其麵果を結ぶの樹は凡そ七葉樹の大さを有し葉の長さ幾と一呎半楕圓形を爲して頗る無花果の葉に類似せり其果實は薄き皮を以て包圍し其仁の大さ人の拇指に彷彿たり此果の實質は則ち稍ゝ新しき麵包の質に似て其白きこと皮を剥きたる扁桃の如く其味甚た美なり然れとも之を食するには燒かざるべからず

此時エンデーヴォーア號の艦中に來りし土人中オワウと稱する年長者あり曩に我がウォーリス艦長と共

に此島に到りしゴール及其他の人は彼と既に面識あり是れ我か一行には極めて必要の人物と察したれば只願之が歡心を得んことを勉め其望には一として應ぜざるなからんとせり

公氏は土人と貿易の基を固くせんか爲め艦中各人に於て遵守すべき必要の規則數條を制定せり其規則の大要を掲けんに「本艦乘組の各人は葛藤喧諍を防く爲めオタハイテの住民を遇するに仁愛を以てし百方善良の策を盡して是等と修好することを勉むべし」「本艦に屬する士官水兵若くは其他の人たるを問はず特に土人と貿易するの命を受けたる者を除くの外は特許なくして各種の食品果實若くは其他本島の産物と貿易し又は貿易せんとするを禁ず」「何人たるも本艦各種の船具を私用し或は之を以て土人と貿易し又は貿易せんとするを禁ず」「鐵類若くは鐵にて製造したる物又は織物類若くは其他艦中の有用品は特に食品の外何物の爲めにも之を交換に供すべからず」等にして此規則は公氏之を手署し之を遵守せさる者には海軍に於て鑑長の命令を犯す者に當つへき刑の外更に相當の罰金を定めたり

本艦既に堅固に繫泊して後ち公氏パンクス及ソランダー博士は兵裝したる一隊と來訪者オワウとを率ゐて海濱に上りしに數百の土人畏敬して之を迎へたり仍て我か一行に於ても平和の交際札を示せしかは彼に於ても亦我か一行の上陸せし處より更に休憩に便なる地に案内せんことを申出てたり是に於て一行は麵果及椰子の樹林を經て凡そ四哩の路を巡回せしに是等の樹林と相混して處々に土人の住家を見たるも皆壁なき小舍より成れり而して其旅行の途中に於て家畜の目に觸れしものは唯僅少の家雞と豕とのみに

して又其案内者を始とし是まて見し所の人民は一も島中に在て高位を占むる者に非ることを知れり本艦の乘組人中に嘗てドルフィン號に乘込みてオタハイテに在留せし者あり其説に曰く元と此に女王の住居ありしか今其跡を發見せず蓋し必ず之を撤去せしものならんと

翌朝艦員の未た本艦を出てさる前に數隻の蕃舟、人を滿載して本艦の周圍に來りしが我が艦員は其被服を見て稍ゝ優等の種族たるを徵せり斯くて其中の二名本艦の内に入來りしが各々一人の友人を定め即ち其一人はパンクス一人は公氏を擇へり而して其結交式とも稱すへき儀式を見るに其衣服の多分を割き取り之を其契りたる友人の身に着くるに在り公氏及パンクスよりは各ゝ小間物若干を彼に與へ以て其禮を返せり是に於て彼の二名は其新知人に向ひ相携へて己れの住居に到らんことを形容を以て請ひしか二士は此時土人と知己に爲り且つ便利なる港を看出さんと欲せし折なりしかは乃ち其請を容れて同行せり又パンクス、ソランダー博士及其他の數士は二隻の端艇に乘り本艦より凡そ三里の距離に於て土人の群集せる處に上陸せしか土人等は之を一大家屋に導き此家屋に於てツータハーと稱する中年の男子に紹介せり而して一行の座に就くやツータハーはパンクスに贈るに雌雄の雞各ゝ一羽及清香馥郁たる織物一反を以てしたるかパンクスも亦一の贈物を以て此禮を返せり既にして一行は他の大なる家屋數ケ所に導かれて其構内を自由に徘徊し然後ち海濱に沿ふて逍遥せしに途にチュボウライ、タマイデと稱する他の酋長に出會ひ之と前記の式を以て和親を締結せり是に於て酋長は一行に向ひ自ら製する所の食品あるを以てし

若し之を食せんと欲せは則ち之を供すへしとの意を示せしかは一行は之を懇望して麵果車前實及魚類を喜ひて食せしかソランダー博士は此間に双眼鏡を失ひたり仍て之を酋長に訴へ以て其饗食を中止しバンクスは起ちて小銃の臺尻を以て地を打ち其訴を強迫せしに土人等大に之を恐れ酋長及其他僞等の輩數名を除くの外は總て屋外に疾走せしが酋長は眞實を面に顯して飽までも之を收回せんことを勉むべき旨を告げ且つ之を收回すること能はざるときは新しき織物を以て其價に相當すべき反數を償ふべき旨を附言せり然るに暫時にして先つ其袋を携へ來り然後ち速かに双眼鏡を齎し來りければ此事は遂に平和に局を結ひ一行は凡そ夕六時を以て本艦に歸れり

十五日土曜の朝數名の酋長は豕麵果及其他の食品を携へて艦中に來り之と交換して麻布飾珠及其他の小間物を受領せり艦長はバンクス及數名の士官を率ゐ其滯留中の防禦に充つべき堡砦の建築に適當なる地を撰ぶ爲め海濱に至りて其地を相し之に繩張をなせしも土人等の大數は之を見て其樣子最も平和なりき艦長の一行は其逍遙中豕及家禽を見ること少なかりしかば是必ず内地に追遣りしならんと疑ひ一下士と一隊の海兵とをして天幕を衛戍せしめ一同森林に入らんことに決せり而して此探究には數名の土人之に伴ひしか其進行の途次天幕の衛兵より二回の發銃を爲したるより其變を聞きて一同之に驚きたり是に於てオワウは艦長の一行を呼集めて諸の土人を驅り散らし特に忠實の徵とし本土の習慣に從ひ樹枝を折りて誓ひたる三名を留どめ之を引具するを以て適當とせり斯くて一行は天幕に歸り其發銃したる次第を聞

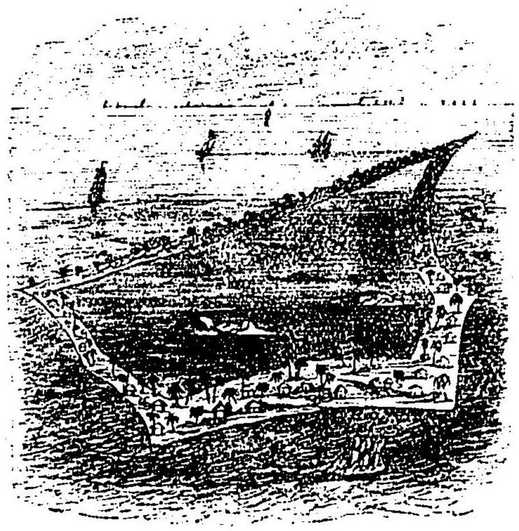
て一の土人あり衛兵の一小銃を盜み去りしが其隊を指揮せる若年の見習士官は輕卒にも海兵に發銃すべきの令を下し爲めに數多の土人を傷けて遂に其犯者を射殺せりとの事を知れるかバンクスは甚だ其所爲を喜ばざりし然し既に過去りたる事の回復すべからざれば到底土人と事を整へんことを勉むるの外他に策なしと信じ乃ち一老人をして中裁の勞を執らしめたるも翌朝に至りては海岸に土人を見ること甚だ少く又一人として艦中に來る者はなかりし是蓋し其前日に受けたる酷待を尙ほ忘れざりしものならんかオワウの遂に一行を棄てゝ去りしより益〻之を確めたり斯る事情なるを以て艦長は本艦を更に海岸に近づけ其堡砦を建つるが爲め既に繩張せし場所に向ひ一齊打方を爲し得べきが如く繫泊し同夕數名の士官と共に上陸せしに此時に於ては忌心も既に薄らぎけん土人等其周圍に集り來りて通常のごとく貿易を行へり

十七日ブューチャンを喪ふの不幸に遭遇せり同日チュポウライ、タマイデとツークハーの二名車前實の枝若干を携へて本艦を訪問せしが其枝を收受するまでは一も艦中に入るを欲せざりき

十八日堡砦の建築に着手せり艦員の若干は壕塹を掘ることに從事し又若干は小枝の束を截ることに鞅掌し土人も亦之を助けたり斯くて此日土人等麵果及椰子を携へ來りしが其量の極めて許多なりし爲め我か食料の不足なきことを彼等に知らしむるの必要を感じければ已むなく之を拒絶せり此夜バンクス始めて濱岸に宿泊せしも土人中一も其天幕に近づかんと試むる者なかりし然し尙ほ防禦の爲め天幕の周圍には

番兵を配置して警戒せり

既にして堡砦線の外部に市場樣の者を設けしに相應に商品の供給ありたりチュボウライ、タマイデはパンクス及其他我が紳士の許に屢〻客たりしが土人中に於て食刀肉叉を用ひ人と試みたる者は實に彼れ唯一人のみ彼は則ち極めて歐羅巴風を取ることを好めり軍醫モンクハウスは暫く外出して夕景の散歩を爲し曩に天幕より射殺されし者の死骸を見たることを報せり其死躰は生前の住家に密接したる一の假屋中に棺車を作りて其上に置けり其棺車の構造は木にして高さ凡そ五呎の柱を以て之を支へ蓆を以て之を蓋ひ其上に白布を敷き死骸の側に一の木笏と其頭の方に二個の椰子殼を置き足の方には一把の綠葉ありて之に乾燥したる小樹枝を纏結し以て之を地に挿し且つ之に接して凡そ椰子の大さの石を置けり而に小囊を懸けて之に燒きたる麵果數片を入れたり土人等は我が軍醫の其死骸に接近するを見て甚た喜ばして又稱き車前樹を植え其外部に棕櫚の幹を眞直に立て之に一の椰子殼を載せて水を盛り且つ一柱の側ざりしが其心情は明かに容貌動作に見れたり



南海ニ於ケル石花島

二十二日一行は此國の樂手若干の爲めに慰められたりしが其樂は日耳曼笛に稍〻類似したる樂器を以て之を奏し其奏者は之を奏するに口を以てせずして鼻を以てし他の者は之に伴ふて唯一調子の歌を謠へり又是等の土人中往々我が方へ斧を携來り其研磨又は修理を求むる者あり是れ多くは我國のウォーリス艦長及ドルフィン號の乘組人より得し者なるが其中にありし一の佛蘭西斧は審査の末之をド、ブーゲンヴィール氏の此に遺せるものなりと推量せり

二十五日數個の小刀紛失してパンクスも亦之を失ひし一人なりければチュボウライ、タマイデを以て是が窃取者と爲して詰りしに彼の酋長は兩眼に涙を泛へ若し自分にして窃盗の罪あるものならんには咽を斷ち切らるゝも厭はざるべしとの意を形容にて示せり然れども彼の無辜なりしに拘らず土人は總して窃盗には甚だ長じたる者と知られたり何となればパンクスの小刀のみは全く從僕の置き違ひなりしも自餘の小刀は皆後日土人の一人より之を差出したればなり

二十六日回旋砲六門を堡砦に架せしに大に土人を驚かしめたり漁夫等は己等に向て其砲を發せられんとを恐れ其處を撤し去れり翌日チュボウライ、タマイデは三名の婦人と一名の友人を携へ堡砦に於て會食せんが爲めに來り會食の後自己の家に歸りしが其後少時にして再び歸來り彼訴ふる所あり曰く貴艦の一屠夫來りて我が妻に石製の手斧と釘と貿易せんことを求めしに我妻之を肯せざりしかば直ちに咽を斷切らんとて大に之を脅迫せりと因て其者を糺せしに曩に艦長が土人と貿易する爲めに定めたる規則の一を犯

したること明白なりしかは乃ち之を艦中に捕へ彼等の目前に於て杖刑に處せしに其第一杖を下すに當り彼等は之を仲裁し只管犯者を解放せんことを懇請せしが其容れられざりしを以て大に感激したる者の如く皆潸然として涙に咽へり

エンデヴォーア號の航海師モリニウはオベリアと稱する一婦人を認め嘗てウォーリス艦長と共に此地に在りし時本島の女王ならんと推斷せし者と同一なることを明言せしかは各人の眼は今擧つて此婦人に注き晉てドルフィン號の乘組人か同婦人に就て喋々せし所の談話及其艦長の記事中に縷述せし所を想ひ出だせり今婦人の容貌骨格を言はんに身丈高くして軀幹は寧ろ肥大なる方に屬し其齡凡そ四十歳にして皮膚白く兩眼涼しく甚だ快活の態度を呈し頗る美貌なりしと雖も其艶色は今將に衰へんとするの境に迫れり斯くて我か艦員より艦中に到らんことを申出しに婦人之を容れて共に來艦せしかは則ち之に與ふるに數多の贈物を以てし就中其婦人の頻りに打眺め居たる小兒の人形を以て其一と爲せり既にして公氏自ら彼を伴ひて海濱に到りしに其上陸せるや婦人は返禮として豕一頭車前實若干を公氏に贈り之を堡砦に運搬するに行列を以てし彼及艦長之に殿せしか途に偶ゝツータハーに邂逅せり蓋しツータハーは此地に王たるに非るも當時其主權を總攬せるか如き人物なりしかは婦人の携へたる人形を一見するや彼は深く嫉妬の情を見はせり乃ち其情を去らしむるには更に一個を之に與ふるの外他に和情修交の道を發見すること能はさりき

三十日土人のトミオなる者疾走して天幕に來りバンクスに懐き附き我より彼に與へたる物の爲めチュポウライ、タマイデ將に死に垂んたることを告げ直ちに彼の許に到らんことを懇請せり仍てバンクスは直ちに行きて之を見しに其病の甚だ篤きことを認めたり時に彼嘔吐中にして一の葉を吐出せしかは土人等は是を以て幾分の毒を含む者と爲せしもバンクスは其葉を檢察するにおよんで全く曩に土人等か艦員の或る者より請受けたる煙草の葉なることを發見せしかは乃ち患者に椰子乳を飲ませしに忽ちにして回復しけり

五月一日近頃艦長と會食せしことありたる一酋長平素己を扶け食せしむるの列に居れる數名の婦人を携へて艦中に來りしが會食の際艦長は扶けを待ちて食するの式を廢するならんと想像し數種の食品を之に與へしに酋長は一も之を食せんとせさりき若し其從婢中の一人之を扶け食せしめさらんには彼竟に會食せすして去りしならんと察せられたり此日午後士官等四分儀及其他の器械を海濱に携へしに翌日四分儀を用ひんと欲するに當り既に紛失して在らず仍て堡砦の内外に嚴密なる搜索を行ひ且つ著大の褒賞を懸けて之を索めしに一も其効を奏せずバンクスはグリーン及其他の數士を伴ひ恐らく森林に入らば該件に就き何等の報か聞く所あらんと思料し乃ち之に向て出發せしに途にチュポウライ、タマイデ及數名の土人に邂逅せしかは乃ち其四分儀を失ひたること及之を窃取したる者は必ず其國人なるべきが故に若し其隱匿せる場所を示さゝるに於ては飽まて止まさることを之に語れり既にして幾分の穿鑿を遂くるの後終に

其機械を回復したるか之を檢視せるに既に片々に解き放ちありしも幸にして實際の損害は一も受くる所なきを得たり

此夕諸士歸り來りしにツータハー堡砦の内に拘留せられて多數の土人砦門の周圍に群集し其酋長の成行に就き憂慮措く能はざるの情を示し居たれば一同は之を見て大に驚きたり然れども其拘留の起りを尋ぬれば是れ全く土人の行爲に出てたるものなりと謂はざるべからず何となれば其次第即ち左の如くなれば

なり

土人等は初め公氏か兵裝したる一隊を率ゐて内地に行けるを見るや之に驚きて此夕堡砦を去り一の蕃舟に乘りて將に此灣を出でんとしたり然るに此時本艦の指揮を掌れる艦士は豫てより何等の蕃舟たりとも出灣せしむべからずとの訓令を受けいたることとなれば何とて猶豫すべき乃ち之を留めんが爲め一の端艇を出たせり而して其艇の蕃舟に接近するや土人等は多く身を跳らして海中に入れるがツータハー即ち其舟中に在り仍て之を捕へて堡砦司令官の許に送りしに其士官全く之を囚虜と視たるより乃ち拘留するを正當なりと判斷して是が執行をなせるなり乃ち此時や酋長は自ら死に處せらるゝことゝ期しいたるに公氏の之を視るや直ちに解放せしめたりしかば本人は固より此時茲に群集し居たる土人は皆大に悅ひ合へり然れども土人等の是よりして恨を懷けることは其市場に食品の供給を欠けるを以て知るべきなり

五月三日食品に極めて欠乏を告けしかはペンクスは多少の困難を嘗めチュポウライ、タマイデに就て僅に

土人梅摸

數籠の麵果を得たり四日に至りツータハーより人を遣はして先きに差出したる數頭の豕に對する報酬として斧一挺肌衣一枚を請求せり仍て五日早朝を以て公氏はペンクス及ソランダー博士と相伴ふてツータハーの使者一名を携へピンチース艇に乘りて出發し速に其居住せるエパーンに達せり而して其着するや先づ海濱に大數なる土人の待受けたるを認め直ちに導かれて酋長の許に到りしか土人等は怨を抱けることの昨今なるにも拘らず其國語を以て歡聲を發し「卿はツータハーの友人なり」と號呼せり此時ツータハーは一樹の下に坐し數名の老人其周圍に立ちしかツータハーは形容を以て一行に向ひ坐に就かんことを勸め且つ返贈を請ひしかは公氏は即ち之を與へ併せて肌衣及幅廣き織物の上衣を贈りしにツータハーは其上衣を着し深く其厚意を謝せり其後一行は導かれて酋長の家屋の一方に在る大なる中庭に至り此に本土の風習に從ひ相撲の饗應を受けたりツータハーは自ら相撲場の上端に坐し其兩側に重立たる者數名を從へ以て相撲の審判者と爲せり其相撲を行へる方法を記載するに左の如し

十名乃至十二名の力士場内に入り種々簡單なる搦挑の禮式を爲すの後互に組合せ各〻純然たる力に由て敵手を投けんと勉めたり其法雙方互に手を把り又は身躰の他の部分を握り些少の技藝をも用ひずして相鬪い把持の堅固なる方若くは筋力の强剛なる方敵手を其背後に投倒すに至て一段落を爲せり是に於て彼の老人は聲を擧げ二三語を以て其勝を稱譽し一種の音調にて之を反復し尙ほ三回歡聲を發せり斯の如くにして又他の取組に移り雙方の力士若し一分時間にして互に投けること能はざるときは雙方の承諾又は

其友人の仲裁に由て之を引分けたり此時本場の式を司れる一人あり手に棒を携へ觀客中の秩序を保たんが爲め前に押し迫る者等あるときは直ちに其携ふる處の棒を以て之を打てり又相撲中に一分時間舞踏を行ふの組合もありしが各自其相手に至ては毫も之を擇はず唯相撲に勝を得て觀客を樂ましむるの一途にのみ勉めたり斯くて其終りを告ぐるや太古の相撲會に於ける如く會食の爲め豕と麵果との用意成れりと一行に告げしが主人は其豕を一行の前に供せずして端艇に運ばしめたり仍て一行は端艇内に於て快樂なる饗應を受くることとならんと察したるにチュポウライ、タマイデの望により更に又本艦に歸り來れり是に於て一行は終に約束の食物を得て大に滿足したるが酋長及其諸友も我が艦員と與に飽食せり斯くて一行は此調和に就き實に魔術に類せる効驗を見たり即ち土人等はチュポウライ、タマイデの本艦中に在ることを知るや忽ち諸種の食品を澤山に堡砦に齎し來たれり

此時に當り恰も好し鍛工場の設立成りて已に工事を始めしが是又土人をして更に我を感戴せしむるの機關とは爲れり即ち公氏は其鍛工に許すに其閑暇仕事を以て嘗て土人かドルフィン號より得たりと察せらるゝ所の古き鐵具の改造を爲し與へんとを以てせしか是れ益ゝ土人に荷恩の情を起さしめたればなり

十日に至り一行は好く耕作したる土地へ甜瓜及其他植物の種子を蒔しに芥子の外は一も發生するものなかりき惟ふに是れ總て小瓶に詰め松脂を以て其口を密封し全く新鮮の空氣に晒さゝりしかは遂に腐敗したるものならんか此日一行は初めて土人の此島をオタハイテと稱することを知れり是れ今日同島を他と

區別するの名稱たり一行は是等の土人に已等の名を敎へんと勉め再三之に發音せしめんと試みたれとも終に其効を奏せさりし後ち土人は自己の工夫に係る新名を取りて之を稱し即ち公氏をッーテと稱しヒックスをヘーラ、航海師を其洗禮の命名ロバートに基きてボーバ、ゴールをトアーロ、ソランダー博士をトアノ、ペンクスをタパーチと稱し其他本艦員の名を呼ぶこと大概斯の如し

十三日チュポウライ、タマイデは突然ペンクスの銃を其手より奪ひ之を空中に發射して無禮を加へたり蓋し同氏は彼を以て全く火器の用法を知らさる者と豫て想像し居たりしかは今其爲す所を見て大に驚けり元來一行の保安上を謀れば此土人等に於て火器の用を知らさるこそ最も冀はしき事なり故にペンクスは彼に在ては眞に一藏と思ひし所の此所爲を以て頗る重大の事件と爲し幾分かの脅迫手段を用ひて人の銃砲に觸るゝは其身の一大恥辱たることを彼に了解せしめしか彼は一も之に答ふる所なく直ちに其家族を携へエパーンに向て出發せり然るに彼は數多の場合に極めて有用の人物なりしかば是より大なる不便を來たさんことを察しペンクスは彼と調和せん爲め同夕モリニウと相伴ひ堡砦より出發して彼を訪ひしに彼は即ち人民の一大環形に集れる中央に在て悔恨限りなきものゝ如く其感慨止む能はざるの情は部下の面貌にも見はれたりペンクスは乃ち彼れ酋長と調和を遂くるに時を失はず直ちに大蕃舟を準備せしめ一同相携へて翌日晩餐の前、堡砦に歸りしが彼れ夫妻は調和の人質としてペンクスの天幕に其夜を過こしたり

十五日日曜日に當りチュポウライ、タマイデは其窃盗犯を看出されたりパンクスは固より同酋長に對し他事なき意見を有するものなれども天幕の一隅に一の釘籠ありて其事竟に爭ふべからざる證左と爲りしを奈何せん既にして該酋長は自ら四個の釘を窃取したる事實を白狀せしが其回復を促さるゝに當り釘はエパーンに在りと陳したり然れども劇く詰問せらるゝに及ひて終に一個の釘を出だせり斯くて漸く自餘の釘を回復せば其罪を免すべしと言渡されしに廉耻は全く知らざるものと見え現に其罪を犯しながら恬として通常に變ることなく退けり

二十七日パンクスとランダー博士とは公氏及其他の數名と共に其以前の住處より六哩を隔ちたるアタホウロと稱する地に移轉せしツータハーを訪問せんが爲めピンチース艇に乘りて出發せしか即ち彼に贈るに黄色の織物を以て作れる婦人の下衣其他瑣細なる物品を以てせしかは一同晩餐に臨み此夜此に一泊すへき招待を受けたり一行は唯六名なりしも其場に群集せる人員は家屋にも蕃舟にも容れ盡すべからざる程の大數にして其賓客にはオベリアも亦其隨伴者を率ゐて列りしかパンクスはオベリアの蕃舟に宿ることを諾したるより猥に就く爲め一行と別れたり斯くてオベリアはパンクスの衣服を保管せしか其注意せるにも拘らず終に之を窃取せられ又拳銃火藥其他胴衣の隠嚢に入れたる數品を盗まれしかば警報を次きの蕃舟に居れるツータハーに傳へ共に賊の捜索に出行きたりパンクスは乃ち唯袴と胴衣のみを着し裝塡せざる銃を携へて其跡に留りしが出行きし二人空して歸り來りしも其勞終に効なかりし是に於てパンクスも今は其の紛失を寛恕するを適當となし一行に會合せん爲め公氏及他の紳士三名の睡れる小舍に到りしに此處に於ても靴足袋及ジャケツを失へることを話せりランダー博士は翌朝を以て是等の諸士と會合せしか畢竟盗難を免れしは唯此博士一人のみ是れ全く一哩許を隔ちたる家に宿せしを以ての故なるへし

此時金星の經過を觀測すへき準備に取掛れり其方法たる此地に於て本觀測を爲すの外に二組の測者を各〻異りたる場所に派出して觀測を行はしむるにあり是れ此オタハイテに於て若し觀測を誤るが如き場合に際するも他の二處に於て成測を得るの都合を計れはなり仍て公氏は自ら器械を準備し且つ派出すべき紳士に其用法を教ふることに執掌せり而して六月一日木曜を以てゴール、モンクハウスの二觀測者及パンクスの一友人スポーリングを長艇に乘せ且つ之に所用の器械を添へてアイマヲに送り出したるが又本營よりも此目的に應ずべき場所を便宜の距離に發見せんが爲め他の者を派遣せり

アイマヲの方に行きし一組は其夜、過半程を漕き行くの後ち蕃舟を認めて之を呼び留めたるが其土人より觀象所に適當なりとの知らせを受けて海濱より凡そ百四十「ヤード」の水中に突出せる岩上に數個の天幕を張れり

三日土曜日即ち經過の日に當りパンクスは黎明を待ちて新鮮なる食品を其島中に得んが爲め一同の許を發したるに一點紐雲の遮るなく旭日の昇りたれば即ち之を見て頗る滿足せり此日本島の王にしてタルラ

ヲと稱する者其妹ヌーナを携へて來訪せり蓋し此地の人民は面會の時に坐するを慣例とせるを以て乃ちパンクスは其頭に帽子として戴き居たる此地にて織れる布頭巾を地上に擴けて其上に坐せしが王は此時其携へ來れる豕犬各〻一頭椰子麵果若干を贈物と爲せり仍てパンクスは之が答禮として手斧肌衣各〻一個と飾珠若干を贈りしに王は大に喜んで之を收受せり斯くて後ち王及王妹其他三名の上品なる少婦は其隨從者と共にパンクスに伴はれ觀象所に至りしがパンクスは彼等に金星の太陽面を經過するを示し且つ我〻か隔遠なる邦土より此に航し來れる目的は專ら此地位に在て此惑星を觀測ぜんが爲めなることを告げたり乃ち金星經過の際其觀測を離地に行はんが爲めに出發せる二組は孰れも皆好結果を得しが切接時（コンタクト）の互に相異ること豫て期したるよりも多かりき今グリーンの報告を掲ぐるに左の如し

		時	分	秒
午前 第一	外切（エキスターナル、コンタクト） 即ち金星太陽面に入り始めんとす	九	二五	四
第一	內切（インターナル、コンタクト） 即ち金星太陽面に全く入る	九	四四	四
午後 第二	內切 即ち金星太陽面を去り始めんとす	三	一四	八
第二	外切 即ち金星太陽面を全く去る	三	三二	一〇

觀象臺の緯度　南緯十七度二十九分十五秒

觀象臺の經度　西經百四十九度三十二分三十秒（グリニチの西なり）

此日學士及士官等の觀測に執掌せるに際し艦員中需品庫に入りて若干の長釘（スパイクネール）を窃取せし者あり嚴重なる搜索の後其者は二十四の笞刑に處せられたり

六月四日は我國王ゼオルヂ第三世陛下の誕辰に相當する日なりしも彼の金星の經過を觀測すへき爲めに二組となりて出發せる一行の未た歸艦せさるか爲め公氏は翌五日を以て其祝賀を行へり此日此地の酋長等數名は其祝莚に列りしかキヒアルゴの稱號を唱へて陛下の健康を祝せり是れ則ち彼等かキング、ゼオルヂの語に就て發音し得たる最も近似の音に係るなり十二日酋長等其弓矢及毛髮を組みて作れる紐若干を失ひたることを訴へ出てしに由り之を探索して其犯者たる水兵等を發見し各〻之を二十四の笞刑に處したるが是れ公氏が常に其部下に科したる躰刑の限度ならんと思はれたり知るべし其仁心の深きは著然として當時の艦長に相反する者ありしことを蓋し當時に在ては今日二十四の杖刑若くは外地に在て五十の杖刑を以て罰すべき處犯に往〻數百の杖刑を施したること常なりき

十九日夕オベリアは數名の隨從者と共にエンデーヴォーア號を訪問せり彼はツーダハーの宮殿より倍大なる蕃舟に乘り已れと共に豕一頭麵果及其他の贈物を携へ來りしが其中に犬一頭ありチューピアは之を殺して調理することを負擔し地に穴を堀りて其調理を爲せしが甚だ好食品なりと稱せられたり

廿一日數多の土人我々を訪問し數種の贈物を携へ來れり就中オアモと稱する酋長の男女の少年各〻一名

を伴ひ來れるときにはオベリア及數名の土人は彼等に相逢ふ爲め頭の被り物を脱し胸を露はして堡砦より出行きしが我が英人等は之を見て高位の人に對する尊敬の禮式ならんと判斷せりオアモの天幕に入るや少女は新奇の事物を見んとするに切なりしも他人と同伴する事を忌みて遂に何一つも見物せざりき少年はソランダー博士に導かれて内に入りしが土人等は之を見るや頻りに彼をして早く外に出でしめんと努めたり

我が一行は此事情を見て大に怪み其所以を穿鑿せしにオアモは元オベリアの夫にして其少年及少女は即ち彼等兩人の子なりしなり又此少年は名をテリヂと稱し此諸島の主權を受嗣ぐべき人物なるが適當の年齢に達するときは則ち其妹なる此少女と結婚する筈なりといふ

二十三日朝乘員中に一名踪跡の詳ならざる者ありしがツーダハーの住處なるエパーンに居れりと報する者あり又土人中の一名に彼を迎へ歸らんことを申出でたる者もありしが後ち彼の歸るに迨ひ其告ぐる所を聞くに彼は初め土人三名の爲めに堡砦より奪はれて灣の頂上に運ばれ此に其衣服を剝取らるゝの後ち蕃舟にてエパーンに送られたりと斯くて彼はツーダハーより二三の衣服を受けしがツーダハーは頻りに此地に留まらんことを勸めて容易に歸らしめざりしと蓋し其實話なることは彼の歸來れるを知るや否土人等の急に堡砦を立去りたるを以て推知すべきなり

六月二十日早朝公氏はペンクスと共にピンチース艇に乘りて出發し本島を周航するの見込にて東方に進

み一大灣に到るに迨ひ他の一方に行かんとせしに土人の案内者チチュパオラなる者之に伴ふことを欲せざる旨を陳べ且つ其地方はツーダハーの所轄外に係るが故に其人民の爲めに虐殺せらるゝの恐あればとて只願一行に彼處に行くことを思ひ止まらしめんと勉めたり然れども艦長等は飽まで之を斷行せざるべからずとて小銃に裝塡して事變に備へしかばチチュパオラも之に力を得たりけん終に同行することに決したり

斯くて薄暮に至るまて漕行きしか本島を二部に分ちて所轄の分界たる所の一地峽に達し一同マライタタと稱する酋長の所轄地に上陸せりマライタタとは「人を埋むる所」と云ふ義なるか其父をはバハイレデと謂ひ是又「小艇を盗む人」を意味する不祥の名なり然れども其人民等一行に對するには極めて善遇を以てし且つ手斧に換へて豕を賣り又之に食品を供給せり

一行の周圍には土人群集せしか是より他領即ちウァヘーチュアの所轄地に達するまては引續き前進して止まざりき夫より一行は長途海濱に沿ふて進み終に一酋長に出會ふに至て止みしか其酋長はトウヂッヂと稱する年齢凡そ二十二三の婦人を携へたり

此時一行の通過せし地方は他の部分よりも耕作善く行屆き且つ清潔にして又彫刻物を以て修飾せる墓所も他より多く視たりといふ

是より少しく東方に進みて再ひ上陸せしか酋長マチアボーに出會へり此酋長には未だ一面識もあらざり

しが彼は麵果及椰子を携へて一行に供給せり一行は此時又硝子瓶を以て豕と交易せしが其硝子瓶は彼に欣受せしめんと欲して擇み出せし諸品中にて特に又撰み出せしものに係るといふ此に白露雞及蒼鷺を視しか土人は之を甚だ愛養せり是れ我かケビテーンウォーリスの部下か此に遺せるものと想像せられたり

斯くて此一行當地を出發するときには酋長自ら水先人と爲りて淺灘を通過せしめたり同夕本島の北西側に於ける一灣に着するに當りウィヴォロウと稱する一酋長より甚だ懇篤なる迎接を受け彼と晩餐を共にせしかマチアポーをも其席に列せしめたり而して此夜家屋の一部分を劃して我が一行諸士の寢處に充てたれば晩餐の後諸士は直ちに退きて寢に就きたるに茲に實に驚くべきことこそ生じたり此邊島嶼の酋長以下土人に總て盜心のあるは土地固有の風俗なるがマチアポーは此夜寢に就くに當り其身を被はんか爲めペンクスより外套を借用せしに彼は終に之を拐帶して去れり乃ち一同は土人の一人のしらせによりマチアポーを追行きしに未だ幾許ならずして一人の外套を携へて歸り來る者に逢へり斯くて彼は一同を視るや大に畏縮して之を返せり

斯くて此一行は再び家屋に歸り來りしに屋内閑として人影なく且つ翌朝四時頃に至り番兵より端艇の繋きし處に在らざることを認め驚きて之を報せしかば是に致て其情況極めて不快と爲り一行僅に四名より成りて小銃一挺拳銃二挺を有するも一彈丸一裝藥の蓄へなく實に不安の思を以て長く時間を移せしが其端艇は全く潮の爲めに流されしものにて後ち再び手に入りしかばペンクス及其一行は晩餐を終り直ちに

歸路に就けり

三十日金曜に當り一行はオタホロウに着し此に其舊識たるツーダハーに面會したるがツーダハーは諸士を迎接するに鄭重の禮遇を以てし且つ一行に備ふるに好良なる晩餐と便宜なる宿舍とを以てせり諸士の嚮きに此酋長と共に寢に就ける時には恣に其所有を盜奪せられたりと雖も此夜は至て無事に經過し翌朝に至るも其衣服物品等に於て一も失へる所なかりき而して一行には又七月一日を以てポート、ローヤル港の堡砦に到り此旅行より歸るの後甚しく麵果の欠乏を告けたるが此地の知人は速かに之を供給せり

三日ペンクスは河の水源を探らんが爲め溪間を溯りて行き其兩岸に沿ふ所の地方の情況をも合せて觀察するあらんとせり其案内者として土人數名を率ゐ其河筋凡そ六哩を行くの後此途に於ける最終の家屋なりと云へる一軒家に來れり此家の主人は贈るに椰子及び其他の果實を以てし一行は更に其路を進みたり其途中屢〻岩石の碎片に由て成形せる洞を通過せしが聞く所に據れは旅客夜に入るときは時として此に宿りを取ると云へり尙ほ其河筋を行くと凡そ六哩にして兩岸高さ凡そ一百呎の幾ど銳直なる岩石を連ね斷岸絕壁と爲れるを認めたりペンクスは是等の岩石中に鑛物を索めたりしも一として得ず其岩石幾と四面皆兀禿したりしに拘らす全く斯る物質を欠き且つ其岩石は到る處に燒燃したるの徵を示せり蓋し是れ一行のオタハイテに滯在せし間各處に認めし諸岩石に常とする所にして同島及び近傍諸島に於ても共に丘陵上の粘土に於て火跡の蔽ふべからざる者ありたり

四日パンクスはリオ、デ、シャヂーロより携へ來れる甜瓜（マクワウリ）、眞橙（ライム）、ライム（レモンに類する果實にして形體之より稍〻小酸質之よりも稍〻強き者）及他の植物の種子を多量に堡砦の四方に撒き又之を澤山に土人に供給し且つ森林中にも多分に播きたり而して一行の初めて本島に着せし當時播種せる所の甜瓜中には此地を去るの前既に成長繁植せし者ありたり

此時正に發航の準備に就き船匠師はエンデーヴォーア號の薪料に代ふべき爲め堡砦の門及柵を取拂ふことを命せられしに土人の一人門の雀耳釘（ツボク）及鈎を盗み去りて見當らざりしが後ちチュポウライ、タマイデ之を見付て返還せり

八日より九日の間に於て少年の海兵二名夜に乘じて堡砦より脱し翌朝に至りて始めて之を知れり而して次の日本艦の其日若くは翌日を以て出帆するを報するに迫んで公氏は此海兵の此地に留まらんとを企てしやも亦計り難しと疑念するに至りしが之を急速に引戻すには當時土人との間に成立せる和親を破るの恐あるを以て其自ら歸り來るを望み此に出帆一日の猶豫を決せり然るに十日に至て尚ほ其踪跡詳ならざるを以て嚴く穿鑿を盡せしに土人等は其二名の者は容易に發見すべからざる山中に潜伏して歸るを思はざることと及其二名の者は各〻既に妻を娶りたることを報したり是に於て當時堡砦中に在る酋長及婦人中にはチュポウライ、タマイデ　トミオ　オベリア等ありしが是等の數名に告くるに脱營者を差出すに至るまでは此を立去るを許さゝるべきことを以てせしに此輩別に恐怖又は不平の態を現はすこともなく艦長に確保するに必ず海兵を送還すべきことを以てせり其間、一方にヒックスはツーダハーを本艦に携へ來る爲

めの使としてピンチース艇にて派遣せられしが彼に一も警心を加へしめずして此使命を遂げ得たり既にして夜に入りしに公氏は其人質として抑留する所の者をして徒らに堡砦に居らしむるの不得策なるを察し之を本艦内に移さんことを命ぜしに此輩就中婦人は大に驚き流涕恐怖して止まざりき

此夜、數名の土人、一名の海兵を携へ來り他の一名及之を引戻さんが爲に出行きたる我が二名の者はツーダハーの解放せらるゝに至るまで抑留せらるゝことを報せり是に於てヒックスは直に長艇に搭し多勢の兵卒を率ゐて是等の囚擄を救ひ出さんが爲に派遣せられしが之と同時に公氏はツーダハーに談ずるに其部下の者を以て我が派遣の人數を助け且つ其名を以て此事件に就ては己れ其責に任ずるが故に速に彼の人々を解放すべき旨を申送らざれば其本分立ち難しとの事を以てせしにツーダハーは直ちに之に從ひしかば一行は何等の故障もなくして彼の國人を引戻せり因て其脱營者を糺せしに土人の言ひし所に違はず果して婦人と相結び之と共に本島に留まらんとを欲せり此にチュピアと稱するは嘗てオベリアが本島に君主たりしとき其首相と爲り且つ僧正たる者を以て此國の宗教に通曉せしが彼本艦の發航するとき同行を許されんとを申出たるとなりき

七月十二日の朝、彼は凡そ齡十二歳のタイヨッタと稱する僮僕を携へて艦中に來り熱心に一行に同伴せんことを懇請せしに彼一行に取て有用の人物なりと思考せられたるを以て乃ち之を許せしかば是に於てチュピアは上陸して其友人に別を告げ且つ之に遺すに數種の小なる記念品を以てせり

パンクスはツータハーがエパーンに於て所領せるモラィ蕃廓土人の見取圖を描かんとを冀望せるを以て公氏はソランダー博士と共にピンチース艇に於て彼を同處に伴ひ其上陸するに迨び直ちにツータハーの家に到りしに此にオベリア及び其他の數輩に出會し孰れも善良なる感情を以て相交り既にしてチュピアは此輩と共に家に歸り而して此輩は翌日本艦の出帆すべきとを聞きしを以て同日早朝本艦に訪問すべきとを約せり

十三日是等の懇親なる人民甚だ早く艦中に來り本艦の周圍には下等の土人を以て充滿せる大數の蕃舟集りしが十一時より十二時の間を以て一行は錨を揚げ土人に別を告げしに土人等涙を禁ずる能はずチュピアは此一場中頗る銳氣を起して自ら堪へ其兩眼より涙溢るゝも之を隱さんと勉めたるは又一段の榮譽を添ふる者あり終にパンクスと共に檣樓に登り手を上下に振りて其國に告別を爲せり斯の如くにして一行は恰も三ケ月の滯留の後オタハイテを出發せり

チュピアの言ふ所に據れば此島は凡そ六千の戰者を出すを得ると其產物は麵果、椰子、甘蔗、蕃薯、芋薯、甘蔗、楮實數種の無花果並に其他多種の草木にして是等は皆天然若くは僅少の培養を以て生殖する者なり然れとも土人は歐洲の果實、野菜、豆類又何種の穀物をも有せず其飼畜せる動物は豕、犬及び家雞にして又鴨、鳩パルロクェット其他二三種の鳥あり四足獸は唯兎のみにして又一の蛇を見るべからず然れとも海には多種の佳魚あり大に其食を奢らしむ

人民は一般に歐洲人より大なる構造に係り男子は概ね身長高く强壯にして形美なり高等女子の躰格は凡そ我が英國の淑女に均しと雖とも其下等の輩は我標準の下に在りて就中甚だ矮短なる者あり其自然の面色は清美なる橄欖色即ち淡褐色と稱する所の者にして其皮膚は優滑に且つ快柔なり其顏は一般に奇麗にして其眼は敏感を有し其齒は著しく白くして並び好く其髮は大半黑色なり男子は亞米利加の原住民と異なりて長き鬚を蓄へ種々の形に之を作れり其坐作安靜に且つ温雅にして其行爲に至ても事に激せざるときは温厚にして且つ禮儀あり此國の女子は他の諸國の習慣に相反して其頭髮を短截し男子は之に反して長くし時としては弛く之を肩に垂れ又時としては頭上に纏結して之に種々なる色の鳥羽を挿し又男女共毎に此國製造の布を頭巾(タアメン)の如く頭の周圍に纏結し且つ女子は人髮を長き紐に組み之を額に纏結して粧飾と爲せり

此地の土人は短く刻齒したる骨製の小器具を以て皮肉を刺し其痕に油分多き堅果の煤と水とを以て調製したる暗藍色若くは黑色の合液を充たし以て身躰を斑染せり此術は土人之をタトーウィングと名くるにより吾人の所謂タッツイング(はりものの發)より來りしものなるべき本是れ痛苦甚しくして皮膚に拭消すべからざる痕跡を留む而して此術は通常齡凡そ十歲乃至十二歲の時を以て身躰の數部に之を行ひ其之に用ゆる器具は二十個の齒ありて一打毎に鮮血迸出するも男女共に强ひて之を受けしめらるゝなり是等の土人は數種の織布と蓆とを着し織布は之を晴天の日に、蓆は之を雨天に着せり其衣服は種々の形に作り其裁方に

は一も注意せず又之を縫合することなし而して優等の女子は其三四襞を着し就中一は著しき長さにして之を數回胸の周圍に卷きて脛の中部に垂れ他の二三の短衣は各〻中央に切拔きたる孔ありて互に之を重ね着するには其孔より頭を出し長き兩端を前後に垂らし兩側を開放せしむるを以て腕の屈伸甚た自在なり」男子の衣裳も亦甚だ女子に均しく唯其異る所は衣服の一部を膝下に垂るゝとなくして之を脚の間に致すに在り此衣裳は貴賤の別なく諸人の着する所にして唯其區別は優等者に在て多くを重ぬるにあるのみ正午に於ては男女共に唯布を胸の周圍に纏着せるのみにして幾ど裸躰なるが如き觀あり其面を太陽より蔽遮するに椰子の葉若くは蓆を以て製したる小なる帽子を以てし其之を作るは唯數分時間を費すのみ又男子は時として人髮若くは犬毛又は椰子の纖維を一筋の糸に綯りて組みたる襞様の物を被り以て其背後に垂れ且つ男女共に一方の耳に環を裝着せり是れ貝殼、石、漿果若くは小なる眞珠より成るものなりしが忽ちエンデーヴォーア號一行の此に齎せる飾珠を採擇するに至れり又男女共兒童は全く裸躰にして道を行き男子は七八歳女子は凡そ五歳に至るまで然りとす

オタハイテの土人は寢に就き若くは雨を避くるの外家屋を用ゆると稀にして食事を爲すには常に樹陰に於てし其衣服は夜中身を被ふに用ひ家屋は一も區域の立たる房室を有せず主人及び其妻は中央に寢ね次に未婚の婦女又其次に未婚の男子を置き好天の時は婢僕を屋外に露臥せしむ然れとも酋長の家屋は幾分か之と相異る所あり甚だ小なる舍ありて恰も蕃舟に搭載するを得べきが如く之を構造し其四面は椰

子の葉を以て之を封圍す然るも尚ほ空氣之に透入す其内には唯酋長と其妻のみ寢に就けり他に又其部内の住民一般の混居に供する家屋あり多くは長さ二百呎以上幅四十呎高さ七十呎乃至八十呎の者にして共同の費用を以て之を建築し一方に空地を設け之に低き柵を回らすも他の家屋の如く一も牆壁を存するなし

食物の調理は主として之を燒くに在り酋長豕を屠殺するときは公平に其部下に配分す然れども是れ常に稀にして犬及家雞は通常の食物に屬す又季節に因り麵果あらざるときは椰子、甘蕉、車前實等を以て之に代ふ其麵果を燒くには之を稍〻粉碎したる馬鈴薯の如くならしむるの方法を以てし又之を甘蕉、車前實若くは土人がマハイと稱する酸漿と搗合せ以て之より三種の食品を調製す其飲料は一般に水若くは椰子の乳汁に之を限れり或は好んで英國の酒類を多量に飲み酩酊する者往々之あれども未だ嘗て一人にして此酒の暴飲を再ひせし者あるを聞かず又酋長等は時としてアヴァと稱する植物の液汁を飲みて醉へりとの說あれどもエンデーヴォーア號の該嶋に留れる間嘗て其一例をも見ざりき

酋長は未識人の訪問するに當り時として之と會食するの外一般に獨り食するを例とす此時酋長は其前に木葉を卓布の如く敷き詰めて地上に坐し多くの給仕人あり其食品と淡水及鹹水を盛りたる椰子殼とを入れたる籠を酋長の前に置き以て其周圍に坐す是に於て酋長は先つ其口と手とを洗ひ然る後鹹水に浸したる麵果と魚とを手掬みにし其全部を食ひ盡すに至る迄交〻之を食し幾ど口毎に鹹水を一吸す此麵果と魚

とに次ぐに車前實若くは林檎を供する第二の膳部を以てす酋長は其皮を剝かしめざれば決して之を食せず其間麵果を以て軟漿を作り之を椰子殼より喫飲す是れ其食事の終りにして再ひ當初の如く手と口とを洗ふ斯の如くにして酋長は一食に驚くべき量を喫了せり嘗てペンクス及其他の者の見し所を以てするに是等酋長の一人は小なる鯉の大さに均しき魚三尾と通常の甜瓜に下らざる大さの麵果四個と長さ七吋、周圍其半ば程の大なる車前實十三四個を飽食し加ふるに全食を洗下し之を消化せしむる爲めに一「クォート」の漿を以てせりと云ふ

此島の住民は外觀上社交の快樂を欲する者の如くなるも尙ほ食事に當て相互にするとを嫌惡し此習慣を守ると極めて嚴にして兄弟姉妹と雖も其食品の籠を異にし一般に數「ヤード」相隔てゝ坐し互に相背き一言も相交へずして食するの風あり又上流の中年者は食後午睡を爲すと雖も稍〻齡を重ねたる者は斯の如く怠惰ならず

音樂、舞蹈、相撲及弓術は其娛樂の多分を占むる者とす其樂器と稱するは唯笛及太鼓の外に出でずして其太鼓は木の丸き切れを唯一端に於て鑿り凹め之を沙魚(シャーク)の皮を以て蓋ふたる物にして桴を用ひず手を以て之を打てり其歌は隨口にして定りたる文句なく或は屢〻韻節を蹈むと雖も唯一對より成り日沒と就寢の間に於る興に於て往〻之を謠ふ其間此輩は油分多き堅果を以て作りたる蠟燭其中心に貫通せる小棒の上に互に累ね合せて燃やせり此蠟燭は久しく燃へ且つ明光を放つものなり

身躰の清潔は土人の甚だ貴ぶ所にして男女共に一日に三回即ち其起きたる時、正午及寢に就く前に於て洗浴するを例とせり又其衣服も極めて清潔にして何樣大なる群衆中にも未だ曾て臭氣を發するを知らず

反物はオタハイテの主たる製造物にして之に三種の別あり各〻相異なる所の樹木即ち一は桑の樹一は麵果樹一は西印度に於ける野生の無花果の樹に類似したる樹の皮より製す就中桑樹は最も精緻なる反物を生し最上流の者にあらざれば之を着するを稀なり麵果樹より製する物を以て其次ぎとす野生の無花果樹に類似したる樹よりする者の如きは其質最も粗糙にして其斯の如くなるにも拘らず之を製するは唯小量のみ

數種の蓆も亦其製造物にして其質歐洲製の者に比すれば優る所多し而して其寢に就くには其粗質の者を用ひ雨天には精質を以てす又籠及小枝の編物細工に長し男女共之を種々の模式に製作するに從事し又ポロウ樹の皮を以て大小諸種の索及線を作り此線を以て漁網を編み又椰子の纖緯を以て糸を作り此糸を以て蕃舟の各部を緊結す其形は之を適用する目的の如何に從て數種あり又此地の釣線は山林に生殖する蕁麻(いらくさ)の一種なるエロワ樹の皮を以て製し世界中第一等と品評せらる而して此釣線は松魚及アルビコール(ボラクス)の類の如き最重最强の魚を釣り上ぐるに足るの强さを有す

此土人の家を建て舟を造り石を切り木を伐り又之に切割、彫刻及研磨を施すに用ふる所の工具は石より作れる斧及骨より製する鑿の外に一物を存せず骨は人の腕骨を以てするを常とす鎚或は艶出しには石花

の擦蓋及石花砂を用ふ又其斧の刃は極めて鋭どけれども甚だ硬ならず其大さ數種ありて木を打倒すに用ふる者は重さ六「ポンド」乃至七「ポンド」を有し之を彫刻するに用ふる者は僅々數「オンス」の重さを有するに過きず

稍〻小なる端艇には往〻麵果樹を以て造れる者あり其輕くして海綿樣の如くなるを以て之に工作を施すには左程困難を覺えず鉋に代ふるに斧を以てし之を用ふるに最も巧みなり其舟を成形するに板を曲るの法を知らざるに由り總して手を以てす其舟に二種の別ありて一は短航に用ひ一は長航に供す是等は孰れも長さ六十呎乃至七十呎なるに幅は僅に其三十分の一を超えずして比例上其當を得ず其所謂イヴァハース即ち戰艇は其海に出つるに當り互に數呎を隔てゝ相並べ強き木桿を各舷に横へ共に之を緊結して分離せしめず其前部に長さ凡そ十呎乃至十二呎の高臺を設け戰者をして之に立たしむ其放器は投石機及鎗にして其戰臺の下には漕手之に坐して負傷者に休處を給す又其所謂バヒース即ち航洋艇は甲の島より乙の島に航するに時としては一月を費し二週間乃至廿日も歸らざる如きは屢〻之あり若し此艇にして多量の食糧を積込むの便を有せしめば尙ほ甚だ長く航海を持續することを得しならん此艇は上陸するとに於て又碎浪中海濱より乗り出すに於て甚だ便利を感ずるものとす是れ其著しく長く且つ舳の高きが爲めにしてエンデヴォーア號の端艇にして殆ど上陸するを得ざりし時と雖も容易く之を遂げたればなり

病を醫するは僧侶の掌る所にして世襲の職たり其療法は一般に祈禱と儀式より成り而して患者の回復し

若くは死するまでは幾回も之を行ふ

此島民の宗教は甚だ玄秘にして端倪をも窺ひ知るべからざるものゝ如し神を名けて「地震の原動者」と稱し其信する處に據れば酋長及上流者は未來の情況に於て下等人民に超越すべし神は其現世の所爲に就き別に咎むる所なき者とす

其兵器の一は投石機にして極めて其用法に巧みなり又其一は頭の大なる長き棒にして甚だ硬く之を以て頑固に且つ殘刻に戰ひ毫も敵手に假貸する所なし

既にして一千七百六十九年七月十三日を以てエンデーヴォーア號はオタハイテを發航し公氏はチュピアに就て其所謂ヒュアヘーヂ ユリエラヤ オタハイテ ボラボラなる四島は是より凡そ一二日程の距離に在ると及目下甚だ欠乏を感ずる豕、家雞及其他の食品も此に着すれば潤澤に得べきことを了知せり

十六日ヒュアヘーヂ島の北西部に到り其近傍を錘測せしに七十尋深にして底に達せず數隻の蕃舟海岸を出で來りしも本船に近づくことを恐れたる者の如くなりしが漸くチュピアを見るに迨んで其疑懼を去りて艦側に來れり就中同島の王は其妃と相携へて艦中に入り百般の事物を見て奇異の思ひを爲したる如くなりしも特に其閲覽に供したる事物の外何物に就ても一として査問を試みず王は其名をオリーと稱し和親の徵として公氏と互に其名を取替はさんとを請ひしか公氏は喜んで之に從へり

既にして同島の西側に於て小なれども便宜なる一港(土人之をオウパーンと名く)を認め之に投錨するの

後艦長はベンクス氏及數名の士官を伴ひ王及チュピアと共に海濱に進みたり其上陸するや否チュピアは自ら其胸を露しモンクハウス氏にも亦其例に倣はんことを冀望せり斯の如くにして彼れ坐に就き演說を始め凡そ二十分時間之を繼續せしが王は之と對立して定式の答辨と思はれたる言を發し以て之に應ぜり此宣言の間チュピアは手巾一個黑絹の襟卷一個車前實飾玉若干を度々に捧呈して彼等の所謂エアチュア即ち「神」への供物とし又之が答禮として豕一頭、稗き車前實若干鳥羽二束を彼より受領し以て之を艦中に携へり是等の儀式は英人とヒュアヘーチ王との間に於ける修交條約批准に類する者と看做すべきなり十九日手斧若干を以て甚だ大なる豕三頭と交換し得たり同日午後を以て出帆せんとせしが故にオリー王及ひ其他數名の土人は告別の爲め艦中に來り公氏はオリーに贈るに「不列頓皇帝陛下の軍艦エンデーヴァーア號司令官公克一千七百六十九年七月十六日」の銘を印したる小なる錫板を以てし又之に與ふるに英國の貨幣に類似せる記章若干及他の細貨を以てしオリーは之を永久に保存せんことを約せり此ヒュアヘーチはオタハイテより凡そ六十里なるが更に七八「リーグ」を隔ちたるユリエテヤに向て出帆せり

二十日エンデーヴァーア號は該島の北側なる一灣に投錨せしに忽ち二隻の蕃舟海濱より出で來り其土人は二頭の小豕を携へ之を若干の釘及飾珠と交換せり是に於て艦長並にベンクス氏及ひ他の數士はチュピアを伴ひて海濱に到り此にチュピアはヒュアヘーチに上陸するの際、行へる所と同種の儀式を爲し以て諸士を土人に面會せしめたり此儀式を終るの後艦長は本島及ひ近傍諸島を不列頓皇帝陛下の名を以て領

有せり

二十四日海に出て北の方、礁の以內凡五六「リーグ」を隔ちたる海口に向ひ進航せしが其行程中、錘測俄に二尋と爲り一暗礁に衝突せんとするの危險に瀕せり蓋し是等諸島の近傍に在ては石花礁多くは絕壁の如く屹立せるを以て恐らく其頭角ならんと想像せられたり

二十五日オタハ島より一二「リーグ」以內に在りしが風逆にして翌朝に至るまて上陸するを得べき處に進み得ざりし此時ベンクス氏及ソランダー博士は航海師と共に長艇に乘り同島の東側に位する一港を錘測せんが爲めに行きしが其無難にして且つ便利なることを認めたり然後ち上陸して多量の車前實と若干の豕及家雞を購入せり

既にして北方に駛進し八月二日に至り本船の位置はユリエテヤの西側なる一港の西に在ることを認め乃ち二十八尋の處に投錨せしに土人等多く海岸を出て豕、家雞及車前實を携へ來り甚だ廉價を以て之を販賣せりベンクス氏及ソランダー博士は相携へて海濱に到りしに土人等之に尊敬を表し此日は終日甚だ快く經過せり其上流者の家に導かるゝに當り此輩其前を疾走して地上に擴けたる長き蓆の兩側に立ち家族等其遠き一端に坐するを見たり

此一行は或る家に於て其當て見し所と全く相異りたる舞蹈を示されしが其舞蹈者は頭に長さ凡そ四呎なる圓筒形の大なる編物にして之を蔽ふに鳥羽を以てし其周緣に附するに沙魚の齒を以てしたる物を被り

徐々と運動しながら舞蹈を始め時々其編物の頂上を以て圏狀を畫するが如く其頭を動し又時としては觀客の面前に之を投垂し以て觀客を飛ひ退かしめしが彼に在ては之れを以て滑稽中秀逸なる一技と爲し就中英國紳士に向て之を行ひし時は彼之を見て眞に抱腹に堪へざるもの丶如し又三日には更に六名の男子と二名の婦人より成れる舞蹈者の一隊を觀しが是等は該島に於て上流に位する身分の輩にしてオタハイテに見る所の者と均しく巡歷する所の一隊なりしと雖も彼の如く觀客より報酬を受くる如きものにあらず其一隊中の婦人多量の辮髮を着け數個の花を雅致に挿入し以て甚だ美麗の頭裝を爲せしが迅速に且つ音高く打つ所の太鼓と極めて精密に合調して場内の兩側を進行し後ち忽ち其身を甚だ奇怪なる體裁にて振るとを始め時としては俄然として坐し又時としては其面を地にし其膝及肘を立て丶俯すると同時に殆ど不思儀なる神速を以て其手指を動かせり此婦人の一舞蹈より他の舞蹈に移るの間には演劇に於て見る所の挿間狂言（あるのもべうけん）樣の者を男子にて演し狂言は臺詞並に舞蹈より成りしが一行は竟に其趣意を知るとを得ざりき

ペンクス氏ソランダー博士及他の數士は其翌日を以て稍ゝ事理を得たる演劇の席に列れり其演技者は皆男子にして別ちて二組と爲し互に之を識別せしむる爲め一は茶褐色一は白色の衣裳を着けたり此時チュピアも亦其席に列せしを以て一行に示すに其茶褐色の一組は主從を擬し白色の一組は盜賊の一隊を扮する者なることを以てせり此に其主人は一の食物の籠を持出し之を其從僕に保管せしめしに白色の一組は

此籠を盜まんとを勉めて種々の方術を演し茶褐色の方は又其企謀を妨げて遂げざらしめんとし均しく勞する所ありしが斯の如くにして暫時を經過したる後其籠を托せられたる諸輩は之を中央にし自ら其周圍の地上に臥して忽ち睡眠に陷りたるの狀を裝へり是に於て他の一組は此機に乘し已れを利し遂に其獲物を携へ去りしが從僕等後間なく夢醒めて其之を失へるとを發見せしが敢て之が搜索をなすに至らずして一段落となり再ひ以前に均しき輕快を以て舞蹈を始めたり

五日土曜日に當りポラポラの隣島の王より已れの當時本島に在ると及艦長を訪問せんと欲するとを通ずるが爲め使者を派し來れり且つ同時に若干の豕及家雞並に織物數種其長さ四十乃至六十「ヤード」の物外に若干の車前實及椰子を齎らし來て之を艦長に贈進せり然れとも彼は其言に違ひ艦長を訪問せず少婦三名を來らしめて其贈物の返禮を需めたり一行は同王が艦中に來るとを以て得策とせざるの意を察知せしが故に午餐の後我より此れを海濱に訪問せんが爲に出發せり同王は既にポラポラを攻畧して近隣諸島の畏懼する所の人なりければ一行は注意して之に囑目せしに憐むべし今は孱弱なる老耄爺にして半は盲目と爲り老衰に堪へずして動作意の如くならざる有樣なりしかば一同大に驚けり同王は一行を迎接するに是迄他の酋長中に於て見し如き儀式を用ひざりき九日に至り既に本艦の漏口を塞ぎ新鮮なる食料を艦中に取りしを以て一行は該港を出帆し航海中家雞及ひ豕の供給、十分ならんとを察し自ら安んする所ありしが豈計らんや其携ふる所の豕は歐洲の穀物其他本艦に貯ふる各種の乾物を食はしむるやうに馴致する

と能はざるよりして直ちに之を屠殺するの必要に迫りたり家雞も亦艦中に携ふるの後ち幾もなく頭部の病に襲はれ爲めに悉く死するに至れり一行はユッエラヤに於て艦を修繕する爲め其豫期せし所より長く留りしを以てボラボラに於ては上陸せず全群島にソサイテー（社會の義）諸島の總名を下して後其進路を追ひチュピアの指示せる凡そ一百「リーグ」の距離に在る一島に向ひ南方に進航せしに遂に十三日を以て之を發見しチュピアに就て其オヒテレアと稱するものなることを知れり八月十四日陸に向て進航し其接近するに迨び土人等長き槍を備へ以て我を待ちしを認めしが忽ちにして其大數海岸に集り就中二名あり身を跳らして水中に入り端艇を捕獲せんと勉めしと雖ども端艇は速に脫し去れり他に又同く之を試みしものありしも亦及ばずして止みたり

既にして一行は其上陸せんと欲する所の角を回りしに他に又一隊の土人あり前に見し所の如き兵備を爲し以て其邊端に立てるを認めたり而して其上陸の準備を爲すに際し土人を滿載したる一隻の蕃舟、岸を離れて一行の方に來りチュピアは只管彼等をして本艦員の志は敢て之に暴行を加へんと欲するに非ずして專ら釘を以て其他の產物と貿易せんとに在ることを知らしめんと欲して釘を出して之に示せしに土人等之れを見て端艇の舷側に來り其己れに與へられたる若干の釘を受取り甚だ滿足せし如く見えしが數分時間にして忽ち端艇に乘入り之を海濱に引去らんことを企てたり然るに之を威嚇せんが爲め數回其頭上を超えて發銃せしかば土人は身を跳らして海中に入り急ぎて蕃舟の許に達し此に其徒を救ひ上げんと槍へ

たる同國人に合せり因て端艇は其逃ぐるを追ひしと雖とも其乘員碎浪の極めて暴きを認めしを以て上陸せず更に便宜の場處を發見せんが爲め海岸に沿ふて進航せり其後エンデーヴォーア號の一行より「土人にして若し兵器を放棄するあらんには自ら海濱に行き之と貿易すべきと」を陳出せしに土人等英人に於ても亦斯くするに非ざれば之に同意するを欲せず然るに彼に或は逆戻の所爲あらんも計り知るべからざるを以て竟に其言ふ所に從はずして止めり且又エンデーヴォーア號の入りたる灣其他本島の各部到る處一として良港若くは好錨地の存せざりしを以て一行は終に南方に進航することに決せり

十五日一行は好微風に乘じて出帆し二十五日を以て其英國を出發せし一週年を祝し豫ねて此祭節の爲めに蓄へたる大なるチェシャ（Cheshire）製の乾酪を供出し又黑麥酒（ポーター）の樽を開きしに其味毫も損ずる所なし

十月七日木曜日に當り一の陸地を發見し八日（此日は公氏が始めてニウゼーランドに上陸せし日として宜しく記憶に留むべきなり）實に公氏は此等諸島に就き第二の不列頓を甄陶せし同胞數千の開導者たり其東岸に於て上陸せし場處をポヴァーティー（寒貧の義）灣と名けたり）の朝を以て一行は海濱より半「リーグ」を超えざる小河口に向ひて投錨せり公氏パンクス氏ソランダー博士及他の數士は同夕海濱に到り近傍に於ける二三の小屋に赴きしに土人中數名身を隱して窺ひたる者あり是等諸士の端艇より出づるを奇貨とし進んで其長き木槍を振り廻はし端艇を指して突進せしかば艇長、之を見て其頭上を超え小銃を發せしも毫も彼等をして恐怖せしむるの効なし仍て再び其の銃を以て覘を定め其一人を立ろに射殺せしかば其死を

見て痛く驚きけん極めて神速に森林に引退きたり斯くて前進の一行も此砲聲を聞き退きて端艇の許に來りしかば直ちに發して本艦に歸れり

九日土人等の大數の前夕上陸せし近傍の地に集れるを見しに多くは身に兵器を帶びたる者の如し公氏は長艇ピンチース艇ヤウル艇に海兵及水夫を乘組ましめ自ら他の諸紳士及チュピアを伴ひて海濱に進み土人の數名地上に坐せる處に相對して河の對岸に上陸せしに此輩直ちに起ちて兵器を把らんとし各〻長き槍若くは石を以て製したる指揮杖の如き者を持出し其指揮杖の如き者には柄に通したる一の紐ありて之を其手首に纏結せりチュピアは己れの國語を用ひて此輩と對話すべきことを命ぜられたり而して之と對話せしに其語の能く通じたるには一同之に驚喜せり此輩當初に在ては通常の脅嚇手段を以て兵器を振廻はし其意專ら敵對に在る者の如くなりしが時に若干距離を以て一發の小銃を發射せられ其彈偶〻水中に落ちしかば之を見て心に恐怖を生じたる者の如く忽ち其脅嚇を止めたりチュピアは是等に告くるに外客の意專ら之と貿易して食品を得んと欲するに在ることを以てせしに彼の徒之を諾し外客にして河を渡り彼方に來らば則ち之を爲さんと陳出す仍て先つ其土人等に要するに兵器を棄却すべきことを以てし之に同意せしが最も嚴重なる和親の證言も彼の徒に對しては勢力を有する能はずして十分之を履行するに至らざりしかば英人河を渡るを得策とせず却て土人に懇請するに河を渡り己れの方に來らんことを以てせしに暫時の後其一人之に從て來り又直ちに他の數名も之に次ぎ來りしが此輩に在ては貿易の爲めに提出せる飾珠

及鐵具の類を貰はず專ら兵器と交換せんことを陳出せしに由り之を拒絶せしかば不意に小銃を奪はんことを試みかけたり仍てチュピアは之を見て其徒に了知せしむるに斯かる暴行を再びせば立ろに死を以て罰せらるべきことを以てせしも尙ほ之を解せざりしにやグリーンの偶〻背後を向けしに當り其一人大膽にも躍り懸りて其劒を拔き取り數歩を退きながら之を其頭上に閃かしたり然るに其大膽の所爲は之をして其一身を犧牲に供せしめたり何となればモンクハウス氏は直ちに彈を裝したる小銃を取り立ろに之を射殺したればなり後ち暫時にして土人等徐々として內地に引退き英人も亦其端艇に歸りしが是等土人の溯待に加ふるに清水の欠乏を以てせしより公氏は更に該灣を回りて航海を持續し他の土人を導きて艦中に來らしめ此に懇切なる待遇を施し以て是等との間に好情を結ばんことを望めり既にして偶〻不快の事況と相伴隨して此望を前途に容易ならしむべき一事起れり即ち他にあらず偶〻二隻の蕃舟あり陸地の方を指し進まんとするを認め公氏端艇を發して之を遮り止めんとせしに其一隻は彼方に漕ぎ去りしが他の一隻中に在る土人等自ら逃るゝに術なきを察せるより突然橈を以て端艇を襲ひ爲めにエンデヴォーア號の乘員をして之に發砲するの已むを得ざるに至らしめ四名の土人之に死し他に三名の少年ありしが飛んで水中に入り泳いで海濱に達せんと勉めたりしも得ず終に捕へて艦中に送られたり然るに此少年等初めは自ら殺されんとを思ひ悚然色を失ひしがチュピアは再三身上の恙なきを保證して之を慰め漸く其恐怖の心を放たしめ同夕退きて寢に就くに當ては甚だ安眠せり翌朝其國人の許に送り返さんと準備せらるゝを見る

や大に之を悅び極めて滿足の意を表せしが其端艇公氏が初めて上陸せし場處に近づくを認むるや彼等告くるに住民の皆敵なるとを以てす然るに公氏は之にも拘らず其地の近傍に上陸するを便利と爲し且つ同時に此輩を保護して他の之に害を加へんとするあらば宜しく之を防がんと決したり既にして此輩其國友の許に歸らんと欲し將に其歩を發せんとするや土人の二大群あり急に之を目掛けて押し進みしかば此輩恐れ歸りて再び我が國人の保護に賴らんとせしが其土人の近づき來るに際し是等少年中の一名己れの伯父の其群中に在るを認めしかば乃ち河を隔てゝ之と相語り我が待遇の詳細を有りの儘に之に告げ且つ其收受したる美服を之に示さんと勉めたりしに此談話を終るの後其伯父たる者泳ぎて河を超え和親の徵として一の線枝を拽へ來りしかば乃ち其意に從て之を受け之に贈るに數種の物品を以てせり既にして右の三少年は自ら好んで再び本艦に來りしが公氏は其翌朝を以て此地を出帆せんと思慮したりしかば甚だ其少年等の意に背くに拘らす同夕强ひて之を海濱に送り返へせり

公氏は十一日を以て更に好良なる錨地を覓めんが爲めに出帆せしも無風なるが爲め午後に至て本艦を停止せしかば土人を以て充滿したる數隻の蕃舟海濱を離れ來り我より許多の贈品を受け且つ織布及び橈を以て歐洲の貨物と貿易せしが之を終ふるの後ちは甚だ狼狽して立去り竟に其伴侶三名を本艦に遺せり此三名は終夜艦中に留りしがチュピアの力を靈して危害なきとを了識せしめんと勉めたるに拘らず彼等は極めて恐怖して措かざるの狀を示せり翌朝凡そ七時の頃一隻の蕃舟海濱を離れ來れり而して其舟中には

四名の土人ありしが本艦內の土人等之を見て最初彼輩を說き己れの許に近づかしめんとするに甚だ困難を極めたるが其終に英人の人を食はざるとを彼輩に證言するに至て初めて之を肯じたり

十二日數名の土人一の蕃舟に乘りて海岸を離れ來り一種異樣の粉粧をなして躍り且つ謠ひ時としては專ら平和を表するが如く又時としては敵對せんと脅嚇する者の如くなりし而してチュピアは熱心に是等を誘ひ艦中に來らしめんと勉めたれとも彼等は一も其舟中を去るを好まざりき既にして又エンデヴァーア號の淺灘を避けんとする折柄、土人を以て充滿したる五隻の蕃舟海岸を離れ來り頻りに槍を振廻し其他種々敵對の形狀を以て艦中の者を脅嚇せんとするに似たりしかば葡萄彈を裝したる四斤砲を其頭上に發射せしに忽ち狼狽退行して散じたり其他又二隻の蕃舟ありエンデヴァーア號の碇泊せるに際し海岸を離れ來りしが其土人等の行爲甚だ平和にして種々の贈物を受けたりしも唯り艦中に來るとは之を好まざりき

十三日金曜日に當り一行は其進路を追ふて航行し翌朝內地の見ゆる處に達せしに土人を以て充滿したる九隻の蕃舟海濱を離れ來り就中五隻は相俱に謀議するの後判然敵對の意を表してエンデヴァーア號を追尾せりチュピアは是等に知らしむるに强ひて其試謀を固執せんには誅殺立ろに至るべきとを以てせんと欲し頻りに之を勉めたりしも其言語は一も効力を及ぼさゝりし仍て更に其徒をして今敵手とすべき者の兵器の利鈍果して如何を目擊せしめんが爲め葡萄彈を裝したる四斤砲を發射せしに有繋(つなが)に其徒も此方略

には忽ち感じて恐怖の色を現はし忙速に漕ぎ去りしが此時チュピアは逃るゝを止め之に知らしむるに若し汝等にして兵器を棄て平和の情を以て來らんには決して惡くは遇されざるべきとを以てせしに其舟の一隻は直ちに之を聞いて本艦の舷側に來り許多の贈物を受けたり

十五日午後兵裝したる土人數名一の蕃舟を泛べ本艦に來り就中黑皮を着したる一名あり其皮と貿易すべきに托して艦長より一反の赤き粗毛布を欺き取れり彼れ此粗毛布を其手に領するや否其約に從ひ報酬の皮を與ふるとを爲さず之を卷きながら艦長の再三促せるをも聞かざる眞似して直ちに其蕃舟を本艦より離れしむべきとを命じたり後ち暫時にして此蕃舟は前に同時に本艦を去りたる數隻の漁艇と共に本艦に歸り來り再び貿易を始めしが此第二回の貿易中土人の一名不意にチュピアの小童タイヨタを捉へて其舟中に携へ直ちに本艦を離れ極速を以て漕ぎ去れり一行は之を見て直ちに其徒に向ひ小銃を列ねて發射し其内一名傷を負ひしかば夫迄其船底に押へ居りしタイヨタを思はず手放したりタイヨタは其徒の驚愕狼狽せるに乘じ直ちに跳りて海中に入りエンデヴォーア號の方に泳ぎ何等の疵傷も受けずして終に艦中に救ひ上げられしが衣服の重みに由て甚しく其力を勞したれば其本艦に達せるは實に至大の困難なりき此タイヨタを奪ひ去らんとせし擧よりして公氏は其犯處に附近したる岬角に命ずるにキドナッパース（誘拐の義）の名を以てせり

既にしてエンデヴォーア號はベーア島と稱する一小島を通過し十七日公氏は一の陸頭を認め之にターナ

ゲイン岬の稱を與へ十九日又奇觀なる一岬を認め之にグープル、エンド、フォーアランド（屋翼狀陸喝の義）の名を下せり二十日金曜日に當り一行は數隻の蕃舟に乘れる土人に誘はれ更に北方二「リーグ」許の處に在る一灣に投錨せしが其土人等甚だ親和の行爲を呈し澤山に清水を得べしと稱して一の場所を指示せり既にして二名の酋長艦中に來り皆な短衣を着せしが一は赤き羽毛の房を以て飾り一は犬の皮を以て飾れり一行は之に贈るに麻布及若干の長釘を以てせしに其長釘を貴重すると他島の住民の如く甚しからざりき自餘の土人等も貿易を爲すに秋毫も欺かんとするの所爲なく而してチュピアに命するに英人の此に來れる所以の目的を彼に通ずべきとを以てし彼にして苟くも害を呈せざる限りは我亦之に害を加ふる如きは斷じてこれなきとを約せり午後酋長等陸地に歸り夕に至り公氏ソランダー博士及バンクス氏は海濱に進みしに住民恭く之を迎接し其數甚だ多からざりしも始終無禮を爲さざらんとに注意して止まず一行は該灣を回りて安意の逍遙を爲し此に二流の清水を認め頗る快樂を感じたり既にして一行は終夜海濱に留りしが翌日バンクス氏及ひソランダー博士は種々の鳥を發見せしに就中鶏及大なる鳩あり其他又魚を乾かす爲めに設けたる數多の階段及垣を回らしたる數多の家屋を認め又尖りたる耳を有して其相貌の甚だ醜き犬に遇ひ又蕃薯をも見たり又此に綿花の野生するあり又近傍の沿岸に於ては土地を耕して劃然たる園畝と爲せり又該灣に於ては蟹、蝦蛄及ホルス、マケレル（魚名）を澤山に漁せしが皆英吉利海岸に見る所の者より大なり

婦人は赤き顔料と油とを混じたる者を以て顔を塗れるも甚だ無粧飾なるを以て是却て其顔をして趣を少からしむる有様あり男子は一般に其顔を塗らざれども頭より足に至るまで其衣裳をも除かず赤き顔料の乾粉を撒擦せり蓋し彼等は身躰の清潔なることに於てはオタハイテの土人に比して稍〻劣る所ありと雖も其他の事柄に至ては往〻之に優れるあり

二十二日日曜の夕を以て一行は錨を揚げて海に出てしが風逆なるを以て稍〻南方の一灣に向て針路を取り該灣の南角の稍〻内部凡そ一里を隔りたる小澳に於て汲水場を發見せり

二十三日月曜午後を以て一行は海濱に進み此に極瓦の水及ひ翳蔚たる森林を發見し土人等も一行に對するに極めて禮遇を以てせり此に二個の甚だ高き丘陵あり其谷間に一の奇巖ありて一大弓形を爲し其洞穴長さ七十呎幅三十呎にして高さ凡そ五十呎を爲し該灣及び他の一方に連なる丘陵を瞰下すべきなり

一行は歸路に一老人に出會せしに其老人本土の武技を演じて一同を欵待せしが之を演するにパッツーパッツー及ひ槍を以てし其パッツーパッツーは戰斧の如くに之を用ひ又其槍は長さ十八呎乃至二十呎ありて堅き木を以て之を製し其兩端を尖らしたる者にして一の木杙を立て以て之を假想の敵に擬せり即ち此老武者は最初槍を提げ最も猛烈なる氣色を以て進みながら其假想の敵に衝突し而して後パッツーパッツーを振り上げ恰も一擊の下に人頭を割截すべしと思はれたる力を以て其敵の首を打碎けり又汲水場に於て土人の軍歌を謠へるを見るに或は嗟歎し或は喝采し或は顔を歪むると等を異樣に打混し婦人も亦之に與かれ

り翌日公氏及他の數士は該灣の入口に在る一島に到り一の蕃舟に逢ひしに長さ六十七呎、幅六呎、高さ四呎ありて其船底は殊に鋭く三個の樹幹より成りて舷側及舳首に奇異の彫刻を爲せり

一行は又未た落成せざる一大家屋に到りしに之を支ふる所の柱は皆彫刻を以て之を飾り其舟艇、橈及杖頭等に徵して知るべきが如く此土人、固より彫刻の嗜好を有するに似たりしも彼の柱の彫刻は決して該地に於て爲せる者と思はれざりき其愛する所の圖形は渦形若くは螺旋形にして時として之を一條二條若くは三條と爲し其之に用ふる器具は唯石製の斧及鑿の外あらざりしも尚ほ極めて精密に之を刻成し其嗜好は飽まで執拗法外にして曾て天然物に擬する者稀なり其小舍は常に樹木の下に之を建て其形長方形にして側面に低き入口を設け兩端に窓を穿ち茅蕭等を以て覆へり

十月二十九日エンデーヴォーア號は該灣を發して北方に駛せ本陸の北東角より凡そ一里を隔つ一小島に到りしが其着せし處は島の最も東部に屬せるを以て公氏は之を名けてイースト岬（東岬の義）と稱し其島を名けてイースト島（東島の義）と稱せり斯くて一行は尚ほ引續きて駛行し更に一島に達したるが公氏は之をホワイト島（白島の義）と名けたり

十一月一日四十隻の蕃舟以前の如く海岸を離れ來りエンデーヴォーア號を襲はんと脅嚇し其酋長の一人は槍を振廻はし種々の言語を述へ立てゝ頻りに本艦内の者に戰を挑まんとするものゝ如くなりしが再三

再四招誘を受くるの後終に本艦の舷側に接し來りしも敢て貿易を爲さんとの意を示さず而して夫の言語を述へ立てたる酋長は石を取りて之を本艦に投じ後直ちに一同に兵器を手にせしめたり是に於てチュピアは彼等に向ひ若し爭端を開くに於ては最も恐るへき結果に陷るへきことを告げしが彼等は毫も之に意を留めざりし然るに偶々一片の織布其徒の注目する所と爲りしより其情況頓に温和に歸せしかば漸くにして蝦蛄、淡菜及海鰻、鯉若干を入手することを得たり蓋し此一隊の土人に在ては毫も詐僞を行はんと試むる者なかりしが其後に來りし者の中には往々至當の酬物をも出さずして本艦より物品を取り去るものあるに至れり而して其中に是等の所業を以て手柄と爲し自ら其熟練に誇るが如き者一人ありしにより其將に本艦を去りて蕃舟に移らんとするに當りて一發の小銃を頭上に放射せしかば是には一同も大に恐怖し一時は靜肅に歸したりしが爾後乘員と貿易を始むるに當ては再び其詐僞手段を試み就中一人の如きは大膽にも日光に晒さん爲に懸け置たる麻布を奪ふて走り去るに至れり乃ち之を取戻さんが爲めに一發の小銃を其頭上に放射せしに毫も其効なきに依り終に小彈を以て其背部を射擊せしも彼れ尙ほ固執して其奪取物を返付せざりき而して土人等之を見るや忽ち艦後に退きて挑戰の歌を謠へり是に於て艦長は彼等に於て別に本艦を襲ふの樣子なかりしも四听砲を發射すべきことを命じ霰彈をして水上に雨下せしめしかば彼等之を目するや大に恐怖し狼狽爲す所を知らず忽ちにして引き退きたり

四日黎明凡そ十二隻の蕃舟忽然と現はれたるが其の內には二百許りの人を乘せ長短各種の槍及石を準備

し正に本艦を襲擊せんと決したるものゝ如くなりし而して其情勢たるや乘入るに最も適當の位置を知りたらんには直ちに本艦に乘入るならんと思はれたり斯くて彼等の本艦の周圍を漕ぎ廻るに際しては乘員は雨中に之を看守したりしがチュピアは又艦長の命に依り只管彼等を制して其企圖を放棄せしめんと頻りに說諭を試みたり然るに其說諭は毫も其効なきに依り終に數發の小銃を放射したるが彼等も是に至りて始めて敵意を飜へし終に貿易に移れり然れども其詐欺は尙ほ自ら之を禁ずることを得ざりき即ち兵器を貿易せしに二回は正當に之を行ひしも第三回に至ては彼れ我か織物を領しながら其兵器を交付することを欲せす却て之を請求するを笑ひしなり仍て其犯者を懲さんが爲めに小彈を放ちて傷けしも彼等は毫も之を顧す依然混雜する所もなく貿易を引續けり

五日朝土人等再ひ本艦に來りしが此日は前日に引換へ甚た平穩の行爲を示せり就中一老人あり名をトヤヴァと稱せしが我一行に告くるに時々北方より海賊來り何物に拘らす總て其手に觸るゝ所の者を剝奪し又時としては人の妻子をも捕へ去るとあり卿等の初め此に到着せしときは其何者たるを知らさりしより本地のものは大に之を恐れしが今卿等の意旨の善良なるを知て甚た滿足せる旨を以てせり且つ附言して曰く彼の掠奪者に對し安全を保する爲め人家を總て岩石の頂上に築きたるは大に自衛の便を得たりと既にして長艇及ピンチース艇を灣中に出して漁網を張りしに殆と漁獲なかりしかは土人等懇親の意を表さんが爲め多量の魚の或は調理し或は乾燥したるものを携へ來りて販賣に供し且つ一行に給するに薪料及

瓦水を以てせり斯くて乘員銃を携へて上陸する後ち留りて端艇を守りし者偶々二名の土人の相鬪ふを視たるに初めは槍を以て爲せしが數名の老人來りて之を奪ひ去りしより已むを得す我々英人の如く互に拳頭を以て雌雄を決せしと云ふ

九日土人等頗る多量の鯖を携へ來りて之を廉價に販賣せり盖し其購入せる高は極めて巨大なりしが我か一行は一ヶ月の糧食と爲すに足るものを鹽漬とせり

此日晴天なりしを以て星學者グリーン氏は數名の紳士と共に水星の日面經過を觀測せんが爲に上陸せしが其日面入蝕の觀測を爲せしは唯グリーン氏のみなりき而して公氏は時刻を測定する爲め太陽の高度を取れり此時陸上に此觀測を行ふに際し一隻の蕃舟其中に種々の貨物を積みて本艦の舷側に來りしが其時本艦の指揮を掌れる士官ゴール氏は是等を勸誘して貿易せんと欲せしに由り乃ちオタハイテーの織布にして彼等の未だ嘗て看ざりし價格の者を出たせしに土人中の一名直ちに之を取りて返すともなさす又交換品をも出さゞ頑固に手放すとを拒みしかば其場に之を射殺して其不當の所爲を罰したりしに自餘の土人等是を視て大に恐れ周章狼狽して逃去れり是に於て再ひ貿易を行ふと能はさりしが海濱に居る土人トシャヴァより事の顚末を聞きて大に死者の所業を非とせしかば彼等一同に於ても其死は固より至當の罰なりと爲せし樣子に見えたり

此日は晴天にして一纖雲の空を遮ることなかりしより水星の經過は寔に能く之を觀測せり即ち其觀測を

此に行ひしより此灣を名けてマーキュリー灣（水星灣の淺）と稱せり

此地の土人は日沒前を以て晩餐を喫し此時には魚及鳥を火邊の地に樹てたる枝に挿して燒き以て之を食せり或る一夕の晩餐に於て婦人の哀哭者一名其席に列りしとあり彼れ地上に坐して絶えず涕泣し之と同時に最も悲哀なる形狀を以て數言を繰返せしがチュピアにも尙ほ其何の故たるを說明することを得ざりき斯くて繰言の終るごとに彼れ自ら貝殼を以て或は其胸、或は其手、或は其顏を傷けたるなと其觀大に英國紳士の心を悼ましめしが其側に坐せし土人は唯一名を除くの外全く之に動かさるゝもの無りき

是より先發見せし一の河流ありて此日其河床より多量の牡蠣を得しが其味極めて美なりし翌日二隻の蕃舟本艦に來りしが此舟は詐欺を挾まずして貿易せり公氏は十一月十五日英王の名を以て此島を領し然後ち此島を出帆せり

十八日朝エンデーヴォーア號は本陸と一の島との間を駛行せしに其島甚だ豐饒の觀ありて廣袤も亦エリエテヤに髣髴たり時に土人を以て充滿したる數隻の蕃舟あり本艦の舷側に來りて一同軍歌を謠ひしにエンデーヴォーア號の乘員一も之を意に介せざりしかば一散に石を投じて去りしが又忽ち歸來りて其無禮を重ねたりチュピアは頻りに彼等に語る所ありしも彼等は兵器を振廻して之に答へ一行を屠殺にすべき態を示せりエンデーヴォーア號は此夕を以て投錨し翌早朝を以て海口を上りしに幾もなく數隻の蕃舟漕き來り數名の土人艦中に來りしが此輩能くトシャヴァを知り又チュピアを呼ぶに其名を以てせり斯くて一

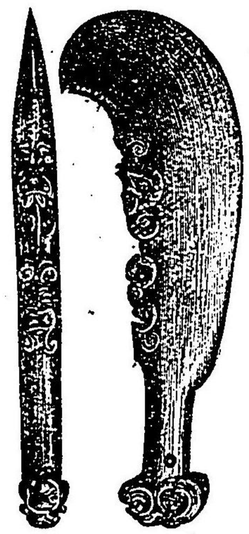
行より若干の贈物を得しかば甚だ滿足したる狀を呈して歸れり

二十日月曜日を以て本艦は五「リーグ」を航走するの後ち方言にウーアハオウラツーと呼べる一灣に投錨せり公氏は直ちに此灣を探らんが爲めバンクス氏ソランダー博士其他數名を伴ひピンチース艇に乘りて本艦を出でしが岸上に幾りて美景を呈する高樹を認めたるより之を視察せんがため其西側に上陸せしに先づ其樹林の口元に於て高さ地を拔くこと九十八呎周圍全く十九呎に及べる直立の一大樹を認め尙ほ歩を進むるに從ひ更に大なる樹木數個を發見せり而して公氏は其處に一の河流ありしかば之に命ずるにラームスの名を以てせり是れ英國のテームス河に相似たるを以てなり

一行は二十二日の早朝を以て出帆し引續きて駛行せしも潮の急なるが爲め遂に已むなく元の地に歸泊したり而して公氏及ソランダー博士は西方に向ひ海濱に進みしが一の記するに足るべき觀察をも爲さゞりき又た此二紳士の出發せし後蕃舟本艦の周圍に集りしがバンクス氏は土人と貿易を爲さんが爲めに艦中に留どまりしことなれば乃ち紙を以て其兵器及織物と交換せり而して彼等は概して貿易上には正直なりしも其の一名に三十秒砂漏に念を掛け之を竊取したる者ありて露顯せしかば終に九杖の笞刑を以て彼を罰したり此時土人等之を妨げんとして其舟中より兵器を取り出せしが其加へんとする罰の性質を聞きて一同滿足したるが如し而して其犯者は笞に我が笞を蒙りしのみならず後又其父と思はれたる老人より强き鞭撻を受けたり二十四日一行は海濱に沿ふて駛行し潮待の爲めに投錨せしも一も住民を視ざりき

然れども夜中火の揚るを認めしにより人の居住せることを斷定せり

二十六日暮に垂んとして七隻の大なる蕃舟に凡そ二百名の人を乘せて漕ぎ來り其中より數名は艦中に來れり其後又彫刻を以て修飾せる二隻の大蕃舟顯はれしが舟中の土人等は會議をなすの後ち本艦の舷側に近づき來れり仍て之を看しに種々の兵器を身に帶し稍ゝ高等の輩たるに似たり其パッツーパッツーは石及鯨骨を以て之を造り犬毛を以て粧飾し甚だ貴重に之を保持せり



パッツーパッツー

二十九日公氏が先きにブレット岬の名を命じたる所の陸角を風上にして航するの後更に風下に走りて一の大灣に入りしが此に數島ありて其南西側に投錨せしに幾もなくして三十三隻の大蕃舟來りて本艦の周圍に集れり其總舟中には凡そ三百の土人を乘せ悉く兵裝し居たり而して其中の數名は艦中に來れるが公氏は彼等に與ふるに其酋長中の一人には大絨の切れを以てし其他の者には或る小なる物品を以てせり蓋し此輩火器を目して全く其効用を知らざるに非ざりければ之に恐怖して暫時は平和に貿易せしが公氏の食事に就ける間に於て酋長中の一名一の暗號を與ふるや土人等皆な本艦を去り急に我が浮標を挽去らんと企てたり因て先づ一の小銃を其徒の頭上に發射せしに其効なかりしかば細彈を發射せしに又達せず依て更に銃彈を裝して發射せしめたるに彼の暗號を與へし酋長の一子股に負傷せしより漸くにして

彼等をして浮標を舟外に投棄せしむるに至れり斯くて其混雜を一層加はらしめんが爲め一發の實彈を發射せしに其彈丸海濱に達せしかば彼等上陸するや否直ちに走りて之を搜索せり蓋し此徒にして若し一種軍律的の規律を守り之を遵奉して運動をなしたらんには儼然たる一勁敵を現出せしならん

公氏はペンクス氏及びソランダー博士を伴ひ該島の一小澳に上陸せしに直ちに兵裝したる土人四百許り現はれて之を取卷けり公氏は土人の方に敵對の圖謀あるとを疑はざりしかば依然として專ら平和の手段を取り且つ彼等の方に進行して一線を畫し之を超過すべからざることを告げたり斯くて暫時は此界線を侵すともなかりしが終に挑戰の歌を謠て舞蹈を始め其間又た一方に在ては本船の端艇を海濱に引揚けんと企てたり乃ち此等襲擊の暗號に尋て土人等終に彼の界線を侵して亂入せしにより諸士は自ら防衛するの時機到れりとなし公氏先づ細彈を裝したる小銃を發射しペンクス氏又之に次て其小銃を放ち他二名の士も亦た之に倣ひしより土人等忽ち混亂錯雜に陷りて引退きしが其酋長の一名大喝一聲其パッツーパッツーを振廻して再び之を集合せしめたり是に於て博士は銃口を此酋長の方に向け一發放射せしかば彼れ忽ち他の土人と共に逃去りて既に小銃彈の達し得へからざる距離に退けり蓋し此時彼等の速に散亂せしは此間本艦に於ては終始此等の戰狀を目し居たるを以て乃ち此時一齊打ち方を搆へ仰角を取りて其頭上に發射したればなり此の小銃に於て土人に負傷者二名ありしが二名とも死には至らざりし後再ひ平和を復し諸士は塘蒿(そらんたみつば)其他の草を蒐集することに着手せしが土人中に惡謀を懷きて附け覘ふ者あらんとを疑ひ一

の巖窟に到りしに此に同日公氏より贈物を受けたる酋長ありて其妻及ひ兄弟の一人と共に出て來り只管寛仁の處置を乞ひしが負傷せる土人の一名は此の酋長に取り兄弟の一人たりし者の如く頻りに其傷のため死に至るとなきやを疑ひ甚だ憂慮に沈み居たりしが彼れ細彈と銃彈とは効力に大に差あるとを知らしめらるゝに迨ひ大に其心を安じたり仍て此後再ひ敵對を始むるに於ては必らず銃彈を用ふべきとを語り聞せり既にして其酋長及ひ伴侶に或る瑣細なる贈物をなすの後此の會合は歡心を以て終れり

諸士は再ひ端艇に乘りて該島の他の部分に漕き行き此に上陸して一の高處を占めたるが諸士は即ち是處より住民に富み且つ善く耕せる所の多數の小島の碁布せる快絶なる景を瞰下せり此時近傍なる一村落の住民は身に兵裝もなさずして接近し來り至謙至遜甚だ從順なる擧動を表せり時に海濱に殘れる水夫中に菜園に蹈込み馬鈴薯を掘取りし者ありしかは公氏は則ち其犯者を罰するに苦刑を以て嚴正の處置をなせり然るに此際其犯者の一名は此に反省せすして却て一土人の物を掠奪したれはとて此貴き英人を苦刑に處するの無情を罵しかば更に六杖を加へられたり

十二月五日火曜を以て一行は錨を揚けしに後忽ちにして無風となり且つ一大强流の偶〻濱岸に向ふものありて其流勢極めて急なりしが又た僅かに一鏈を隔てさる水上に破浪岩を見認めしかば一行は今にも之に乘り上ることと歟と各〻之に眸を凝したり乃ち此時此危險を知らさるチュピアの如きは海岸に立てる土人と對話したるか其陸を距るの近かりしことと推して知るへし然るに幸ひなる哉俄然海濱より一疾風の吹

起りしか爲め此恐るへき位置は之を脱出し得たり

七日數隻の蕃舟海岸より出て來りて本艦に尾せんとせしが輕風の吹き起りしが爲め之を待たずして進行したり十七日に於て本艦はニウ、ヂーランドの北端に近づけるが公氏之に命ずるに北岬(ノーザンプ)の名を以てせり

二十七日東颱(ゲール)起り加ふるに甚しき驟雨を以てせしかば已むを得ずメーン、スルを以て漂泊法(ブリンジング)を行はざるを得ざるに至れり而して此颱(ゲール)二十八日まで吹き續き同日午前二時頃に至り一旦衰へしが同八時に至り其力又た增して颱風となり怒濤を蹴すること益々強く正午に至りて稍々其勢を減ぜしも尙ほ強き颶風(スノオル)を遺せり

爰に歲改まり一千七百七十年一月一日朝六時一行は本艦を轉じて東方に駛行せしが其三日に於て赤眼の視限外に方り南東に亘れる陸地を認めたり此に格段の一事として記すべきはエンデウォーア號が西方十「リーグ」を航するに三週間を費しブレット岬より此に至るまで總計五十「リーグ」の距離を行くに五週間を費したること是れなり

九日東北東に方りて高地を認め艦長之を名けてアルバトロス角(信天翁角の義)と稱せり此角より北東の方凡そ二「リーグ」の距離に於て甚だ高き山を見たり其高さテチリップ山に均しく其峯頭には雪を戴きしが之に命ずるにエグモンド山の名を以てせり公氏は此處に於て本艦を傾倒して修繕し又薪水を得て之を積込まんと欲せり仍て十五日の黎明灣口を目指して進みしに殆んど無風なりしかば本艦は潮流の爲めに押流され

て濱岸を距ること一鏈の内に入れり然れども端艇の助けに依て漸く之を離れ午後二時を以て該灣の北西側に於ける安澳に達し深さ十一尋底質軟泥の處に雙錨繫泊をなせり既にして四隻の蕃舟海岸を離れ來りしが其意全く偵察の爲めなりと想像せられたり何となれば此土人中特に高等の者と察せられたる一老人を除くの外一も艦中に入らんと試むる者なかりしを以てなり其老人の艦中に入らんとするや衆皆な之を諫め其手を捉へて行かしめざらんと勉めたりしが竟に之を制すること能はず老人は尤も優渥に接待せられ一同愁眉を開きて跳舞歡笑し然る後ち郭を設けたる一村内に退けり

チュピアは其國土の習慣に從ひ老人と鼻を觸接し後ち老人は數種の贈物を受けて其伴侶の許に歸りしに是に於て公氏及ひ他の數士は海濱に上りしが此に富饒なる樹林及び最良なる水の細流を認めたり斯くて又た漁網を張りしに其勞空しからず暫時にして三百所の魚を獲たり

十六日乘員等艦を傾修することに鞅掌せしが時に三隻の蕃舟數多の土人を乘せ海岸を離れ來れり中に數名の婦人を認めしかば是れ全く和親の意を表する擧動と推量したりしに後幾もなくして長艇を押し止めんと試み此推量と全く反對の擧動を示せしかば公氏其頭上に發銃する例の慣用手段を取り一時此等を恐怖せしめたり斯くてチュピアは其土人に向ひ嘗て本艦の如き大艦を視しことありや否やを問ひしに否と答へ又た斯の如き大艦の我海岸に碇泊せしことは嘗て之を聞かずと謂へり此處は魚類の產に富み其住民は之を捕獲するに圓筒狀の網を用ひ其網底に數種の籠を入れて之を擴め以て其頂上を收縮し置けり乃ち斯

の如くなし置くときは各魚餌を得んとして之に入り來り極めて多量に捕獲し得るなり此に又た種〻の鳥あり其數も亦極めて夥多なり

公氏パンクス氏及びソランダー博士は本艦より凡そ二里なる他の澳に到り此に土人の一家族を認めしが其近くを視て大に恐怖せるもの〻如くなりき此種族は人肉を食ふの生蕃にして既に目前に食ひ殘せる種〻この人骨ありしが此輩此厭ふべき習慣に就て一も秘する所なくチュピアは一行より其事實を確むべきとを望まれて其骨の人骨なるや否を問ひしに其推察に違はすして正しく人骨なるとを平氣にて答へ且つ人肉を以て美味の食品となし居るとを形容を以て示せり此家に一婦人あり臂及ひ腿を目も當てられぬ迄に傷け居たりしが是れ其夫の近時敵の爲めに殺されて啖はれたるより自ら斯の如くなせしものと思はれたり

土人中に一日四個の頭蓋骨を賣らんが爲めに携へ來りし者あり其價を聞くに極めて高價なり蓋し此徒にありては殘酷野蠻の行爲を以て自ら誇るもの〻如く其敵を殺したる方法を示すに當りては特別に愉快の態度を以てせり其之を殺すの方法を聞くに初めパッツーパッツーを以て之を打倒し然る後ち其腹を裂くにありと云へり

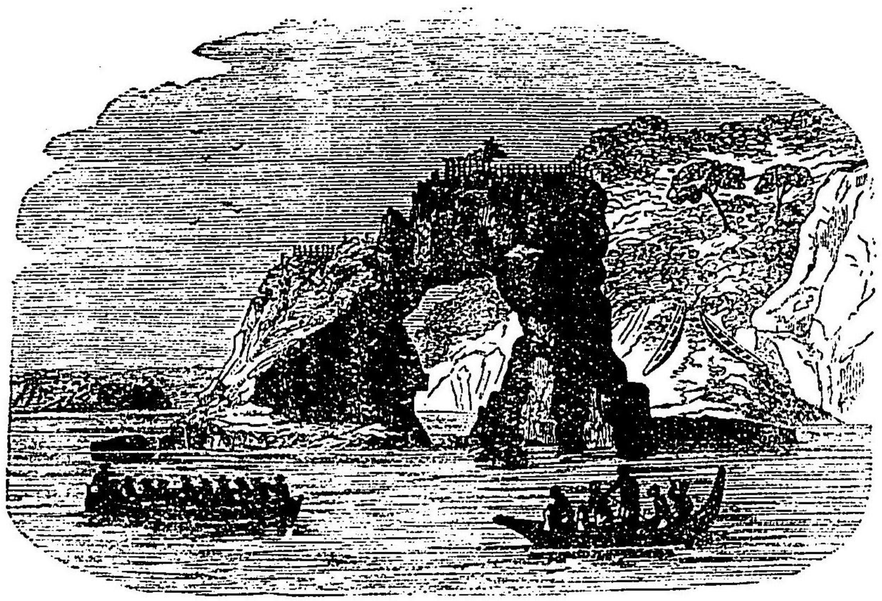
二十日朝パンクス氏は老いたる土人より一の人頭を買ひしに彼甚だ之を手放すとを好まさる者の如くなりき其頭蓋骨は打ち破りて腦を引抜き他の頭蓋骨の如く保存して腐敗を防けり其保存上の注意と云ひ又

た之を他の諸物と貿易することを嫌ひし樣と云ひ是に由て考ふるときは是等の頭蓋骨は彼等に於ては實に一の勳章にして戰功を示し勇氣を證するの具と察せられたり本艦の一行中數名は此巡察中其堡砦を視しに敢て高地の利に頼らずして專ら其周圍に二三の廣き壕を回らし之に一の吊橋を架して其構造極めて簡單なりしも土人相互の戰鬪に於ては能く敵手の攻襲を遏止するに足るならんと思はれたり此等の壕には又材を地に樹て以て一の柵欄を設けり

二十四日一行は又一のピッパ即ち堡砦を巡覽せしに是れ甚だ高き巖上に設け其下部空凹にして自然に甚だ美なる弓門をなし其一方は陸に接し一方は海より起れり住民等一行を迎接するに至大の禮節を以てし且つ好んで甚だ珍奇の諸物品を示せり

二十五日公氏パンクス氏及びソランダー博士は共に遊獵の爲めに上陸し海邊に於て數多の家族の魚を漁するに會せしに彼れ甚だ敬禮を盡し我が一行より瑣細なる贈物を受けたる報酬として老若男女共頻りに我が一行に接吻及び抱合の禮を行へり翌廿六日は一行一丘陵の頂上より東西二海の間に通ぜる海峽を目測せんが爲め更に巡察を爲せしが此丘を去るに臨み一行は石を集めて一の三角塔を築き彈丸及び飾珠若干を此に遺し以て歐人の此處に巡遊したる紀念標となせり二十七日及び二十八日には本艦に必要の修理を加へ傍らに魚を捕獲せしか又た出帆の用意に鞅掌せり

三十日火曜に當り一行中より塘蒿摘取（みちんかみつば）の爲め早朝を以て派遣せられしものあり此者途に凡そ二十名許の



土人に邂逅せしに中に五六名の婦人あり其夫は皆な近頃敵に擄はれしとのことなりしが相共に地上に坐し貝殼又は鋭き石片を用ひて無慘にも自から身躰の各部を切り以て其哭慟に堪へ難き情を表せり然るに其伴侶中の男子等は此間恬として毫も其徒に意を用ひず極めて冷淡なる狀を以て小舍の修理に從事せり

木工の手にて二本の柱を調製せしかは乃ち之を紀念碑となし之に年月日及ひ船號を記し一は其頂上に英國の國旗を掲げて之を汲水場に建て又た一は該海面の最も近傍に在て方言にモチュアラと稱せる一島に之を建てたり而して其住民に示すに今回此二柱を建てたるは全くエンデーヴァー號の此地に來りしことを後の航海者に知らしむるが爲めなることを以てせしかば彼等は皆な誓て毀つ可らざることを睹せり公氏は此浦に名くるにクィーン、シャーロッツ浦の稱を以てし英國君主の名を以て之を領せり

二月五日一行は錨を揚げしが風忽ちにして落ちしにより再びモチュアラ島の少しく上手に投錨せり

斯くて本船は其翌朝を以て該灣を出發せしが該灣の住民には人肉を食する野蠻の習慣一般に行はれしより本艦の一行は之に名くるにカンニバル灣（食人灣の義）の稱を以てせり其住民は海岸に沿ふて各處に散在し其數凡そ四百に滿つへし一たひ危急の事起れば其ビッパ即ち堡砦に退くなり此輩皆な身貧にして其用ふる處の蕃舟にも粧飾を用ひたるものを見ず彼等と行へる貿易は專ら魚類にありしが他部の土人等の全く知らざりしに關せず此輩は幾分か鐵の事を知れり

本艦は是より東方に進みしに偶ゝ潮流の爲めに押流されてクィーン、シャーロッツ浦の入口なる一島に附近し今や將に巖礁に衝突せん歟と極めて危險の狀に迫りしが錨索を伸ばすと百五十尋の後始めて艦を繫留し得たり時に巖礁を距ること僅かに二鏈に過ぎざりしも其盛にて落潮時を待つより外に好手段もなかりき然るに夜半後までは落潮とならざりしなり七日朝八時一行は錨を揚げしに落潮に加へて疾風なりければ艦忽にして海峽を通過せり

翌朝一行はパルリサー岬を距れてよりタルンエグーン岬の北東に陸地の延長せるを發見したり午後に至り三隻の蕃舟海濱を離れ來りしかば其粧飾に於ては此海岸に於て見し者と異ならず而して其土人等を誘ひ艦中に來らしめしに一も困難なく皆甚だ禮讓を旨とし互に贈物の交換を爲せり其衣服はパトソン灣の土人に相似たりしが中に一老人あり甚だ異樣に其眉を蹙飾し又其鼻に横たへて赤線を染め其髭髮の白き

と著しく其衣服は麻にて製し緣に縫箔を施せり其下には織布の短衣樣の者を着し齒骨と綠石とを以て其耳を飾れり蓋し此形狀より判定するときは彼れは則ち其國人中に在ても極めて其の位置高き人たるが如し

十四日凡そ六十名の土人四隻の蕃舟に乘り本艦を距ること投石の達すべき以內に來り本艦を一覽して愕然たりしかばチュピアは此時更に接近し來らんとを頻りに勸めたれども竟に之に從はしむるを得ざりき仍て同處に命ずるに傍觀島の名を以てせり

三月四日數頭の鯨鯢及び海豹を視たり九日に一行は一の岩陂(レッヂ)を見認め後又幾もなくして海濱より凡そ三「リーグ」の距離にある他の岩陂を見認めたり而して一行は夜中に之を通過して北方に向ひしに黎明に迫で艦首の下に又他の岩陂を發見したり斯くて尙ほ北方に進みしに翌日に至り更に又た一の凄しき巖礁に會せり是れ本陸を距る凡そ十五里の地位に在りて其嶮立極めて高く周圍は凡そ一里と思はれたるが是には則ちソランダー島の名稱を下せり

十三日一行は一の海灣を發見せしに灣內に數個の島嶼ありければ若し水深にして淺からざりせば船舶、各方の風を避くるに便宜の地たるべしと思はれたり公氏は即ち之に命ずるにタスキー灣(暗灣の義)の名を以てせしが尙ほ此灣に高く尖立したる巖礁五個ありて著然たりしかば乃ち其一地角に命ずるに五指角(ファイブフヰンガー)の稱を以てせり一行は今や既にヴィポイナムーの北西岸全部を通過せしが一も觀察するに足る者なく唯突兀

たる巖礁の其頂きに雪を戴きて皚々たるあるのみ滿目の光景轉た凄凉を極めたり

公氏は二十七日を以て此無情なる海濱の全躰を廻了せしかば乃ち此處を立出でんとに決せり仍て同氏は長艇に乘じて上陸せしが即ち双錨繫泊に至當の地位及び好良なる汲水場を發見せしを以て乘員の大數は水漕を滿たすに從事し木工は薪料の伐採に從事せしが公氏ペンクス氏及びソランダー博士は又た該灣及び其近地を巡檢せんが爲めピンチース艇に乘じて出發し一處に上陸するの後未だ嘗て知らざる異種の植物數種を發見せり又此時同處に於ては一も住民を見ず數個の小舍を認めしも既に久しく廢棄に附せしものと思はれたり既にして十分の薪水を艦中に取入れ夕景を以て一同の本艦に歸りしときには最早何時にても出帆し得べきの準備全く整ひたり是に於て愈々新和蘭の海岸に向て針路を取り東印度を經て歸國すべきとを決せり

三月三十一日一行は東方の地角より出發し之を名けて告別岬と稱し尙ほ其出帆せし灣に名くるにアドミラルチー灣(海軍本部灣の義)の稱を以てし尙ほ二個の岬に命するにスラッフェン岬(ジャクソン岬)の名を以てしたり是れ海軍本部兩秘書官の名に取れるものなり又該島と告別岬との間に在る一灣を蒙昧灣と名けしが是れ巖きに一千六百四十二年十二月を以て始めてニウ、ヂーランドを發見せしアベル、ジャンセン、タスマン氏か虐殺灣(マーダラスベー)と稱せし者と同物なりと想像せられたり蓋し當時同氏は其國、國會の爲めに此大島を領せんと冀望し之に國會島の名稱を下せしも土人に襲擊せられんことを慮り一回たに上陸して其目的を 舉

能はさりき殊に同地は從前頻りに探討せる南方大洲の一部分を爲す者と察せられたるも今や其海岸を精密に巡檢するに迨ひ全く二島（現今ニウジーランドの名を以て世に知られたる）より成ることを發見せり其位置南緯三十四度乃至四十八度西經百八十一度乃至百九十四度の間に在て北方の一島は土人之をイーヒーノマウウィーと稱し南方の一島は之をドヴィー、ポイナムーと稱せり其北島は處によりては山嶽多きも亦能く森林に富み各溪谷の間には必す一小河の潺流するあり而して其土壤は地質疎鬆なれども地味膏腴なるを以て歐洲の諸果樹諸植物諸穀類を移植するに適すれば之を移植せんには潤澤なる産出を得へきなり

本島灌漑の根源たる其周海は美味無害の魚類に富み本艦の投錨せる各處に於ては唯釣と絲とを用ひて乘員全體に供給するに足るべき魚を捕獲したり又た網を用ひて之を漁せるときの如きは之を塩漬となし以て艦中數週日の食に充つるを得たり而して其魚類中には赤た曾て我々の見ざる所のもの多種ありて乘員各々其意に任して之に名稱を附したり

此に凡そ四百種の植物を發見せしが其中ガーラン、ナイトセード（龍葵の屬）ソウ、シスール（蘚の屬）及二三種の羊齒及一二種の草類を除くの外は皆嘗て英人の知らざる所のものに係れり又此海濱には野生の塘蒿及一種の水芹を夥しく見たり又聊か耕作培養を加へて收穫せる食用植物の中には主として椰子大薯蕃薯を見受けたるが此耕作培養の爲めには既に大なる園畝の設けあり

又此に果實を生ずる處の灌木若くは樹木は唯一種の外存せずして是れとても又幾ど無味の漿果に屬せり然れども此處には全く大麻亞麻に代用すべき一種の植物ありて之に二類の別あり一は其葉黃色にして一は深紅色なり兩ながら苧葛蒲の葉に類似せり土人は是等を以て絲及索を製し其强きと歐洲製の者に優れり又其葉を縱に裂き長く之を結合して漁網を製し又其常用の粗服は一の簡單なる方法に由り同く之を以て作り精緻なる物には其織緯を以てせり

土人は其大なること歐洲の最も立派なる人種に均しく其面色は茶褐色にして西班牙人より稍ゝ濃く其躰格剛强にして其容貌亦醜くからず男女共に裝飾同一なるを以て之を識別するは主として音聲にあり男子は極めて敏捷活潑にして其髮黑く其齒白くして且つ並び好く總て温和なる氣質を有するが如し又た互に相遇するにも極めて懇切を以てせり然れども其村落各ゝ割據の姿にして常に相敵視し週年戰鬪の止む時なし而して是等の人民は常に其敵人を啖ふの習慣に居るに拘らず其情態性質に於ては俱に此地に移住せんと欲する外人の爲めに甚だ利ある所あるが如し

是等の土人は其髮を塗るに魚若くは鳥の脂を溶解したる油を以てし而して貧困なる人民は臭氣强き油を用ふるに由り惡臭鼻を撲つと雖ども上等の人種は新鮮なる油を用ふるが故に敢て其臭氣なし又是等の人民は骨又は木にて製したる櫛を眞直に髮に挿し以て粧飾とせり男子は頭髮を一把となして結び之を粧飾するに鳥の羽を以てし又時として之を兩側の髮に着くるとあり婦人の髮は或は長く肩に垂るゝあり或は

之を短く切斷するあり

男女共に身躰に黑き斑點の刺文を施し名けてアモコと稱す殊に男子に多し婦人は一般に唯唇に標飾するのみなれども時としては他の部分を黑色の片布にて標飾するとあり男子は之に反して年々其斑點を增加し年甚だ老いたる者の身躰は幾ど覆ひ盡して餘地を存せざるに至るアモコの外又畦の狀を以て身躰を標飾するも其緣曲りて全躰に黑きが故に其狀甚だ醜くし面の粉飾は之を螺旋狀に畫き兩頰とも全く同樣に標飾し其身躰を粧へる着色は宛も金銀糸の細工又古き彫物細工の花葉に似たり然れども二個の面二個の身躰を對比せば一も同式を以て着色せるとなし其他又ニウヂーランドの人民は其身躰に赭石の乾粉と油と混したるものを摩り込みて塗れり其衣服は花菖蒲の葉を割きて長き條片となし之を織り合せて一種の席となせるものを以て之を作り長さ七八「インチ」の條端其表面より懸下せり此席は肩を超えて纏ひ以て膝に達せしめ更に又此織物を胸の周圍に卷き着け以て幾ど地に垂れしめて着するものなれども男子は平常之を着せざるの風なり

彼等は上に述べたる粗き席即ち粗布の外二種の織物を有せり其一種は甚だ粗なれども英國の帆布より强きと全く比較外に出づ又他の一種は織物の織緯を糸に撚り之を縱横に結合して製せるものなるが宛も我が食卓上に於て皿を載する所の席に類せり

彼等は又羽毛を以て飾りたる二三の衣服を有せるが我々既に其總身を赤き鶏鶏の羽を以て蔽ひたる一人

を視たり

婦人は其頭の頂上に於て髮を結ばず又赤き羽毛等を以て之を飾らす其衣服粧飾に意を用ふるとは男子よりも頗る薄し其捕魚の爲めに出行く時の外は常に垂衣を其身の周圍に引締め其捕魚に出行く時には務めて男子に見られざらん樣に注意す

男女共に耳に孔を穿ち其孔を擴けて手指の入る程になせり其耳飾には羽毛片布、片骨を用ひ又時としては木片より成れるを用ひ居れり當時は多く我國人より付與したる釘を之に用ひしが婦人は時として信天翁の白き絨毛を以て其飾となせり彼等は又其耳に懸くるに小鑿、臂、犬齒、又は亡友の齒及爪等を以てし又婦人は其臂及脚首を貝及骨其他紐の通ずべき各種を以て飾り男子は其頸の周圍に紐を以て綠色の雲母若くは鯨骨に人の肖像を彫刻せるものを纏へり當時又鼻の軟骨に孔を穿ち之に羽毛を通ほして兩頰に突出したる一人を見たり

是等の人民は其家屋の構造に於ては他の諸物より拙劣なることを示せり其家屋は長さ十六呎乃至二十四呎幅十呎乃至十二呎高さ六呎乃至八呎にして其構造は輕き樹枝より成り牆壁及屋背は乾草を堅く編み合せて之を作り中には樹皮を以て其裏面を裝ふたる者あり屋背は一の竿を一端より一端に渡して之を作り其戸口は人々の僅に匍ふて入るべき高さになし屋背は斜に傾けり而して其戸口に近く方形の孔を設けて窓牖及烟突の用に供し其傍らに火焚所を設けり又其戸口を蓋ふに一の板を以てし之に彫刻樣の飾りをな

し以て家具中の一粧飾品と爲せり側面の牆壁及屋背は前後兩端の牆壁外に二三呎突出して一種廊下の如き檐を形ち造れるが此に腰掛を置き以て坐するの用に供せり火を焚くには地盤に方形の凹みを設け之を石若くは木にて圍ひ以て其中央にて焚けり其寢に就くには牆壁の傍らに寢ね其臥床は唯地上に敷きたる藁のみを以て成れり富者若くは大家族を有するものに在ては其搆内に三四の家屋を有し而して屋内に備ふる所の家財とては衣服、兵器、羽毛、或る粗製の工具及是等を納むる所の櫃類のみ羊齒の根を打つへき槌、水を蓄ふべき瓠、食品を納るべき籠等は之を屋外に置けり當時一大家屋にして長さ四十呎幅二十呎高さ十四呎あるものを見しに其側面は彫刻したる板を以て之を飾り其工事、自餘の家屋に優りをりしか其家屋は落成せすして放棄せしものゝ如く見受けられたり

此國の蕃舟は長くして狹く就中大なるものは戰爭の爲めに造れるものゝ如く舟中三十名乃至一百名を容るゝに足る當時トラカの蕃舟に長さ凡そ七十呎にして幅六呎深さ四呎のもの一隻あり其舟は底鋭くして厚さ凡そ二三「インチ」なる三個の長材より成り各材相共に強き辮髮にて固結し各舷側は幅凡そ十二「インチ」厚さ凡そ一「インチ」半の一板を以て全く之を作り同樣の強さを以て巧みに之を舟の底部に定着し又た數個の横木を舷側より舷側に横へて之を堅め以て其蕃舟を強固ならしむるの具へに供せりメルキュリー灣及ひオブラーヲに於て視たる二三の蕃舟は全く一幹の樹木を以て作り火にて燒き窪めしものなりしか此他の多數は上に記載したる如き方式を以て之を作れり又主として漁用に供せる小艇は其首尾を飾

るに人の肖像を以てし白色の貝殼を以て其眼を造り其口より巨大なる舌を吐かしめ全躰の面相をして極めて醜躰に傾かしめたる觀あり又戰爭に用ふる大舟は之を飾るに質樸の細工を以てし一面に黑羽の流蘇(ムラサ)を以て之を蔽ひ全躰十分に清雅の狀を呈せり其舷板は粗糙に之を彫刻し白羽の流蘇を以て之を飾り總て是等の舟を漕くには長さ五六呎の櫓を以てし其櫓又は長き楕圓形を爲し柄に近寄るに從ひ次第に其幅を減ぜり蓋し是等の櫓を以て漕く所の速度は實に驚くへき者たり又帆は一種の蒲若くは網より成りて各舷側に樹てたる二本の眞直なる棹の間に之を張り二條の索を各棹の頂上に附着し以て帆索(シート)の用に供せり而して此等の舟は二名各〻一の櫓を把り舟尾に坐して之を進行せしむるを常とせり但し其進行は唯風前に走るを視しのみなれども其方向に於ては極めて迅速に走れり

是等のニウサーラント人は斧、釿及ひ鑿を使用せるか就中鑿を以て孔を穿つに巧みなり其鑿は綠石又は人の臂骨を以て之を作り又其斧、釿は硬き黑石を以て之を製せり又綠石の小工具を使用せるが之を用ふるは唯其刃の鋭利なる間のみにして鈍なるに至れは再ひ之を鋭利ならしむるの器具なきを以て乃ち之を投棄せりトラガの土人は他より與へられたる硝子の小片に孔を穿ちて頸に懸け居りたるか此孔を穿つに用ふる工具は蓋し綠石の小片なりと思はれたり

是等の人民は甚た秀てたる耕作をなせり即ち其耕作法たる一の狹長なる材の下端をして刃の如く尖鋭ならしめ其上方に少許の間を隔てゝ一の木片を横に打込み之を足掛として刃端を地中に蹈み込むの便に供

し以て鋤犁に鍬の用に代らしむるなり然るに土壤輕疎なるか爲め耕すに辛勞を要せず唯此一器のみを以て廣さ六七「エークル」の土地を容易く掘起すべきなり

挽網即ち大漁網は協同の勞力を以て之を作れるが恐らくは全部落の共有物ならん其釣針は貝殼若くは骨を以て之を作り又魚を捕獲するに編物細工の籠を使用せり其兵器は長短の槍戰斧及パッツーパッツーにして槍は其一端を尖らし長さ凡そ十六呎にして其中間を把り以て其衝きを緩はすとの爲し難きか如く使用せり小艇又は海濱に於て戰ふに拘らず戰は常に接戰にして主としてパッツーパッツーを用ひ之を強き紐を以て胸に結附け以て敵に扭取られざるが如くす是等のパッツーパッツーは又之を優等者の腰帶に着け以て武威の粧飾となし又別に高位者を識別すべき一種の指揮杖ありて主たる軍人之を携帶す其指揮杖は鯨骨を以て之を作り全躰白色にして之を飾るに彫刻と羽毛及犬の毛を以てせり又時としては長さ六呎の杖を携帶せるか其粧飾は貝を以て鑲嵌するか然らざれば指揮杖の如く粧飾せり此高位者の標杖は通常老人の手に有するを例とし是等の老人は又アモコを以て身躰に斑點を染め出せり土人等嘗て英人を襲はんとして來りしとき其舟々に斯の如く標別せる老人一名乃至數名を載せしが彼輩の習慣として本艦より五六十「ヤード」の處に於て船を停むるや酋長は其座を起ち犬皮の衣服を着し其粧飾せる指揮杖を振て其何れに進むべき乎を指揮せり斯くて此際には先づ其飛道具の達すべからざる距離に止まり頻りに大聲を揚けて戰を挑み斯の如くにして漸く本艦に近つき終に舷側に密接するや其間尙ほ平和の狀を以て相語り又問は

るゝ所に答ふる等の狀ありて然後ち再び脅嚇を試み終にエンデーヴォーア號の乘員を卑法者ならんと假想し之に勵まされて軍歌及戰舞を始め出せり是れ襲擊を爲すの確兆にして即ち此動作あるときは常に必ず次で襲擊をなせり時としては我より小銃を發射して引退かしむるに至るまで依然として之を續けしともあれども又時としては本艦に對し輕侮の狀を示して二三の石を投じ以て其發情を洩せり

蓋し是等の戰舞に於ては其四肢を種々に捻ぢるやら其面を異樣にしかめるやら其舌を口より出して驚くべき長さに垂れるやら其瞼を眼玉の周圍に環狀をなせるまで開くやら又同時に其短槍を振り其長槍を回はし其パッツーパッツーを雙方に振り回はすやら其擧動實に勇壯活潑にして我々をして感服せしむるに足るの狀を示せり又軍歌を謠ふに當ては極めて精密に音調を保ち六十乃至一百の橈を以て同時に其舟舷を打てるに唯一の響を發するのみ平和の時に當ても時としては軍歌に類するの態度を以て歌を謠ふとあれども舞蹈は決して之を爲さず婦人も亦音樂的の悲音を發して歌を謠ひ其聲甚だ好く且つ和かなり其樂器の一は貝殼にして通常の角笛より發する所と異ならざる音響を發せり又一は小なる木管なるが其音聲は小兒の玩弄笛に敢て優る所なし又是等の徒にありては吾人が所謂調子と稱する者の如く度を測りたる音調を謠ひ又た發するとなかりき

我一行をして一見悚然たらしめたるは此等の人民中に行はるゝ人肉を喫ふの習慣なるが今是に就て語らんに數多の洞窟中には常に人肉及人骨の有るを發見したり其徒の艦中に携へ來りし人頭中には往々義眼

を容れ耳飾をなし以て宛も活けるが如く粧へる者ありたり其切に惜みしにも拘らずパンクス氏の購求したる一の人頭は若年者の頭なりしが其一方に挫傷の存せるを以て判斷するときは許多の暴打を受けしものと思はれたり

是等の人民の村落即ち方言ヒッパーはブレンチ灣及びクヰーンシャーロッツ浦の間に數ケ所あり而して是等は皆郭を設けて守衛し常に其内に聚居せるもトラガホウクス灣及ポヴァーチー灣の近傍に在ては遠く相隔てゝ家屋の散在するを見たるのみ食事は男女之を共にし男子は耕地、編網、捕鳥、捕魚等に從事し婦人は機を織り貝を拾ひ又食事の調理等に從事す

是等人民の宗教に就ては一の主神と數種の屬神とあるを認めしも其崇拜の方法に至ては之を聞くことを得ざりき又之が爲めに設けたる場所と察すべきものをも見ず只一の小方形の地面あり石を以て之を圍繞し其中央に一の鋤を置き之に羊齒根を以て作りし籠を懸けたるを見たり土人の言ふ處に據れば潤澤なる食糧の收穫を得んがため神に捧げたる者なりと云へり此徒の世界の起源及人類の初生に就て言ふ所はオタハイテーの住民の說と全く同樣なり

ニウヂーランド人と南海諸島の住民との間には衣服、家具、小艇、魚網等の大に相類似するを發見せり是れ其同源に出てたるを徵すへきものゝ如し實に是等の住民は其處の異なるに拘らす同一の口碑を傳へ其祖先の多年前他の一國より起りしと及其國のヒーウィヂと稱するとを語れり又チュピアが自國の語を用

ひて此地の住民に話しかけしに當り其土音の相異りたるに拘らず能く了解せられたり

一千七百七十年三月三十一日土曜を以て本艦は快晴と好風とに乘しニウヂーランドのファーウェル岬より出帆し更に疾颱を得て四月二日まで西方に進め同日熱帶鳥海鳥一種トロピックバアトを認めしが是れ斯る高緯度に於ては甚だ罕なる事なり斯くて十五日に至り又一のガヂット海鳥一種を見しが元來此鳥は陸地を遠く去らざる鳥なるが故に終夜水深を錘測せしに百三十尋にして底に達せざりき而して又翌日更に一の小鳥來りて本艦の索具に止りしに尚ほ百二十尋にして底を得ざりしが是れ既に陸地に近づきたる徵候に疑ひなく十九日の朝に至り果して一の陸地を發見したり仍て其極南端に命するに初認者ヒックス艦士の名を取りヒックス角の名稱を以てしたり

同日正午南緯三十七度五分西經二百十度二十九分の處に於て凡そ四「リーグ」を隔て著然たる一地角を發見せしが公氏は之に命ずるにラム、ヘッド角の名を以てせり是れ蓋し英國プリマッス浦の入口に在る同名の高岬に其著然たる形の相似たるを以てなり同地は土地低くして平坦なるが如く海濱白くして砂多く内地の部分は一面に森林と緑帶とを以て蔽はれたり此時三個の龍卷を見たるが夕六時該地の極北角より凡そ二「リーグ」の距離に到り之を名けてホーウ岬と稱せり二十七日數名の住民の海濱に沿ふて逍遙するを認めたるが其四名は一番舟を肩に擔へり然るに其輩敢て本艦に漕ぎ來らんと試みざりしかば公氏はハンクス氏ソランダー博士及チュピアをヤウル艇に乘せ其土人を認めし部分の海濱に送りしに其近傍に於て

兩土人公氏ノ上陸ヲ拒ム

陸に接し四隻の小形なる蕃舟ありて土人等我が艇の陸地を距る二三鏈以内に達するまで巖上に坐せしが其既に達するや走て森林に入れり然るに海濱の碎浪暴激を極め我が艇を妨げて上陸するとを得さらしめしかば一同夕五時を以て本艦に歸り又輕風の吹き起るに乘じ北方に向て發せしが此に又數名の土人を海濱に發見せり仍て水深を錘測せんが爲めピンチース艇を派し宛も土人の居る所の近傍に達せしに土人は之を見るや否其一名は上陸場に接したる巖石の内に身を隱し他の數名は丘を攀ぢて退けり斯くてピンチース艇は尙ほ海濱に沿ふて進みしに土人等幾ど之と一線を爲して步行し其身に具ふるに長き槍及刀の如き兵器を以てし種々の形容及言語を以て我が艇員に上陸を勸めたり又此艇に追尾せざる土人は本艦の接近せるを視て其兵器を振廻し自ら脅嚇の狀を示せり

既にしてエンデーヴァー號は凡そ八軒の家屋ある一村に對して投錨し公氏は直ちに數艇を下して之に各々人を乘組ましめ自らチュピアを率ゐて其一隻に乘組しが其各艇の海濱に接近するや否二名の土人進み來て宛も一同の陸地に足を容るゝを拒めるものゝ如くなりき公氏は之に飾玉、釘及び他の鎖細なる物を投げ與へしに大に喜んで之を拾へり是に於て公氏は形容を以て自ら飲水に缺乏せるとを示し且つ百方力を盡して彼に毫髮の害をも加ふるの意なきとを悟らしめんと勉めしかば土人等形容を以て艇員に上陸を勸めしにより公氏も之に從ひしが其上陸するや否、二名の土人再び一同に對して抵抗を始めたり仍て小銃一發を其徒の間に試みたりしに其響を聞て一名は槍を取落し大に周章てゝ之を拾ひ上げたり又其一

名は端艇に石を投せしを以て公氏は直ちに命じて小丸を裝したる銃を發射せしめしに其年長者の脚を傷けしかば彼れ急に走て若干距離を成せる一家屋に退けり是に於て艇員は既に彼に負傷せしめたれば最早爭鬪も是にて局を結ひしならんと想像して直ちに上陸せしに一同大に案外の抗擊を受けたり即ち彼は直ちに楕圓形の楯の中央を白く塗り之に二孔を穿ちて此れより透し見ゆるが如くなしたるものを携へて再び現はれ出てたるが土人等は之を視るより至大の勇を奮ふて前進し一同槍を把て之を艇員に擲付けたり然れども我が艇員は幸ひにして一名をも負傷せざりき是に於て一行は再び小銃を是等に發射せしに土人等再び槍を投擲し然る後一同に逃れ去りたり仍て艇員は直ちに小舍の有る所に進みしに其一小舍外に於て身を或る樹陰に隱せる數兒を發見せしかば乃ち之に數片の織布、紐、飾玉及其他の物を投げ與へ而して土人の槍、數個を奪ひて再び端艇に乘込めり既にして一行は該灣の北角に進み潤澤なる清水を發見せしかば數名は薪水を得る爲めに送遣せられしが其午餐の爲め一たび艦中に歸り來るに迨ひ土人等直ちに群を爲して其塲處に下り來り極めて詳密に其水槽を檢せしが敢て之を撤去せんとも爲さゞりき午後艦員の海濱に在るに當り兵裝したる土人凡そ二十名少許の距離内に進み來りて停まりしが其中二名は尙ほ更に接近し來りしにより當日其海濱に指揮官たりしヒックス氏は手に數種の贈物を載せて其徒の方に進み寄り懇親の意旨を示さんと勉めしも竟に其目的を果さゞりき何んとなれば同氏の進むを視て近寄來りし二名は既に退きたればなり同夕ベンクス氏及ソランダー博士は公氏と共に該灣の北方なる一澳に行き此に

四回の曳網を試みしが三四百听に餘れる魚類を捕獲せり

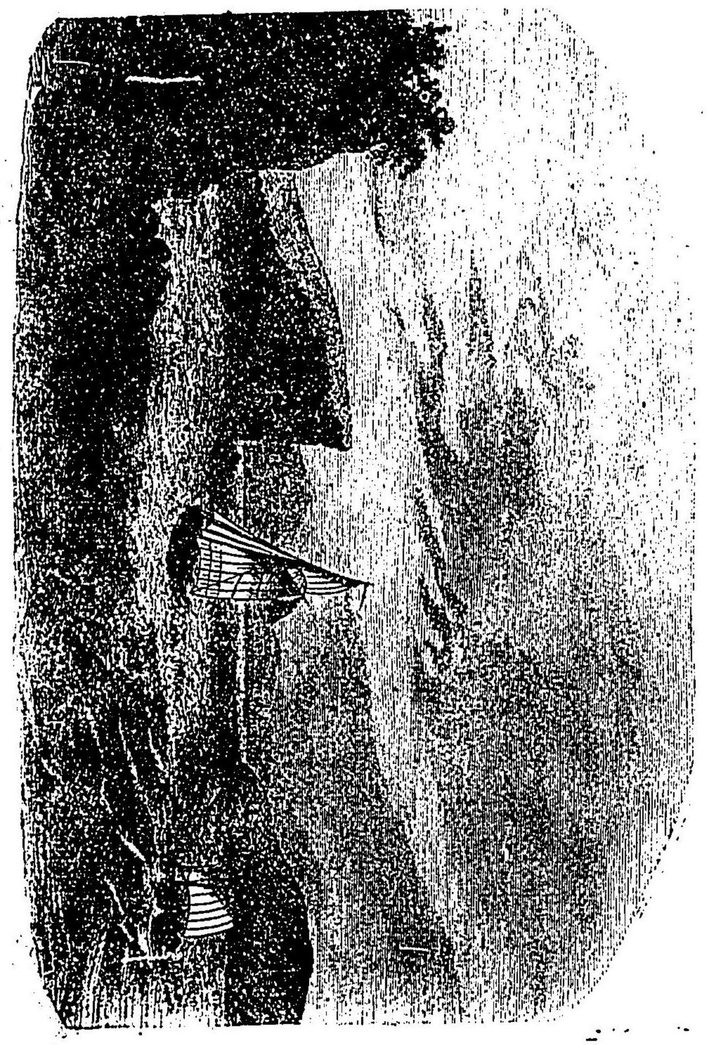
五月一日火曜に當り該灣の南角に命ずるにシュザーランド角の名を以てせり是れシュザーランドと稱する一水夫の同日死して之を其海濱に葬りたればなり此に鏡櫛及其他の品を贈物として小舍に差置きしに鏡は之を取り去らさりき一行は此地方を巡遊して隈なく探究せしが一面に森林草野にして雄快なる景色を呈し殊に其樹木は眞直なる喬木にして其中に矮樹の決してなきことを發見せり二等艦士ゴール氏は牡蠣を撈りながら數名の土人を視しに彼れ形容を以て同氏に陸上に來らんことを勸めたり然れども同氏は之を拒絶せり而して其事を終るの後ち同氏は水を得んとせる一行に合せんが爲め端艇を去らしめて自ら艦士候補生と共に陸上に進みしに途中に於て二十餘名の土人に出會せり而して其土人等は一行を追尾して僅々數「ヤード」の以内に接近し來りしにより ゴール氏は停まりて之に向ひしに土人等亦停まりて之に對せり斯くて再び進みしに土人等亦之に追尾せしが各々一の槍を携へ居りしにも拘らす一も襲擊する所なく既にして土人等は水漕の見ゆる處に來るや二三鏈の距離に於て佇立しゴール氏及其一行は安全に艦員の居る處に達せり是に於て我か二三の汲水者土人等の方に進みしに彼等の泰然として退かさるを見るや輕忽にも其脰を回らして急に引退きしかば土人等此卑怯なる擧動に持前なる野蠻心を動かし四個の槍を其逃去者に投射せり然れども其槍は皆側らに落ちて中らさりければ汲水者等之を拾はんか爲めに停まりしに土人等又之に恐れて引退けり此時公氏はベンクス氏及ソランダー博士と相携へて宛も此に來れり

チュピアは既に射撃することを習ひ得たれは屢〻鷄鶏を射撃せんか爲め唯一人にて徜徉せしに土人の恐れ逃るゝと英人を見るに異らさりき當時此處に命するに植物灣(ボタニー)の名を以てせしが是れペンクス氏及ソランダー博士に於て大數の植物を此に蒐集せしに因てなり

公氏は此港に駐在せる間日々英國の旗章を海濱に掲示し且つ汲水所の近傍なる一樹木に本艦の名稱と年月日を彫刻せり既にして五月六日日曜に當り一行は此植物灣より出帆し正午一港の冲合に在り此港を名けてヲャクソン港と稱し同夕更に一灣に接せしが又之に命するにブロウクン灣の稱を以てせり翌日正午に至り眼界内に在る最北の陸上甚た突出して見えしより之に三尖岬の稱を下せしが實に其名に反かさりき本艦の植物灣より北方に進むに當りて之を視しに陸地高く聳えて多くの森林之を蔽へるの觀を呈せり十三日午後一行は數個の巖石と多き島嶼とを發見せしが後日に至り又望遠鏡に依り凡そ二十名の土人の各〻脊に薪の一把を負へるものを發見せり

二十三日早朝公氏は數士とチュピアとを伴ひ此地方を探檢せんが爲め海濱に進み一灣の角内に上陸せしに此灣一の大鹹湖に通して其鹹湖の兩側には眞正のマングローヴ(樹名)多く繁殖し此樹には草の如き綠色を帶ひたる異種の蟻ありて多く巣を搆へ一たひ其枝を動かすときは大數の蟻其巣より出て來りて其加害者を酷に咬めり此樹には又總身に毛を生したる螟蛉(アチムシ)の大數隱栖せり

二十四日木曜本艦は該灣を出帆し翌日を以て一地角に相對する處に來りしか此地角は此時星座磨羯宮の



植物灣ヲナシタル

直下に在りしを以て公氏は則ち之を磨羯岬(ケープ、カプリコロン)と名けたり此地角の西側に於て塘鵝(カラシヤウ)に似たる許多の大鳥を視しか中には其軀幹五呎に近き者ありたり

二十八日月曜を以て本艦は北方に出帆し他の一群島の中に入りしに俄然激潮に會して三尋の水深を得しかは一同大に驚きて先づ本艦を轉し端艇を御して更に深處を探り然後ち緩に西方に駛せて同夕一灣の入口に達せしが蓋し此日の航海は午後に於て本艦の周圍を錘測せしに淺灘を通過するに足るべき水深あるを發見せしかば乃ち錨を抜き且つ錘測の爲め一端艇を船首の方に送り以て西方に進行したるなり而して此日投錨したるは夕六時にして本陸を距る凡そ二里水深十尋底沙質の處なりき

二十九日火曜に當り公氏は本艦を淺き處に坐せしめて其艦底を掃除せんとを欲し乃ち之が爲めに便利の場所を搜さんと航海師と共に上陸せしが此探行にはバンクス氏及ソランダー博士も亦之に同伴し艦を据うるに適當なる淺處は幾ヶ所も之を發見せしが淡水の汲取處を得ざりしには一大失望なりき斯くて一行は尚ほ進んで其地方に分け入り內部に於て護謨樹を發見せしが其枝上に粘土を以て作れる白蟻の巣ありて其大さ一「ブッセル」に均しかりき又他の樹に於て黑蟻を視しに此蟻は其諸小枝に穴を穿ちて其樹心を食ひ盡すの後ち其凹窪に寓所を設けしが之にも拘らず其樹は尚ほ青々として盛なる勢を呈したり此時一行は又千百無數なる胡蝶の各樹枝を覆へるを視たり

三十日水曜に當り公氏及他の紳士は海濱に上陸し一丘の頂上に登りて是より海岸及近傍諸島の觀察を爲

せり而して之を終るの後ち公氏はソランダー博士と共に前日發見せし一の海門を溯りしに天氣甚だ悪しくなりしかば夜に入り或は淺灘の中に路を失ふの恐れあるを以て一同本艦に歸りしが此終日中に土人を視しことは海濱に沿ひ我が端艇に長く追尾せし二名のみなりき而して此探行に於ては一も飲水を發見し得ざりしより公氏は本艦の泊せし海門を名けて渴水浦と稱せり

六月一日本艦は抜錨して進みしか其既に廣浦の名を下して區別したる所の偏西の海門を遠く距れたる時に臨み其北西航門の一角地にして南緯二十一度三十分東經百四十九度六分に在るものをパルマーストーン岬と名けたり又北岬とタウンセンド岬との間に一灣あり之を名けて海門灣と稱し同夕八時本陸を距ること凡そ二「ッリーグ」水深十一尋底沙質の處に投錨せり

二日土曜を以て進行し正午に至り一の高岬を認めて之をヒルスボロウ岬と名けたり此時西二分の一北七里の距離に方り森林及牧草を以て蔽へる陸土を認めたるが其丘陵平地溪谷等を明かに識別せり又該陸土の下其海岸より若干程を離れて大小一連の島嶼を認めたるが其中には數ヶ所より煙の揚る者あるを認めたり

三日日曜に當り本艦は更に一地角を認めてコンウェー岬と名けたるが又此岬とヒルスボロー岬との間に一灣を認めて之に反抗灣の名を下せり此時一行は望遠鏡に依り其島嶼中の一に於て二名の男子と一名の婦人を發見したるが又オタハイテーに於けるが如き索具を張る爲めの長材を持てる蕃舟を認めたり一行

はキュムベーランド公爵の名譽を遺さんが爲め此島嶼に命するにキュムベーランド諸島の名を以てし又其發見せし一航路を名けてホウイットソンデー航路と稱せり蓋し此稱呼の祭日を以て之を發見せしを以てなり四日月曜黎明を以て一地角に相對する處に至り之を名けてグロウセスター岬と稱し又此日を以て其他の數處にもホルボーアン島エヂキュムブ灣及突立岬等の名を命ぜり就中最終の岬は其周圍の低地中より挺然と突立せるを以て特に斯く名けたるなり內地は若干の丘陵若くは山嶽より成り該岬と俱に不毛の總觀を呈せり

五日火曜に當り本艦は陸地を距る凡そ四「リーグ」の處に在りしが六日の正午に至るまで依然陸地の所在に從て西北西に針路を取れり同日正午に至り天測を施せるに其所在の緯度は南緯十九度一分なりき而して此時本艦は凡そ二「リーグ」を隔て全く開きたる一灣の口に對せしが一行は此灣を名けてクレヴランド灣と稱し其東角を名けてクレヴランド岬と稱せり是れ今日クヰーンスランド殖民地の前部を爲せる者なり其西角は當時一島を爲せるが如き觀ありしを以て名けて之を磁石島と稱せり蓋し之に接近せし時羅針磁氣に感じて能く方位を指導せざりしを以てなり其兩角は共に高くして中間に本陸あるが如く其全面は此海岸中に於て最も凸凹參差を極め多撒不毛の瘠觀を呈せり然れども尙ほ人民は之に住せざるに非ざりき何となれは該灣澳の數部に於て現に煙の揚るを見たればなり

七日木曜黎明に於て本艦は右陸地の東部に相對し午後に至りて數條の揚煙を認め又數隻の蕃舟及若干の

樹木あるを視たり

八日金曜に當り本艦は眼界內に在る極北の地角を指して進航し此地角に命するに小丘角の名を以てせしが此地角と磁石島との間に連なる海濱は即ちハリファキス灣を形造り諸向の風を避くるに便なり同夕六時本艦は更に一地角に對する處に到り其地角を名けてサンドウヰッチ岬と稱せり是より該陸地を西走して後又北走し此に美麗なる一大灣を形造れるが一行は之を名けてロッキンハム灣と稱せり是に至て本艦は一座の島嶼に向ひ此陸地に沿ふて北方に進行せしが其一島に於て男女小兒を合せ凡そ四五十名の土人皆な裸躰にて立ち本艦を視て未曾有の奇觀とせる狀を視たり正午に至り其所在の緯度を實測せしに南緯十七度五十九分にしてロッキンハム灣の北角は本艦より西の方凡そ二里に在りたり該灣の境界には著然として高き島あり其島にはダンク島の稱を下せり

九日土曜の朝本艦は數個の小島と相對する處に至り其數小島を名けてフランクランドス諸島と稱せり正午該水道の中央に來り其本島の地角に對し公氏は其地角を名けてグラフトン岬と稱せり此地角を廻はりて後西方三里の處に於て一灣を發見せしかば則ち之に投錨して其島を綠島と名けたり此にパンクス氏及ソランダー博士は公氏と共に飲水を得んが爲めに上陸せしが容易に之を認むることを得ざるを以て直ちに本艦に歸り翌日トリニチー灣の近傍に達せり蓋し其灣を斯く稱せるはトリニチー、サンデー祭日の名を以て之を發見したればなり

十日日曜は本艦危險に陷りて最も著しき事變の生したる日なり

是より先き千三百餘里の航海中には到る處に最も危險なる巖石及淺灘を經たりしも其間には一も著然たる事變の我が冒險者の頭上に墜落するとなかりしが故に其認めし岬角若くは地角に命ずるに一も災害を表するの名稱を以てせざりしが今や始めて一行は其發見せし一地角に命ずるに危難岬の名を下すに至れり是れ全く始めて災害に罹りたればなり此岬は即ち其位置南緯十六度六分東經百四十五度二十一分に在り

十日夕六時本艦は船首の方に見えたる數個の巖石の危險を避くる爲め縮帆して風に接し海濱を距れて凡そ九時に至るまで好風と明月とに乘じ依然其冲合を駛せ二十一尋の水深に在りしに時に俄然其水深を減じ僅々數分時間にして十二尋十尋八尋と次第に之を遞減せしかば各員は直ちに其持場に就くべき命を受け艦將に投錨せんとするの場合に迫りしが又俄然深水に出しかば一同は茲に危險の去りしを悅び全く同夕認めし淺灘の尾端を超進せしに因るものならんと斷定して始めて愁眉を開きたり然るに未だ一時間ならざるに又水深直ちに二十尋より十七尋の淺きに轉じ未だ錘測を爲すの暇あらずして本艦は已に一巖石に衝突して全く之に座せり是に於て各員色を失ひ直ちに甲板に上りしが先づ其海濱に近からざることを知りしより一同は之を石花礁の上に座せしものと斷定せり然るに石花礁なるものは礁角常に尖銳なるも表面の質は極めて粗糙なるものなるが故に之と擦れ合ふときは其運動極めて寛和なるも之を粉碎するの

傾向あるものなり仍て直ちに諸帆を收め端艇を卸して之を檢査せしに本艦は全く礁陂に乘り上げて四所に座し四周の水船尾の方に最も深きことを認知せしかば即ち錨を右舷後半より投じ(クアーター)て全力を絞盤(カプスタン)に盡し只管之を礁上より脫せしめんと勉めしも竟に之を果すと能はざりき蓋し本艦の巖礁に衝突するや其激烈を極はめしとは乘員をして殆ど立脚を保つ能はざらしめたる程なりしが此時皓々白晝の如き明月に由て照し看るに被板の既に艦底を離れて浮び出るものあり斯くて終に副龍骨(フォールスキール)の浮び出でしかば今や一行も正に破壞するとならんと覺悟したり然れども尙ほ之を避くるに只一の方法は艦を輕むるにあるを以て先づ喞筒を以て艙中の水を排出するとに着手せり

斯くて又腐敗したる貯藏物、油麪、桶類、艙重、大砲六門及他の數品を艦外に投じ以て艦躰を輕めんとし一同此事に盡力して黎明に至りしが其間一同に危懼の念は須臾も心頭を去らず終に一の誓もなさゞりき

黎明一行には八「リーグ」を隔てたる處に陸地を認めしが本艦と其陸との間には更に乘員を上陸せしむべき一島だに存せざりき蓋し此時に當てや數隻の端艇を以てするときは一部の人員は克く之を海濱に遣り得べきも若し本艦にして其後に粉碎したらんには其餘の艦員は全く魚腹に葬られんと必然たり依て飽までも全員にて事を處せんと決せしに正午前に至り風頓に減じて眞無風となれり一行は凡そ十一時の高潮期を以て本艦を脫せしめんと諸事の勞力に汲々たりしが其潮期短く幾ど五十噸の重量を艦外に投じて十

入吋を浮び出でしに拘らず本艦は尚依然として動かず仍て引續き其用の省き得べき物は一も殘す所なく艦外に投ぜしも潮の落るに迫ひ海水の艦中に漏入すると極めて強きが爲に二基の喞筒も更に其効少なく本艦は容易に礁上を出んともせざりき是に於て再び夜半の高潮時を待て本艦を脱せしむるの勞を取らんと其準備に從事せり既にして五時に至り潮漸く張らんとせしが之と同時に漏水著しく增加したれば更に二基の喞筒を加へたり然れども此の增加の喞筒は其一基を働かせしのみなれば都合三基に過ぎず斯くて九時まで此三基を使用して本艦始めて平直に起き直りしが漏入の水量何分にも夥かりしかば一同は又本艦辛ひに潮の爲めに巖礁を脱し得るも脱するや否直ちに沈沒せんことを氣遣ふたり

是時に當てや一同は幾ど望を失ひ其境遇の悲哀に迫りしと實に言語の外に在りし蓋し天運盡るに於ては成すべき事の全く此に終るを知ると雖ども數隻の端艇安ぞ克く艦員の悉皆を海濱に輸送することを得ん乃ち先きを競ふの爭鬪は破船其物より一層の慘狀を呈すべきにより甚た之を恐れたり然れとも亦陸に達して至蒙至味なる纏族の間に伍し其靈くるあるの火器を恃みて僅に四隣を防き慘風凄雨の下に餘命を貪るの外他に一機運に會する望なきとを考ふれは艦に殘るの却て好運命に會すへきことを察したり既にして十時二十分過に至り本艦遂に浮ひ出て水の漏入の幸ひに以前より甚た少なきことを發見せしか其漏入の喞筒の排出に勝ちし時間既に久しかりしかは此時尚ほ艙中には三呎九吋の水を存したり然るに此時に當ては人々皆過働と傷心とに由り其心身の疲勞甚しかりければ何人も一次に五六分の時間より多く喞筒の

使用に從事すると能はす而して僅に之に從事すれは直ちに身を甲板上に投して暫しの休息を取り之に代りて起てる所の人亦疲れて同樣に身を投すれは前者再び起て之に代り互に畢生の力を盡せること斯の如くなりしに偶〻左の出來事を生せし爲め一同をして殆ど失望の極に陷らしめたり

如何と云ふに蓋し艦底の內被板と外被板との間には深さ凡そ十七八吋の空積あり然るに偶〻漏水の深さを測る者以前の如く內被板の上より取らすして外被板の上より取りしかは此に一の誤量を生し漏口俄に喞筒に勝ちて內外二枚間の全差に均しき水を增し即ち十七八吋俄に上れるか如く思はれたり是に於て一同も此に望を絕て思ふやう到底斃くに望なき生命今や勞するも何の益あらんと既に勞働に服する者なかりしが後ち幾ばくならずして其誤を發見せしかば意外の吉報に意悅闔艦に溢れ一同至大の勇を皷したり斯くて翌朝に至りしに其八時前には既に多量の水を十分に抽き去れり是に於て一同の議する所は專ら本艦を或る港に入れんとするにあり然るに既に一錨を失ひ又他の一錨の索を失ひしかば只管之れを索むるに勞を費したるが時に望み通りの海風吹き起りければ十一時を以て出帆し陸地を指して進みたり蓋し一行は漏口の詳細なる位置を發見せざりしかは艦中より之を塡塞するの望を有せざりしが副艦士候補生の一名に嘗て斯々の方法を試み成効したるを視しことある由を告ぐるものありければ則ち之を採用したり其方法は即ち他にあらず細割したる多量の塡茄と獸毛とを混合して之を一握づゝ古き副帆（スタッデンセール）の上に幷べ可成的輕く之を縫着け其上より羊糞及其他の汚物を散布し斯くして其準備既に成るに當り索を以て其帆

を艦側より艦底に牽張り其漏口の下に來るに當り吸力の爲めに其塡茄及獸毛の帆面より内に吸入さるゝに至るまで之を擴け置くにあり此時此方法は極めて善く其効を奏し從前三基の喞筒を用ひし處に一基を以て能く漏水を低下に保つことを得たり

公氏は此日迄本艦を或る港に走らし其用材を得て更に東印度に達すべき一艦に改造せんとを思慮せしが此日に至て其思慮を改め飽まで適當の場所を求めて其損所を修繕し然後ち素志に從て航海を追はんとに決せり同夕六時海濱より七「リーグ」の處に投錨し翌朝二個の小島を通過し之を名けて感望島と稱せり是れ其遭難の時に當り之に達せんと望みを屬したればなり午後に至り航海師に二艇を附し錘測を試みながら本艦を修繕すべき一港を搜索せしめんが爲めに送遣し本艦は日沒を以て海濱より二里を隔て四尋の水深に投錨し更に艦員中の一名をピンテース艇に乘せて送遣せしに九時を以て歸り來り二「リーグ」を隔てたる處に適當の一港を發見せるとを報ぜり

本艦は十三日水曜に當り朝早く出帆したるが幾もなく海濱より凡そ一里の處に投錨したり公氏は直ちに一端艇を以て錘測を施し該水道の甚だ狹隘なるを發見せしか其港灣たる現在の目的に取ては是迄の航海中に認めし他の各處に優りて頗る其望に適へり此日より翌夜へかけては疾風吹き續きしため遂に入港することを試み得さりしが其後尚ほ二日間艦は此處に繫泊せり

此時に當て艦員中壞血病に感ずる者多くチュピアも之を病みて兩脚に青黑き斑點を生じ星學者グリーン

218931

氏も亦同症に惱めり斯くて十七日に至るも疾風尚ほ止まざりしかば一同强ひて入港するとに決し遂に之を擧行せしに兩回淺洲に乘り上げ其二回目には本艦洲上に膠着して脫せず仍て船側長材、前檣桁、前接檣（ブローム、フォーマスト、フォーテフォール、ジブマスト）を取下して本艦の舷側に一の筏を設けしに高潮來りて午後一時に至り本艦終に浮びしかば急ぎ之を港に入れ海岸に密接せしめて之を固く繫ぎ直ちに其錨及錨索を取離したり

十八日月曜に當り病者の爲に幕營を設け之を容るゝの準備整ふや否や直ちに之を海濱に携へ行き又一の幕營を建て同日陸揚げせし食糧及貯藏品を之に入れたり而して病者のために端艇を派遣して魚を搜索せしめしが終に一尾をも得ずして歸り來れり然るにチュピアは己れ自ら釣魚に從事して專ら其魚を食せしかば甚だ速に其健康を回復せり

ペンクス氏は内地の探行に於て數個の小舍の架搭を認め又公氏は一高丘に登りて土地の磽确不毛に屬することを認め且つ河に接したる低地にアングロープ（樹名）の莖延して高潮毎に鹹水の其中に溢るゝを目擊せり

十九日火曜を以て鍛冶場を建て軍器匠は修繕のため必要なる鐵具を準備せり二十二日漏口を塞ぐため本艦を更に港の上に挽き上げしに翌早朝に於て潮本艦より退きしかば乃ち其漏口を檢せしに撥礁船の外被板四板を切拔きて肋材に入り更に他の三板を損壞せり且つ其破口や全躰に鋭利の刀具を以て穿ち去りたるが如く頗る滑かにして又其破口の周圍に於ても一の截片だに之を視ざりしが實に本艦は不思議なる天助に依て保存せられしなり即ち其一破口の如きは實に大なる者にして斷えず八基の喞筒を使用して息ま

ざるも尚ほ十分に本艦を沈沒せしむるに足る者なりしに巖礁の碎片其破口に留りて其一部分を塞ぎ又塡茄獸毛等肋材の間に入りて鏃片の及ばざる漏口部を塞げり嗚呼是れ天助にあらずして何ぞや又此漏口の他艦底の諸部に大なる損傷をなせり

鍛工の釘及螺釘の製作に從事するの際船匠師は本艦の作事に若手し又艦員中數名は鳩を射て病者に與へんため河の後方に送遣せられたり一行は一の清水流を發見し又數多の土人の家屋を認め且つ甚だ敏速にして大さ幾ど獵犬に均しき鼠色の一動物を見たり二十三日一端艇は大網を拽く爲めに送遣せられしが魚類の多く港の周邊に躍るを見しに拘らす正午に唯三尾を拽へて歸り來れり此日艦員等多く前記の動物を見しが後に至りて其者の鴟鴞の大さに均しき大蝙蝠なることを發見せり

本艦右舷側の修理既に竣功せしかば船匠師は其左舷船首下の作事に若手し且つ船尾を檢せしに此方面に於ては損害を受けしと甚だ少きを視たりペンクス氏は其蒐集せる植物の全躰を麵包室に移せしに此日其室は水線下になりしかば中には全く枯れんとせしものもありしが至大の配慮に依り多くは再ひ生存の有樣に回復せり二十五日一植物を此に發見せしが其葉の美なることは幾ど菠薐菜(ほうれんそう)の如く見えたり又深紫色にして大さゴールデンビピン林檎の一種のに均しき一果實を發見せしが二三日保存せる後宛も小梅の如き味をなせり

二十六日火曜に當り船匠師は本艦に船茄を打つことに執掌し船員は他の必要なる事に從へり

二十七日兵器工は引續き鍛冶場に於て工作に從事し船匠師は本艦の作事に執掌せしが公氏は其間に數回大網を曳きて大に漁獲する所あらんとせしも唯二三十尾の魚を獲しに過ぎざりければ則ち之を病者及病後者の中に配與せり此に一行は攀上るために截痕を附したる一樹及白蟻の巣にして高さ二三吋乃至五吋のもの又人間及三四の動物の蹤跡を認めたり

副艦士候補生の一名は一の狼を視しに全く亞米利加の狼と同種類なりしと云へり

六月二十九日及其翌日に於て曳網を試みしに極めて好結果を得各人に二听半宛を分與し又た青菜を多量に摘み取り之を豆と共に煑しに極めて勝れたる食品を得たり一同に此日の食物は言ふべからざるの佳味となれり

七月一日各會食班より一名を除き艦員一同海濱に行くべき許可を得又其除かれて殘りし各員は再ひ曳網のために送遣せられしに前日の如く大魚を得たり

三日航海師は既にピンチース艇を以て送遣せらるゝの後歸りて海に出すべき一通路を發見せることを報ぜり而して其通路は石花礁より成れる暗礁の間に在て低潮の時には其石花礁多く水面に露出せりと云へり又航海師は數個の帆立貝を發見せしに大さ極めて大にして其一個は以て二人の食とするに尚ほ餘りあり其他尚ほ貝類を澤山に發見し之を本艦に拽へ歸れり此日一行は本艦を水中に泛へんと試み幸に高潮を得て之を成功せしが本艦の其位置を去るや直ちに其一被板の反起せるを發見せしかば再ひ海濱に引き上

ぐるの已むを得ざるに至れり

五日再ひ本艦を水中に泛へ貯藏品を艦中に入るゝ爲め之を海濱に接して雙錨繫きにせり此日一行は該港灣を横過して對岸に渡り其沙濱に於て未だ嘗て發見せざりし大數の果實を發見したりしが其中一個の椰子は壁の開割したるものなりとチュピアは云へり然れども一行に於ては之を和蘭人の所謂ベウルス、クラブと稱する所のものならんと判斷せり

バンクス氏は六日を以て一隊の人を率ゐ河に溯り八日を以て歸りしが其通路は狹隘なる水道にして嶮崖絶壁兩岸に連なり殿際の樹木最も美觀を呈し中に幾那樹あるを發見せり又兩岸内部の土地は平低にして一面に草を以て蓋ひたれば之を耕して利益あるべしと思はれたり又獸類を狩るに際し四頭の動物を認めバンクス氏の獵犬其二頭を追ひしが其地たる長草深く茂りて獵犬の疾走に不便なるに拘らず二獸は之を飛超へて疾走し遂に獵犬に先んぢたり而して其二獸は疾走するに四脚を以てせず二脚を以て飛ひ進めり斯くて端艇に歸るに迨ひ再ひ河を溯り兩岸終に縮蹙して淡水の小河となるに至て止みしが其小河には潮水著しく漲れり此夜此に停泊するの準備をなすの際若干の距離を隔てゝ烟の起るを認めしかば一行中の三名其場所に近寄りしに土人等既に去て在さりし然れども高潮痕を印せる岸下の沙上に足跡あるを認め且つ尚ほ古木の窪みに火の燃へ居るを見たり又是より少許の距離に數個の小舍ありて地上に堀り窪めたる竈及時間を經ざる食物の殘餘を認めたり一行は此夜車前葉の上に臥し一把の草を枕として眠に就きしが翌朝の潮汐其歸路に便を與へしに依り時を費さずして本艦に

歸れり航海師は既に七「リーグ」の海上に在りしもバンクス氏の歸りし後ち幾ばくもなく又其釣蒿を携へて出て行きたり而して遂に三個の籠を携へて歸りしが其三個は之を合して其量目凡そ八百听に達したり此朝四名の土人一の小蕃舟に乘りて眼界内に來りしが公氏は是等人民の方より認められるゝを好ましきことゝ爲し自ら之を認め出さゞることに決せり然るに此決定せる所能く其目的を達し二名の土人本艦より小銃彈の達し得べき程内に來れり而して或る距離を隔てゝ若干の對話を爲すの後ち槍を提げながら漸く近つき來りしが別に脅嚇の狀もなく唯自ら防衛するの術あるを示さんとせる者の如く思はれたり既にして幾ど艦側に接近したりしに依り公氏は彼等に織布、釘、紙等を投げ與へしに是には一も意を向けざるものゝ如くなりし斯くて終に艦中の一水夫之に小魚を投せしかば大に之を悅び更に仲間を携へ來らんとするの意を形容を以て示し直に海濱に向て漕去れり此間にチュピア及數名の艦員は對岸に上陸せしに土人等幾もなく本艦の傍側に來り種々の贈物を受くるの後チュピア及數名の水夫の行きし海濱に上陸し各〻二本の槍と一本の杖とを持ちしが忽ち之をチュピアの一行に擲てりチュピアは英人の方に進みながら土人等に其兵器を收め已れの側に坐すべきことを勸誘せしに一同直ちに之に從へり斯くて是時他の艦員の海濱に進む者ありしが土人等は此艦員の已れと兵器との間に入らんことを恐れ此に猜忌心を懷く樣子なりしかば艦員等は則ち彼等に向ひ一も斯の如き事を爲さゞるべし安心すべしと諭告して更に瑣細の贈物を之に與へ此に午餐時に至るまで留りたり而して此時彼等に向ひ形容を以て本艦に來り會食せんことを勸誘せ

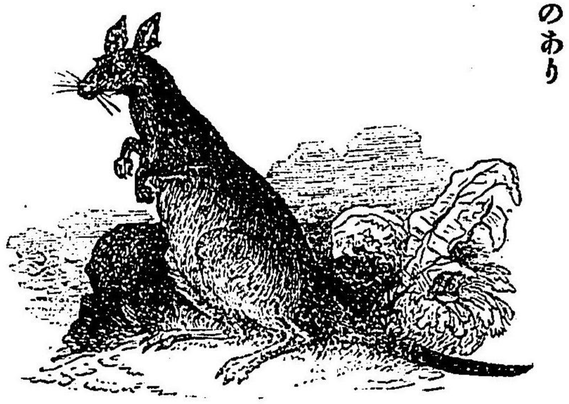
しが何思ひけん彼等は皆之を辭し蕃舟に乘りて退きたり

是等の土人は身長尋常なれとも四肢甚た小なり其面は深きチョコレート色を帶ひ髮は黑くして或は長く伸るあり或は短く捲き縮みたるありと雖も一も絨毛の類にあらず其身躰は數部を赤く塗り齒は白くして並び善く眼は明かにして凉しく其容貌頗る愛すべし又其音聲は好調にして種々の英語を復言すること極めて容易なり

翌朝是等土人中の三名再ひ來訪し更に一名を伴ひしが其徒之を呼てヤパッコと稱せり多少身分ある者の如く見えたりしが長さ凡そ六吋の鳥骨を鼻の軟骨に挿みいたり總して此地の住民は斯の如き粧飾を爲すために皆鼻に孔を穿てり此等の人民は總して皆全くの裸躰なるを以て公氏は其一人に古き肌衣を與へしに之を以て其身躰は何部をも蔽はず頭巾の如く其頭を包めり又此徒は一尾の魚を本艦に携へ來りしが是れ前日與へし魚に對する報酬の意ならんと察せられたり斯くて暫時の間甚だ滿足したる氣色を以て留まるの後我か數士の其乘り來れる蕃舟を檢し居るを視て俄かに猜忌心や發しけん直ちに之に飛ひ乘りて本艦を去れり

七月十二日三名の土人チュピアの幕營を訪問し暫時留まるの後他の二名を迎へんが爲めに出て行き其名を通して紹介せり其徒魚を饗せられしに僅に之を食するの後其殘餘をパンクス氏の犬に投せり其二名の客は骨を鼻に挿し又一片の木皮を額上に結び附けいたるのみならず其一名は臂の周圍に紐飾を着け又貝

殼を以て作りたる美麗の頸飾を着けいたり其乘り來れる蕃舟は長さ凡そ十呎にして舟中四名を容るゝに足り淺水中に在ては棹を以て之を動かせり其槍は唯一の尖頭を有し中には魚骨を以て倒鉤を附したるものあり



カンガルー

十四日ゴール氏は前既に記載せる彼の鼠色の一動物を射擊せしに偶ゝ幼稚の者なりければ重さ三十八「ポンド」餘に過ぎざりしが十分に成長するときは羊に等しき大さの者と爲るなり此動物は長尾驢(カンガルー)と稱し其皮には一面に短き柔毛を生して濃鼠色を帶び頭と耳とは稍兎に似たる者なり其肉を調理して午餐に供せしに甚だ好味なる食品となれり又當時本艦の諸員は凡そ毎日鹽を食せざる日なかりしが其天然の脂肪未だ耗せず液汁未だ變ぜざるの前に於て屠殺せしが爲め英國に於て食する者よりは甚だ美味を覺えたり

十七日パンクス氏及ソランダー博士は公氏と共に森林に行き四名の土人の一蕃舟に乘れるを視しが彼等は直に海濱に上り毫も恐れたる形狀なく逍遙し來り若干の飾玉を受くるの後ち形容を以て追尾せらるゝことを嫌ふの情を示して去れり土人等今や艦員と懇親なるに至りしより其一名に戲れに槍を擲ち試みんとを懇望せしに彼れ乃ち之を爲せしが其力の强きことと熟練なること

とには大に驚きたり即ち其槍は地上僅に四呎餘の高さを以て走りしも五十「ヤード」を隔ちたる樹木に深く突き入れり是に於て其土人等艦中に來り饗應を受けて甚だ滿足せる者の如くなりしが男女共全く裸躰なりき

十九日十名の土人來訪し艦中に在る所の一の鑑を得んと心に決する者の如く即ち再三形容を以て之を乞ひしを飽迄拒絶せしかば彼れ極度の憤怒を顯はし就中一名はバンクス氏より特に拒絶せらるゝに臨み足踏みしながら最も暴激に同氏を突きて去れり而して其徒終に二個の鑑に手を掛け蕃舟を繫げる艦側に之を持ち行きしが水夫等直ちに之を取上げたり斯くて其後同樣の擧動を再三試みしも遂に其意を遂けざりしかば急に蕃舟に飛乘りて本艦を漕ぎ去れり此時公氏はバンクス氏及五六名の水夫を率ゐて既に艦員の多く作業に從事せる所の海濱に上りしが之に尋て彼の土人等亦此に到着せり而して其到着するや否や其中の一人瀝青鑵の下より火把を奪ふて海濱に走り品物の堆積せる風上より其火を乾草に移せしかば何かは以てたまるべき其燒炎忽ちにして擴がり一頭の豕を燻殺して鍛冶場の一部に燒け來りあはや將にバンクス氏の天幕をも燒んとせしが恰も好し此切迫の危機に當り本艦より來りし數名の人員之を火線外に撤去せしかば僅かに之を免かれたり斯くて此間土人等は百方說諭を加へられ且つ脅嚇せられたるにも拘らず漁網を擴げ且つ麻布を乾したる場所に進みて再び草に火を放ちしより今は容赦もなし難く乃ち小丸を裝したる小銃を發射して其一名に傷を負せしが是に至て彼等終に走りて皆逃れ去れり而して此時第二の

火は直ちに消止めしも最初の火は遠く森林に燃え行けり

此間土人等尙ほ依然連續して眼界內に在りしかば之に向ひ實彈を裝したる小銃一發を發射せしに彼等其響を聞くや皆遠く逃げ去れり然れども其聲の尙ほ森林中に聞えしかば公氏は數名の人員を率ゐて之に會せん爲めに進み雙方相見ゆる處に至て彼我互に止りしに此時一老人あり他の土人より數歩前に進み出でゝ直ちに止まり英人の解し得ざる數語を陳べて其伴侶の許に退しが是れより彼等は一同隊を爲して徐々と引退けり此時艦員は彼等の短槍數本を拾ひ取り凡そ一哩を進むの間之に追尾して一の巖石上に坐せしが土人等も亦凡そ一百「ヤード」を隔てたる處に坐せり而して彼の老人再び尖らさる槍を其手にして前進し或は遠く距れ或は近く距れ數回止りて對話を試みかけしかば公氏は則ち之に應じ形容を以て專ら懇親の意を表せしに彼も亦之に應じ老人は顧みて其黨と相語れり斯くて一同槍を一樹の下に置き懇親を表して前進し來りしかば則ち前に拾取りし短槍を彼れに返還して調和全く整ひたり是に於て土人等頊末なる物品若干を受けて平和に海岸の方に緩歩し形容を以て再び草に火を放たざるべきことを示し本艦に相對する處に至りて一同に坐せしが船中に來らんとを勸めしも之には應ぜざりき仍て之に數個の銃彈を與へ公氏自ら其効用の說明を務めたり既にして一行は其本艦に歸るに迨ひ二里の距離に於て尙ほ森林の燃ゆるを見受けたり

二十日金曜に當り本艦航海の準備已に成れるを以て航海師は通路探測の爲め北方に派遣せられしが一も

之を發見し得ざりき此間公氏は水深を錘測し欄口(ベア)堆に浮標を置けり二十二日一鼈を殺せしに其肩に打込みたる漁叉を認めたり其長さ凡そ十五吋にして其端に倒鉤あり太さ凡そ人指に均しく常に其土人中に見し者に似たり今其疵傷の全癒せしを以て考ふれば此漁叉は久しき以前に打込し者の如く思はれたり二十四日水夫中の一名我か一行に離れ四名の土人の午餐するに會せり初めは甚た之を恐れしが故らに意を用ひて平氣を粧ひ彼等の傍側に座して小刀を與へしに彼等之を檢するの後再び返還せしにより乃ち彼等に別を告げしに彼等は尚ほ留めんと欲する者の如く即ち其手と面とに觸て自分等と均しく肉と血とを以て成れるとを心識するに迨び始めて之を諾せり彼等此水夫を遇するに至大の禮節を以てせしが留むることは凡そ半時間の後本艦に最も近き路を指示せり

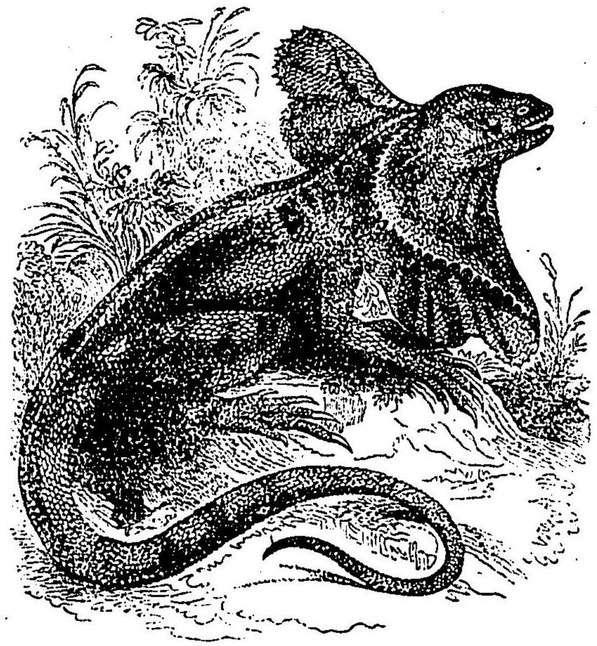
八月四日土曜本艦は朝七時を以て錨を揚け海に出るの後ち船首にピンテース艇を發して水深を錘測せしめながら東微北に進み凡そ正午に至て投錨したるが公氏は此時眼界内に在る極北の地角に命ずるにペットフォード岬の名を以てし其出發せし港に命ずるにエンデーヴォーア河の稱を以てせり是れ其甚小なる欄堆港即ち狹澳(ベアーボーア)にして迂廻したる水道の内地三四「リーグ」に走れる者に過ぎざればなり此港に於て得し食糧は鼈(クリーキ)、數種の牡蠣、鞋底魚(ひらめ)、鯆魚(はりえび)、及鱝魚(えび)、土圍兒(にとい)、カッペーチ、パルム(蕪菁ノ一種)にして又獸類は野牛、狼、臭猫、及數種の蛇にして蛇の中には甚だ有毒の者あり家畜は唯犬のみにして飛禽は鵞、烏、鷹、鶏鵡、コカッー、(鸚鵡ノ一種)鳩其他數種の小鳥とし水鳥は野生鵞、クルリュウ、(鶴ノ一種)ウイルドダック(野鴨)其他數種とす丘地は磽确に屬すと雖も尚

ほ樹木の外に雜草を生じ溪谷の地は一般に植物を以て蔽ひ頗る豐饒の觀を呈せり樹木は數種あり就中護謨樹を以て通常の者とす河の西側にはマングローブ繁茂し就中或る部分に於ては海岸より内部一哩に蔓延せり土地水利善く又到る處に蟻蝼多し

同日公氏は檣頭に上りて或る危險なる暗礁を通觀せしに其數座を水上に認めしにより其後六日間本艦は淺灘及破浪岩の取圍める間に進行を試み十日に至りて前日に發見したる所の海角及三島の間に出でたるが一行は此時既に危險の外に脱出したるの望を懷きしに其望全く空虛に歸せしかば此海角を名けて諂媚岬と稱せり此時更に或る陸地を發見し公氏は之を一群島なりと思惟せしに拘らず他員は皆之を以て本陸と爲せり乃ち斯く意見の支牾せるより竟に本艦を其地に投錨すべきに決して投錨したるが公氏は則ち投錨するや直ちに上陸して高角に上り是より海岸を觀察して己れの推測の全く誤らざることを確認せり公氏は又其立ちし高角に於て美細なる白砂中に人の足跡あるを認めたるが其地を名けて觀望角と稱せり此角の北側は海岸一帶に淺くして平坦なるが如く見えたり

十一日土曜に當り早朝公氏及ペンクス氏は三島中の最も大なる者を巡覽せんが爲めに行き最高丘の頂に上りて四周を瞰下せしに一礁脈ありて波濤大に之に激破せしも霧深く鎖して十分に觀察するを得ざりき斯くて此日は一同矮叢の下に宿して一夜を過し翌朝撤礁の間に水道の觀を呈する者を認めしかば副艦士をピンチース艇に乘せて派遣せしに正午に至り十五乃至二十八尋の水深を探測して歸れり然れども風甚

だ強かりしが爲め其水道の一に入ること難く終に之を試みざりしが其水道は甚た狹隘に見えたりと云へり此探討に鞅掌するの間、バンクス氏は其好む所の業に意を用ひ前嘗て發見せざりし所の植物多種を蒐集せり此島は十二「リーグ」の距離に於て之を視るを得べくして一般に不毛の地なるが周圍凡そ八「リーグ」なるを發見せり其北西側に數個の沙灣と低地とありしが本島に於て視し者と同種の長草、樹木之を蔽り又甚だ大なる蜥蜴を多く視しが一行は其數尾を捕へたり又此に淡水を二ヶ所に發見せしが其一は海に近く流れて稍ゝ黑色を帶び他の一は溜池にして其の水十分の甘味を含めり一行は此に小舍の舍址あるを認め其本島を距ること遠きに關せず時として土人の之に來れる大膽に驚きたり其本艦に歸るに迨ひ公氏は此地を名けて蜥蜴島と稱せり蓋し此島に於ては蜥蜴の外他に一の動物を視ざりしを以てなり其歸途に當り一行は低き沙島に上陸し此に數種の鳥を認め且つ幼鷲の巢を取れり仍て此地を名けて鷲島と稱せり一行



ニユホルランドノ蜥蜴

は又此に甚だ巨大なる他鳥の巢を認めしが其巢は地上に枝條を以て之を作り周圍六十呎高さ八呎八吋を下らざりき此地にも亦土人の來りし跡あるを認めたり又此日此一行の本艦を去りて不在中航海師は數個の低島に上陸して此に海龜の甲の大に累積せるを視たり而して又土人が樹木に懸け置きたる魚翅を認めしが曾甚だ新鮮なりしかば艇員等調理して之を食せり

十二日日曜に當り士官等異口同音を以て直ちに海岸を去るを得策と爲すの意見を唱へ其翌日を以て本艦此を出帆せしが其礁脈内に於る一の水道を通過するや茲に始めて開闊なる海に再び出づるの幸福を得たり嗟呼是より先き三ヶ月間は實に淺灘と巖石との圍繞せる危險の中に在りしなり是に至て一行は公氏が言へる如く進航中は嘗て瞬時も投鉛手を其座より離れしむることなく既に一千餘里を進航したるが其礁脈を過ぎて大海に通ずべき航門は南緯十四度三十二分にして中に三高島あるを以て常に容易く之を識別し得たり公氏は之に名けて指標島と稱せしが是初めて此に來る者と雖も此三島の指示に依り礁脈を經過して本島に通ずる無難の水道を發見し得べければなり

十五日本艦は此地とニウ、ギチヤとの間に通路あるも之を經過することを欲せざりければ陸地の見ゆる處に達せんが爲め西方航路に進行せしが午後に於て早くも丘陵多くして數島の如き觀ある陸地を認め且つ其陸地と本艦との間に數個の破浪岩ありて其中に一開口あるを認めしかば則ち之を脱するが爲め全帆を揚げて夜半に至るまで北方に駛せ然後ち偏南に轉じて凡そ二里を進みしが此時風落ちて全く無風とな

れり斯くて日出に迨び本艦より一里以内に恐るべき碎浪の甚だ高く激醒するを視しが本艦は忽ちにして轉浪の爲め其方に打流されたり仍て急に端艇を艦首に送りて本艦を曳かしめ以て艦首を回轉せしめんと勉めしが其事未だ成らざるに本艦は早や碎浪の激破せる巖石に接近し僅五十間の以内に打寄せられたり是に於て一同は今にも破壞せしめらるゝこと歟と瞬時も安き心はなかりしが偶〻辨じ難き程の微風の吹き來るありて端艇の力を助けしかば遂に本艦をして僅に巖邊を脱せしめたり而して此天幸に由て生じたる望は二三分時の後又無風と爲りしが爲め忽ち之を失ひたるも本艦未だ其得たる地歩を失はざるの前に於て軟風再び吹き起りて之を助け同時に又其礁脈中に一の小口あるを認めしにより若年の士官を遣りて之を檢測せしめしに其幅本艦の長さを超えざるも其他側に平滑なる水面を發見せしかば乃ち之に通過を試みしも竟に之を遂げ得ざりき其故如何と云ふに此時既に高潮落はじめて其落潮流極めて急激に其小口より突進せし爲め本艦其巖礁より四分の一里の處に流され且つ端艇に助けられて其距離忽ち二里許に增したればなり既にして落潮の時期を過ぎ本艦再び張潮の爲めに押流されしかば乃ち礁脈に接近して破壞の恐れを再生せしが時に他の一口を發見し且つ偶〻輕風の吹き起りしが爲め之に押されて其口を通過したり蓋し此時本艦は其通過極めて迅速なりしが爲め幸ひにして其水道の兩側に觸るゝこともなく出るを得たるなり是に於て本艦は直ちに投錨したるが艦員等茲に始めて安心なる一地位を得たるを以て甚だ滿足の思を爲せり乃ち其危險を避けたること斯の如き情況なりしを以て此水道には天運水道の名を命じた

るが同時に又眼界内に在る本陸の高角にウェーマッス岬之に接近せる灣にウェーマッス灣の名を下せり此日數隻の端艇は捕魚の爲めに出行きしが其効空しからずして夥多の帆立貝を漁獲せり而して其中には之を動すに二人を要するが如き大さの者ありたりパンクス氏は又稀有なる貝類及數種の石花を搜索して好結果を得たり

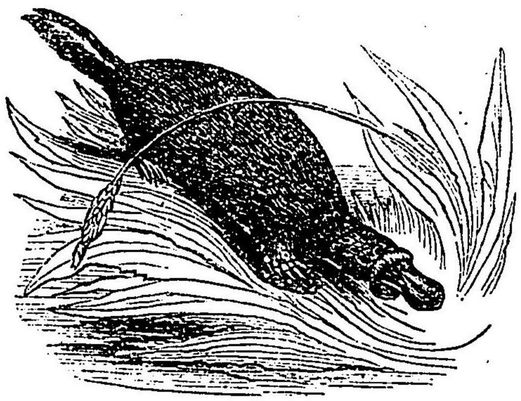
十八日數個の小島を發見して之をフォアベス諸島と名け又本陸に高角を認めて之をポールド、ヘッドと名づけたり十九日他に數個の小島を發見せしに土地低く沙多くして不毛なりき又一地角を認め之をグレンヴィル岬と名け又一灣を認めて之にラムプル灣の名を下せり午後に至り又他の多島を認めしに數多の鳥群之に往來せしを以て之を鳥島と名けたり二十日に又小なる多島を認めたるが其一島に二三の樹木と土人の小舍數個を認めたり二十一日本艦一水道を過ぎて駛行せしに數多の淺灘に遭へり而して其水道の一側岸を爲せる本陸の地角に命ずるにヨーク岬の名を以てせり又此岬の南側に一大灣あり之を名づけてニウカッスル灣と稱せしが灣内に數個の小島あり又此岬の北側は其土地山岳多しと雖ども低き部分には樹木鬱蒼として繁れり此日朝發見せし所の島嶼をヨーク島と名づけ其後或る數島の間に投錨して水道の更に擴りしを發見し又二個の相隔ちたる地角を認めしが其間には一の陸地あるを視ざりき仍て各人の胸裏には遂に印度海に達すべき一通路を檢出するの望を起せり然れども公氏は尚ほ此事をして愈々確實ならしめん爲めソランダー、パンクスの二氏と共に一隊を率ゐて一島に上陸せんとしけるが此に一群の土

人を視たり而して其中三名の土人は海濱に立ちて端艇の上陸を拒まんとする者の如く見えしが一行の未だ海濱に達せざる前に於て既に退けり是に於て公氏の一行は一丘に上り是より凡そ四十里の間を一望中に入れしが此一望の中には一も其通路を拒まんとするが如き一物を認めざりき斯くて一行の同島を發する前公氏は英國の旗章を掲げジョージ王の名を以て南緯三十八度より現在の處に至るまで同地の全東岸を所領に歸し名けてニウサウス、ウェールスと稱せり是に於て三回小銃の一齊打ち方を爲し本艦よりも同數を以て之に答へ同地に占領島の名を下せり既にして本艦錨を揚げて航行に就き該通路の北西側に於ける最大島の極端に命ずるにコルンウェル岬(ポッセシロン、アイランド)の名を以てし該水道の中央に接近したる數個の低島に命するにウォーリス諸嶼の名を以てせしが其後間なくして本艦は投錨地に達せしにより其長艇を錘測の爲めに派遣したり斯くて夕刻に至り一行は再ひ端艇にて本艦を離れ公氏はペンクス氏と共に一の小島に上陸せしに小鳥夥しく此に來往し就中信天翁(あはうどり)其多數を占めたりしが之に信天翁島名を命したり既にして本艦は是より新和蘭(ニウホルランド)の北端に進みしが遂に西方に大海を視るの滿足を得たり蓋し此新和蘭とプリンス、オフ、ウェルース諸島の名を得たる數島とは相望んで通路の北東口を爲せる者なるが公氏は此通路を以てニウ、ギチヤに達すべきものと想像せり且つ此通路にはエンデーヴォーア海峽の名を與へたり

ニウサウスウェールスの村落は孰れを視るも十四五名の寓居に供すべき小舍より大なるものなし但し此十四五名とは婦人を除き一ヶ所に集まれる一團の人數を指せしなり男子は躰格健全にして身の丈中等に

位し其性質甚だ活潑なり然れども其音聲頗る柔和にして甚しきは婦人に類する者あり其膚色はチヨコレート色なるも總身垢に汚れ爲めに幾ど黑奴の如き色を呈せり其髮は天然に長くして黑しと雖とも一般に之を短く截り時には少しく捲縮せるものあるも常に垢に染めり其髭は一般に甚だ濃きも燒きて之を短くせり婦人は男子等の河を渡るに當り常に之を其背後に置きしを以て唯隔ちたる處より之を視しのみ是等人民の重なる粧飾品は骨にして之を鼻に挿せり水夫等は之に異稱を附して斜檣帆架(スプリット、セールヤード)と謂へり此他又貝殼を以て作れる頸飾を着け又小紐を臂節と肩との間に二三回捲き附け又髮を以て編みたる紐を胸の周邊に繞ひ又其數名は貝殼の飾を胸に横たへて掛けたり是等の粧飾の外土人は又其身躰を赤色と白色とを以て大小種々の線に塗り兩眼の周圍に白色の環狀を畫き面に白色の斑點を附せり而して其耳には孔を穿てるも一の耳環だに着けざりき是等の土人は與ふる者は受くるも相當の報酬を爲すとを知らざる者の如く就中交換品に對し其飾物を手離すとを好まざりき又其身躰を標するに瘢を以て之を標せり是れ其徒の形容を以て示せる所に據れば全く死者の紀念の爲めにする者と思はれたり其小舍は小枝を以て之を作り其方法、枝の兩端を地上に樹て以て籠の形を爲すが如くし之を木皮及棕櫚の葉を以て蔽ひ其高さは唯正坐するに足るだけになし其戸口は火焚所に相對せり又寢に就くには常に踵を頭の方に轉じて眠ると雖も蓋し其一舍中僅に四名容るゝに足るべし北部の地方に於ては天氣更に温暖なるを以て家屋の下風の方は之を開放して鎖さず總て是等の小舍は唯一時の爲めに之を建つるを以て其徒此國の他部に移轉する時は其儘

にして之を放置せり其小舍には水を濾過すべき爲め一種水桶の如き物を備へしが之を視るに楕圓形に木皮を曲げ樹木の小篠を以て其各端を結附け以て之を造れり凡そ家具と稱すべき者は唯此一器のみにして其他には更に一物も有するなし此等の土人は常に其背に大さ及形狀共に纏網に類したる一種の袋を掛け之に釣針及釣線幷に其釣針を製する貝殼を入れ以て之を荷へり又其粧飾物は數個の短槍の尖と二三斤の顔料より成りて是れ其豐富を示す所の諸物とす其徒は常に長尾驢及數種の鳥又八ッ頭芋及數種の果實を食すると雖も就中首たる食料は魚類に在り又往々木葉を喫する者をも視受けたり此に甚だ奇異なるは其徒の火を發し焰を擴むるの方法なり即ち之を爲すには先づ枝の一端を削りて鈍尖と爲し此尖端を乾きたる木片の上に置き其枝を垂直に立てゝ兩手の間に挾み極めて迅速に前後に擦動し以て忽ち火を發せしむるなり而して其發火を增すにも其迅速なること決して之に劣らず又土人中の一人に海岸を走りながら火を諸處に配置する者を認めたり即ち其方法を視るに左の如し彼先づ其歩を發する前少さき火花を乾草中に包み之を携へ疾走するなり斯くする時は則ち運



鴨嘴獸*

*特に濠洲にのみ産する奇獸にして其貌其形に於て個個獸の如く四足獸の如く又鳥の如し一千七百九十七年に初めて發見せらる

動の迅速なる爲め風之を煽りて忽ち火焰を發す是に於て之を地上に置き更に又火花を取りて之を他の乾草に包み再び之を携へ走ること前の如くし其發火數を好む所に增加せり蓋し是等の火は長尾驢を捕へんが爲めにせる者と想像せられたり何となれば此動物は其性常に甚だ火を怕れ犬に追はるゝに當ても新たに草を燒ける場處は火既に消滅したる處と雖も尙ほ臆して之を通過するを欲せざればなり

ニウサウスウェールスの土人は槍若くは投槍を使用せるも其製作甚だ異れり同國南部の地方に於て視し處の者には四叉あり即ち骨を尖らして鋒尖となし且つ之に逆鉤を附し一種蠟の如き者を用ひ其尖を摩擦して滑かになし以て其衝擊する所の者に入り易きが如くせり又北部に於る投槍は唯一鋒尖を有し其柄は長さ八呎乃至十四呎にして燈心草に異らざる植物の莖を以て之を製し數個の接合ありて互に之を嵌め合せり是等投槍の尖は時としては魚骨を以て製し又時としては重き堅木を以て製し之に木片若くは石片を以て逆鉤を附し其身躰に深く入るに當り恐ろしく肉を裂くか又其木片若くは石片を躰中に遺すに非ざれば引拔くと能はざるが如くせり土人等投槍を以て遠方の距離に於ける敵を傷けんと欲する時は擲射桿(スロードサンスタック)を以て之を發射し又其覘ふ所の目的近きに在るときは唯手を以て之を擲射す此擲射桿は面滑らかに質堅硬なる一片の紅木にして厚さ半吋幅二吋長さ凡そ三呎許り其一端に長さ四吋に近き横木を附し他の一端に小節を附せり而して又投槍の柄にも其鋒尖に接近せる處には一小凹を設けて之に小鉦を纏着し强く前進せしむるときには容易に之を脫すべきが如くす即ち之を發射するには擲射桿に投槍を載せて之を肩上

に保ち前後に動搖せしめながら極度の力を入れて其投槍と擲射桿とを共に前方に投ずれば横木肩を打ちて其急突克く擲射桿を停め投槍獨り驚くべき速度を以て前飛す其照準を取ると極めて正しく五十「ヤード」の距離に於る標的の如きは之を射擊すると彈丸よりも確實なり

是等の人民は樹皮を以て製したる楯を用ふるが其幅凡そ十八吋にして長さ三呎あり而して往々皮を剝ぎ去りたる樹木又楯を截り出したるのみにて別に取去らざるものゝ樹木の根元に數多あるを認めたり此國北部に於ては一樹木の幹を刳り凹めて小舟を造りしが土人等之を爲すに適當の器具を有すべしとも思はれざりし由て按ずるに是れ必ず火を以て之を爲せし者ならんと推測せられたり是等の蕃舟は長さ凡そ十四呎にして其幅の狹き往々顚覆せんとするの度に達せるも外裝材のあるが爲めに僅に之を防けり之を漕くには兩手にて橈を把りて漕げり南部に於ける蕃舟は長さ四「ヤード」の樹皮を以て之を製し其兩端を互に結び附け兩舷の間に一の木材を横へ以て之を張開せり是等の蕃舟は僅々四名を容るゝに足るが如く之を製作せり深水中に在ては長さ凡そ一呎半の橈を兩手に携へて之を漕ぐと雖も淺水中に在ては長棹を以て之を推し進めり其所有の工具は唯木槌と一種劈(くさび)の如きものと石を以て作りたる手斧と數片の石花及貝殼とのみ其中石花と貝殼とは恐らく物を截る爲めに使用するものなるべし又彼等が投槍の鋒尖及擲射桿を磨くには野生の無花果に類する一樹木の葉を以て之を磨けり銳利なること幾ど鑢擦(わさびおろし)に均しき者なり

一千七百七十年八月二十四日金曜に當り本艦は帆を揚げて北西に向ひしが一二時間にして先導の端艇より淺灘の信號を爲せり因て本艦は諸帆を揚げたる儘直ちに漂泊法(ブランケッティング)を行ひ其周圍を錘測せしに幾ど淺灘を以て圍繞せられ若し各側何れへか半鏈を偏よりたらんには必ず坐礁の難を免れざりしことを發見せり斯くて同日午後落潮に乘じて駛行し日沒前を以て漸く此危險を脫せり

二十七日引續きて進航し夜に入り帆を縮め翌日の黎明に至るまで開きを以て走りしが其後はニウ、ギヲヤを探知せん爲め正北に向て駛せたり此日檣樓より陸地を認めしを以て終夜蛇行せしが黎明に至りて强鹵を得しかば一直線に陸地に向進せり

三十日木曜に當り偏北の進路を保ちしが既に陸地の見ゆる處に到りしにより公氏は一端艇に乘じて上陸せんとに決し本艦は蛇行法を保ちしが九月三日に至り同氏はバンクス氏及ソランダー博士を伴ひピンチース艇に乘りて本艦を發せり一行總て十二名より成り十分の兵裝を爲して直ちに海濱に漕ぎ附けしが其二百「ヤード」以内に到るや水の極めて淺きことを發見せしかば已むを得ず其艇を二名の水夫に守らせ徒歩して上陸せり斯くて一行は高潮痕の存せる沙上に於て人の足跡を認め此に土人の住せることを明かにせしが既にして其艇を距ること四分の一里に進むに迫び三名の土人恐るべき叫聲を發して突然森林中より顯はれたり而して一行の方に走り來るに迫び其率先者手より何物をか投じ其傍側に飛んで火藥の如く燃えしが一も響きを發せざりき次で他の二名槍を投ぜしかば艦員等唯細彈を裝したる小銃を發せしに土人等又短槍を投ぜしを以て更に銃彈を裝し再び之を發射せしに土人等皆先きを爭ふて引退きたり蓋し此

時其中に必ず負傷せし者ありと察せられたり是に於て公氏は其艇の許に歸らんとせしに本艦より信號を以て土人等更に一隊を爲して襲ひ來るとを報ぜり乃ち幾ならずして數名の土人五百「ヤード」を隔ちたる一地角を回りて來たるを認めしが彼等は我一行を認むるに迨ひて俄に止りたり而して我一行の其艇の許に徒歩するに至るまで之を目送せり

是等の土人は酷だ新和蘭の人民に類似し身丈も幾ど之に同じく髮も亦短く捲き縮めり其投槍は管若くは蕃竹を以て之を製し其鋒尖は堅木を以て之を作り處々に逆鉤を附して甚だ輕く長さ凡そ四呎なり彼等が之を擲射する力量は實に驚くべき者にして當時英人六十「ヤード」の距離に在りしに其投槍は尚ほ之を打超えて飛行せり但し之を擲射する方法の如何は之を知るに由なかりき此日は九月三日月曜なりしが公氏は尚ほ時日を此地方の海岸に消費することに決し乃ち西方に向て進行せり

八日土曜に當り本艦は二個の小島を通過せしが翌日正午を過ぎ更に又陸地を認めてアルコヴ島か若くはダモル、ラウトならんと推測せり水曜に當り諸處に火及煙を認め此地に人の多く住することを察知せり海濱に接近せる地は松に似たる喬木を以て之を蔽ひ更に背後の方は椰子樹及マングローブを以て繁茂せり

十七日朝に當り本艦は既に艦中所有の海圖に示したる諸島を脱せしに尚ほ西南西に方て一島あるを認めしかば一同之に驚き新たに發見せる者と想像せり正午前に至り家屋、椰子樹の森林及羊の大群を觀たる

が是れ即ち新鮮なる食糧の欠乏に由り其健康の將に衰へんとしつゝある艦員に取ては實に喜ばしき觀望なりき艦士ゴール氏は直ちにピンチース艇に乘り上陸地搜討の爲めに派遣せられしが是等の購求を遂げん爲め土人の意に適せんとする物品を多く携へたりゴール氏の不在中艦中に在ては騎馬にて丘上に登らんとし時々本艦を觀んが爲めに止まれる二名を視たり既にしてゴール氏の歸り報ずる所を聞くに初め小澳に入りしに其近傍に少々の家ありて數人進み來り頻りに上陸を勸めしかば形容に依り互に爲し得べきを盡して對話したりと又是等の人民は身躰及び衣裳共にマレー人の如くにして小刀の外一も兵器を携へず各其小刀を腰に帶しおれりと陳ぜり

ゴール氏は本艦の投錨すべき塲處を發見するを得ざりしを以て更に貨幣と物品とを携へ病者の爲め即時必要なる物品を購求すべき爲めに派遣せられソランダー博士之を同伴せり其不在中本艦は海濱に近づきて蛇行しつゝありしが其端艇の出發せる後幾ならずして二名の騎者を本艦より認めしに其一名はレースを以て飾りたる帽を戴き歐洲形の上衣及胴衣を着せり此二騎者は海濱を乘廻り別に端艇には意を用ひざりしが本艦は極めて注視せり既にして端艇海濱に着するや否や直ちに他の數名の騎者及數多の徒歩者其塲處に馳せ集り若干の椰子を艇内に入れしを認めしかば貿易の土人との間に始まりしとを斷定せり時に端艇より信號を爲し若干の距離に在る一灣に本艦の投錨し得べき地あることを報せしを以て本艦は直ちに其方に向ふて進路を取れり而してゴール氏の歸るに迨ひ報道する所を聞くに椰子の所有主不在なりし

が爲め之を購求することを得ざりき今茲に携へ歸りし者は土人等が余に贈りし者なり即ち之が報酬には若干の麻布を與へたりと陳述せり蓋し其近傍に一港の在るとを知りしは土人の沙上に簡單なる地形を畫きて其内に該港及一市邑あるを示せるに由りて知りたるなるが同氏は又此に果實、家鷄及羊豕の澤山に得らるべきことを形容にて示されしと陳ぜり又同氏は此島の首たる住民を視しに黄金の鎖を頸の周圍に纏ひ精緻なる麻布を着し是等の土人に於て往々ポルチュギュイス葡萄牙人の義と謂へる語を吐きしより若干の葡萄牙人の必ず此島に在るとを推測せしか偶々船員中に一名の葡國人ありければ則ち島人に其國語を以て談話せしめしに彼の徒に在ては唯數語を知りたるのみにて全く其意義に通せざりしと言へり

既にして本艦該灣に入るに當り若干の距離に於て一市邑を認めしかば乃ち英國の國旗を前檣の梔頭に掲げて直ちに大砲三發を放ちしに該市邑に於て和蘭の國旗を掲げしが本艦は尚ほ其進路を保ち同夕七時を以て此に投錨せり公氏は和蘭國の此島に植民地を有するとを斷定し其知事若くは他の首たる駐在官に已等の何人たると及必要の食糧を得んが爲め此に入港せしとを知らしめんが爲め其翌日を以て艦士を派遣せしに其上陸するに迨び小銃を携へたる凡そ二十名の番兵之を迎へ少しも隊列を正さずして進行し前夕旗章を掲げし處の市邑に護送せり是に於て艦士は延きてラッヤー即ち島王に謁せしめられ葡萄牙人の通辨に由て其用事を島王に知らしめしに島王は之を聞き何時にても必要の食料は供給すべきも同盟を爲せる和蘭人の外は先づ其承諾を得たる上ならでは何國の人民とも貿易するを得ざるとを陳べ且つ和蘭の辨

理官に其趣を稟議すべきとを附言せり此辨理官と稱するは是等の土人中唯一の白人種にして名をランヲと稱し前に本艦より視たる歐洲服を裝したる人と同一人たるを知れり乃ち島王之に書翰を送りしに忽ち數時間にして市邑に歸り甚だ禮讓を以て艦士に接し且つ同島の住民に就きて所望の諸物品を購求して妨なきとを陳べたり島王の申稟は固とより其自由に出てたる者にして直ちに之を應諾せられしかば島王及ランヲ氏は本艦内に到らんとの冀望を示し且つ其無事歸港を保する爲め艦員中の二名を人質として陸上に差留め置かれたきことを請求せしに艦士は其二件の請求共に之を諾し恰も午餐を食するの前を以て彼等を艦中に伴ひ來れり是に於てソランダー博士及艦中に於ける他の一紳士は稍〻蘭語に通せしを以て乃ちランヲ氏と諸士官との間に通辨の勞を取り又水夫中葡萄牙語を話す者は島王の隨從者中之を解する者と對話せり此時午餐は重に羊肉より成りしが頗る島王の意に適し彼れ我が一行に向ひ英國の羊を所望せしを以て僅に殘したる唯一頭の羊を之に贈れり島王は此特別なる一事の聽容せられたるに勢を得て更に又英國の犬を請求せしかばパンクス氏は慇懃に其獵犬を與へしが尚ほランヲ氏は王に向ひ望遠鏡の如きは殊に其嘉納せらるべき者たらんと告げしより乃ち又之を島王に贈れり

是に於て其訪問者は我一行に向ひ本島は水牛、羊、豕及家鷄に富めることを陳べ翌日之を澤山に海濱に逐ひ下すべきことを告げしかば一同は極めて豪氣を發し爲めに酒の循環して醉を催すことインヲヤ人種暗に土人を指す撒遜人種暗に英人を指すの共に堪へ得さる程に速かなりしが其未た十分に酩酊せざる前訪問者は本艦を辭

し去らんと欲するの意を示せしに由り之に數多の贈物を拵へて歸らしめ其出發するに臨み九發の祝砲を放ちたり此時ペンクス氏及ソランダー博士は之と同行せしが其艦を離るゝに迫ひ三回の喝采を以て其禮を返へせり是等の諸紳士市邑に着するに迫ひ此に椰子酒を喫せしが是れ新鮮なる椰子樹の汁にして未だ醸さゝる者に係り其味甘くして別に不快ならず病者をして壞血症を回復せしむるには必ず補養となるべき望を懷かしめたり土人の家は草にて唯葺きたる家根を高さ凡そ四呎の柱を以て板を張りたる床上に支へたる物より成れり

十九日水曜の朝、公氏は數名の紳士に伴はれ島王の訪問に答ふべき爲め海濱に到りしが其主要の目的は前日海岸に逐ひ下さんと約したる家畜及家鶏を購入するに在りたり然るに到る處未だ彼の約を履行すべき手續の一も着手せられざりしにより大に不平を感ぜしが一行は先づ進んで會館に至れり此館は他の二三家と共に和蘭東印度會社の建たる者にして屋根の各端に一對の牛角に似たる木片を樹て他の家屋と之を區別せり一行は此會館に於てランヲ氏及島王の頭立たる人の多數に圍繞せられて座するを認め公氏は之に告ぐるに其必要の食料品と交換せんと欲する所の貨物を端艇に積み來れることを以てし之を陸揚すべき許可を得たり是に於て一行は現金を以て拂ふの意を以て豕、羊及水牛の買入を約せんことを勉めしが其事を暗に示せるや否やランヲ氏は公氏に向ひ余はチモルに於けるコンコルヂヤの知事より一書翰を領せしが其詳細は再び歸り開陳すべしとのことを陳べ直ちに暇を告げて立去れり既にして此朝時刻甚だ移

りしに艦中一も新鮮なる食糧あらざりしかば一行は島王に向ひ我々は一の小豕と若干の米を買ひ之を以て島民に命じ午餐を調理せしめんと欲するの旨を陳べ其許可を請ひしに島王は甚だ懇親を表し之に答ふるに貴客等の一行にして島民の調理せる食物を食せられんと幾ど其想像し得ざる所なるも若し之を食し得られんには何卒自ら之を饗應するの光榮を受けたしと陳じたり斯くて凡そ五時頃に迫ひて準備既に成り一行をして床の上に鋪きたる蓆上に坐せしむるの後三十六個の籠を以て之を饗せり然るに島王は其國の習慣を辯解して其蓆に列せざりしかば其餐を終るの後公氏は共に酒を飲まんことを勸めしも是亦客を饗應する者は決して客と共に飲むべからずとのことを陳べ固く之を辭せり然れども首相及ランヲ氏は其蓆に列なり一行は共に飽食せり殊に豕肉及米飯は勝れたる者にして肉湯も亦決して輕視すべからざる者たりしが木葉を以て作りたる匙子は極めて小形なりしかば之を絶えず用ひし者は少かりき此時漸く酒の循環せるに當り一行は今朝早く水牛及羊等の海岸に在るべき筈なりしに此事に就きては未だ一言をも聞かざりしかば此機に乘じて之を糺せしにランヲ氏は公氏に向ひコンコルヂヤの知事より船若し此島に來り食糧の欠乏を訴ふるときは宜しく之を供給すべしと雖とも其必要なるより長く留まることを許すべからず又下等の土人に多額の贈物を爲さしむべからず但し土人より受けたる瑣細の禮遇に報ゆるに飾玉若くは其他甚だ小價額の品物を以てするは可なりとの訓令を受けたる旨を告げたり然れども此陳述は全躰は蓋し虚僞にして我が土人に對する厚惠を此に禁止し以て彼れ蘭人獨り自己の懐中を肥すことを容易にせ

んと望みし者と思はれたり同夕一行は二三頭の羊を海岸に齎らせりとの告知を受けしが未だ公氏の之が爲めに拂ふべき貨幣を本艦より取り寄せざる前既に之を逐ひ去れり斯くて漸く若干の家鶏と棕櫚の液汁を以て製したる糖煉(シルップ)の多量とを買取りしが是れ糖蜜(モラッセス)若くは糖漿(トレークル)に比すれば遙に優りし者なるに關せず甚だ低廉なる價を以て之を賣れり然れども以上の如く失望せしめられたるに激し一行はランヲ氏に詰論せしに同氏は一行にして自ら海岸に下りしならんには必ず其好む所の者を購買せしならん然し土人は海員の爲め贋造貨幣を以て欺かれんとを恐れ居れりと陳べたり此陳述には固より信は措かざりしも公氏は試みに海岸に赴きしに一も目に入るの家畜なく又即時に買收むべき何物をも認めざりき其不在中ランヲ氏はペンクス氏に向ひ元來土人等は金に非ざれば何物をも賣らざるに金を與へられざりしを以て之を不平に思へる旨を陳べしをペンクス氏は斯く屢々虚言を吐ける者と言を交ふるを屑しとせず嘶然起ちて其席を去れり

二十日ソランダー博士は公氏と共に海濱に上り博士は直ちにランヲと談話せんが爲め市府に到りしが公氏は食品を購賣すべき見込を以て海濱に留り此に一老人に邂逅せしに其老人自ら權勢を有する者の如くなりしかば艦員中之を重んじ稱するに首相の名を以てせり公氏は此老人をして己等の爲めに利する所あらしめんとて之に贈るに望遠鏡を以てせしが小なる一水牛の外更に何物をも賣らんとして出せし者なきにより其水牛に就き請求せる價を問くに五「ギーニー」にして其價格幾ど相場の二倍に出でたりしが我より三「ギーニー」を出せしに賣主は之を好價と思考せしが其賣買を約定する前一應其評價せる所を島王に通ぜざるを得ずと陳べ乃ち直ちに使者を發して之を告げしに其歸るに迨び五「ギーニー」より少からざる價格を收むべしとの言を齎らせしかば公氏は斷然此金額を與ふるに決し再び使者を送りしに其不在中ソランダー博士の市邑より歸り來れるを視しに凡そ一百名の人之に尾し就中小銃を肩にする者あり投槍を手にする者ありて其所以を詳かにせず仍て其敵對の形狀の何の故たるを査問せしに博士は一同に答て曰くランヲは余に向ひ「貴客の一行に於て貨物を買ふに其價格の半ばより多く與ふるとを拒まれし爲め人民等は貴客等と貿易するとを欲せず仍て今日以後諸物品の貿易は之を止めらるべし」と陳ぜりと

英國諸紳士は之を聞て凡そ島王の命令と爲す者は全くランヲの計策に出でたるを疑ふの外なきより一同は此危急の時に際し事を迅速に結ばんと憂慮して其處すべきの方法を討議しけるに其間ランヲの黨人は既に相集りて棕櫚の糖煉及家鶏を賣らんが爲めに携へ來れる者幷に今將に羊及水牛を此市場に携へ出んとせる者を驅逐するとに着手せり

此時に當て公氏の慧眼偶〻彼の首相の名を以て重んじたる一老人を注視せしに其容貌に現處留に不服を感ずる樣子あるを察知せしかば乃ち彼を我に與みせしめんが爲め進んで其老人の手を握り且つ之に與ふるに古き大刀を以てせしかば此好機に投じたる贈物能く其効を奏して一同の冀望せる所を悉く大成せり即ち彼老人は榮譽ある尊敬の標稱を得て心大に悅び一行の爲に鮑迄斡旋の勞を取りしかば我が一行の欠

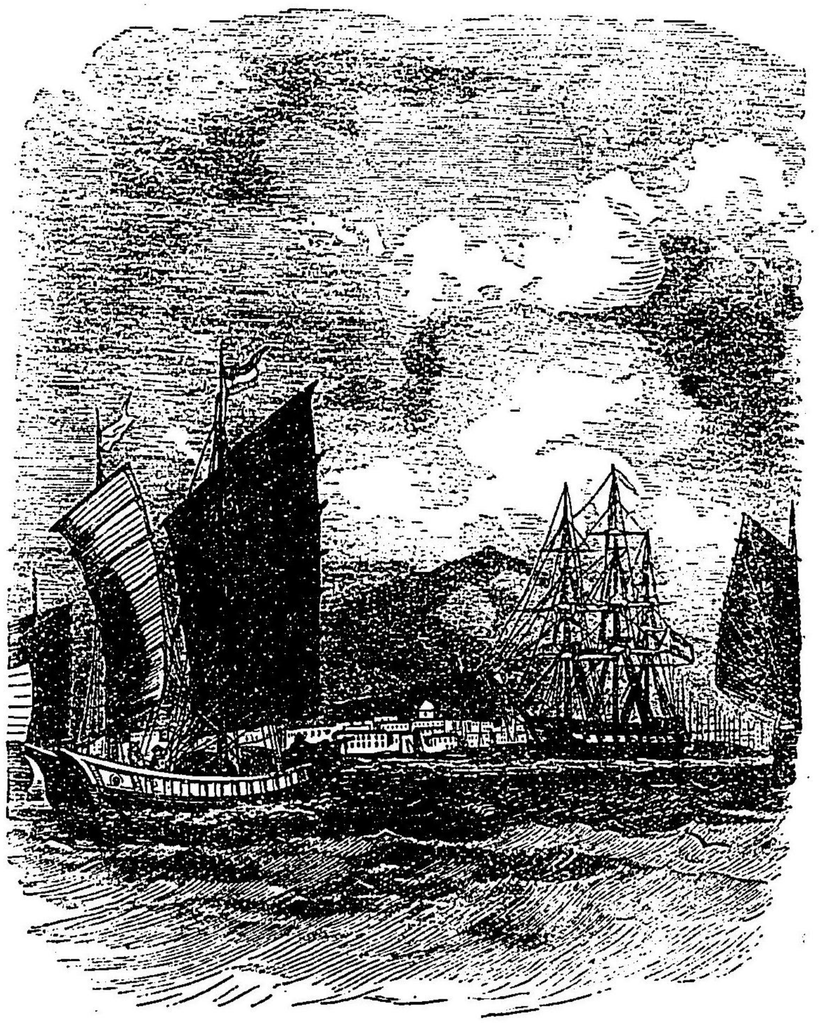
乏に供給せんと土人等競て其家畜を携へ來り忽ちにして其市場を滿たすに至りしなり公氏は其初めて携へ來れる二頭の水牛に對し十「ギーニー」を與へしが後に至ては交換を以て之を購入し各頭に就き小銃一個を與へたり此割合を以て推すときは其幾何たるを問ず我が思ふ儘の頭數を購入ずることを得たりしなら ん是に依て彼の貨幣にて購ひたる二頭の水牛に就きランヲの必ず利益を得たらんことは之を推知すべし 又彼れが「土人に於ては家畜に對し金の外何物をも受くるを欲せず」と言ひしも全く其賣得高の分配を受 けんことを欲したるに外ならざりしや疑ひなし斯くして公氏は遂に此島の土人より棕櫚の糖煉數百「ガ ルロン」大蒜少許、鷄卵多數、檸檬及椰子若干、家鷄三十「ダズン」、豕三頭、羊六頭、水牛九頭を購入せしが 必要の食品も先づ是にて備はりたれば今や一行は此島より出帆せんとを欲し乃ち之が準備に從へり抑〻 本島は名をサヴューと稱し南緯十度三十五分東經百二十二度三十分に在り

本艦の此海上に到りしより凡そ二年前のことなりき佛國の一艦ありチモルの海岸に於て危難に遭ひ數日 巖上に坐するの末、終に風の爲めに其艦を破壞せられ爾時艦長は過半の水夫と共に此に溺死せしが一名 の艦士と凡そ八十名の乘員とは海濱に達せしを以て直ちにコンコルヂヤ地方を横過し此に差掛りて要す る所の救濟を受け然後ち和蘭人及土人若干を伴ひて再び其破船場に歸り是等の助力を得て金銀及び他の 貨物の箱を悉く回收し以てコンコルヂヤに歸り此に七週間留りしが其滯留中其人員に死する者極めて多 く生きて本國に歸りし者其半數を超えざるの大害を受けたりと云ふ

九月二十一日本艦は錨を揚げて西方に進航し二十八日に至りジァヴァ島に向はんとするの見込を以て終 日針路を北西の方に取れり三十日公氏は航泊日誌幷に士官下士及水夫に就て檢出し得たる諸日記類を悉 く領收し以て其一行諸員に巡航せし處の場處を秘密にすべきことを嚴令せり斯くて同夕七時に至り雷鳴あ り十二時に至り電光に由てジァヴァ島の西端を認めたり

十月二日ジァヴァ島の海岸に接し之に沿ふて進航せり同日午前當時大患なりしチュピアに與ふべき果實 を得んが爲め端艇を海濱に送りしに艇員等四個の椰子と一房の芭蕉實を一「シルリング」にて購ひ且つ家 畜に與ふべき牧草を携へ歸れり此國は甚だ愛すべき光景を呈し到る處樹木を以て蔽ひ其樹木は連綿とし て一森林を爲すが如く見えたり十一時に至り和蘭の東印度往復船二隻に出會し之より凡そ二年前バタ ヴィヤに在りしスウァルロウ號の無難に英吉利水道に達せしことを聞けり

三日夕六時此國の小艇に鳥猿及他の品物を載せて本艦の舷側に來りしが其價甚だ不廉なりしが爲め竟に 購買する所甚だ少かりき實に公氏は二十五羽の家鷄に對し二弗を與へ又重さ凡そ三十六听の鹽一個の爲 めに西班牙弗一枚を與へり此日和蘭郵船の船長二個の簿冊を携へて本艦に來り其一冊を艦員に與へて之 に本艦の號及其司令官の名其發航せし場處其行かんとせる港其他艦員に關する詳細の事を記入し以て後 日此に來るべき英人の參考に供さんとを冀望し又他の一冊を出して之には艦長自ら筆を執りて本艦の號 及其名を記入し以て印度の知事及參事會に移すの料となさんことを求めたり仍てヒックス氏は先づ之に



バタビヤ港ノ海面景

本艦の號を記し次で唯「歐洲より」と附記せしに彼れ其漠たるに心附きしも其要たる單に我が英人の參考に供せんとするに止るものなれば其望む所に滿たざるにも拘らず我々の記載したる儘を以て滿足すとの旨を陳べたり

五日に至り本艦は數回出帆せんと試み且つ屢〻投錨したる末遂に發して翌朝に至るまで其進航を續けしが此時に當りて海流急激なりしが爲め再び錨を投ぜり既にして又錨を揚げ八日に至るまで數回漂泊法を行ひ同日に至り艦中の海圖に示したる一小島の近傍に投錨し其島にマイルス島の名を下せりバンクス及ソランダーの二氏は之に上陸して二三の植物を蒐集し且つ一の蝙蝠を射止めしが其兩翼の極端より之を度るときは其長さ一「ヤード」に達べり

此二紳士本艦に歸るの後直ちに數名のマレー人一小艇に乘りて艦側に來り乾魚及鹽を販賣に供せり其中の一小鹽は重さ凡そ百五十听ありしが彼れ之を一弗にて販賣せり既にして本艦は夜に至るまでに唯僅少の進航を爲せるのみなりしが時に陸方より風吹き起りしを以て東南東に進航し翌日を以てバタヴィヤの泊地に投錨せり本艦此に投錨するや否や燕尾旗(ブランドペンナント)を醫したる一船を認めしが彼より一端艇を派し來りて本艦の號弁に司令官の名を要問せり乃ち此査問に對しては公氏其適當と思料せる所を以て答へしが該端艇を指揮せし士官之を聞て直ちに立去れり此士官及之に隨ひ來れる船員等は氣候の不良なるが爲め甚しく衰へいたるに依り我が艦員中にも尋で死する者も多からんかと恐れたりしが此時艦中に於ては幸に獨り

インヂヤ人種たるチュピヤを除くの外一の病者もなかりき然れども此時に當り本艦には甚だ漏隙を生じ平均一時間深さ九吋の水を漏入し且つ其副龍骨(フアールスキール)も其一部分を脱出せり又其喞筒中一個は全く其用を失ひ自餘亦甚しく敗壞して其使用到底永續すべからずと思はれたり乃ち士官及び火夫等の一同は此狀況を察して到底本艦を無難に海に出すと能はずとの說を有せしかば公氏も今は本艦を傾けて修繕すべき許可を請ふことに決せしが之を爲すには書面を以てせざるべからずとのことを聞きしより自ら一の願書を作り之を蘭文に飜譯せしめたり

十月十日木曜に當り公氏及其他の諸紳士は海濱に上りパタヴィヤに在る唯一の英國駐官に之を請へり此紳士は名をレースと稱せしが其同國人たる一行を最も慇懃に迎接し至大の懇待を以て之に午餐を饗應せり午後に至り公氏は同地の總督を訪問せしに是亦慇懃に之を迎へ且つ告ぐるに翌朝議會に出で願書を之に提出せば其懇請せる所の各事皆許さるべき旨を以てせり此日夕刻最も恐るべき暴風雷雨あり和蘭の東印度往復船は之が爲めに甚しき損害を受けしが當時本艦は其和蘭船より少許の距離に在りしに拘らず之を無難に避けたり是れ恐らくは電鏈の閃電が艦上を超えて導き去らしめたるに因るものならん此雷鳴の時に當り本艦中の一番兵に偶〻小銃を裝塡し居たる者ありしに之を其手より振り落され爲めに其槊杖を粉粹せられたり此電鏈は宛も火流の如き觀ありて本艦も甚しき激動を受けたりと云ふ

十一日公氏は議會の紳士に面晤せしに其諸願の許容せらるべきことを告げたり

此時に至るまでチュピアは病氣の爲め續て艦中に在りしが其病、膽汁症なりしも其供せらるゝ所の藥劑を固く拒んで服せざりき時にバンクス氏は既に海濱に一小屋を賃借せしを以て乃ち彼れが健康を回復し呉んとの望を以て彼を此に迎へしに其艦中艇中に在るに論なく甚だ失心無頓着たりしに似ず其市府に入るや否や忽ち其鋭氣を回復したる者の如く即ち家屋、車馬、街衢、人民其他無數の事物皆一として彼れが驚激を起さゝる者はなかりき然るにチュピアの此一場の觀に驚かされたること斯の如きにも拘はらず其子タイトは十分の快樂を感じけん消魂滅魄極めて大悅の躰にて街衢を跳りながら通行し且つ物毎に新奇を稱して頻りに詰問せしがチュピアは又數多の通行人の身に纏へる衣服の種々異るに眼を着け之に就て種々の詰問をなせり而して其當國に於ては諸國の人民互に入り雜り各〻其國の習俗に從て服裝することを示さるゝや彼れ亦習慣に從ひオタハイラーの衣服を裝ふて立たんとを冀ひ本艦より數個の南洋服を取寄せ極めて快速に且つ巧みに之を着けたりバタヴィヤの人民は皆てボウゲーンヴィル氏の船にて伴れ來りし一のインヂヤ人種オトウロウと稱する者を視しとあるを以て皆チュピアを以て彼のインヂヤ人と誤認しチュピアの同人ならざる乎を問ふ者續々ありき時に公氏は本艦の修繕費に要する貨幣を得んとせるも一私人に至ては其所要の金額を貸出すべき者更に之れなきを以て此に意外の困難を極め終に其地の總督に之が請求書を送りしに總督は直ちに東印度會社の金庫より之を公氏に供給すべきとを命ぜり

是より數日を經るの後十八日木曜を以て本艦はオウラストに進行し其船貨を取出だす爲め之をクーパー

島の埠頭に繫ぎたるが其後九日餘を經て氣候の害毒漸く一行を冒すに至れり即ちチュピアは俄然重躰に沈みて日々に益々悪しき容躰に陥り其子タイトも亦肺炎に罹りバンクス氏及ソランダー博士は熱病に侵され又バンクス氏の從僕二名も甚だ不快の容躰に陥れり之を要するに艦中幷に海濱に在る所の人々僅々數日にして幾ど病症に感じたり是れ蓋し土地の低くして沼澤多かりしと汚穢なる無數の運河、市府を縱横に貫きて八方に通ずるとに因る者と想像せられたり

二十六日に至りては乘員中任務に服し得べき者實に僅々に過ぎざりきチュピアは更に新鮮なる空氣を呼吸せんことを望み本艦に移されんとを冀ひしも本艦は既に索具を除き豫定の場處に繫くの準備中なりしを以て之に應するを能はざりしが二十八日に至りバンクス氏は之をクーパー島に送り海陸交吹風の吹拂ふの地位を卜し彼れの爲めに天幕を張らしめたり

既にして十一月五日軍醫モンクハウス氏死して一同に甚だ悲哀を感じたり蓋し氏は聰明にして熟練なる一名士たるのみならず其死せるの時は一行に於て最も其能力を要するの時たりしを以てなりソランダー博士は此時僅かに葬儀に會するとを得しもバンクス氏は毫も病床を離るゝとを得ず地方の有毒なる空氣の爲め病勢日々に益々加はりたり仍て數名のマレー人を雇ひ看護に從事せしめしも彼等異邦人に在ては哀ひ哉義務と人情に感ずると極めて薄く爲めに往々病者自ら床を離れて索むる所を果すの已むを得ざるに了れり

九日チュピアの子タイトは終に養生叶はずして鬼籍に登れるが憐むべしチュピアは最愛の一子を失へるが爲め悲哀に感じて病勢を加へしこと甚しく多日の生存既に覺束なしと知られたり時に本艦の船底を細査せしに艦躰の傷みに於て最も恐怖すべき情況を發見せり即ち副龍骨(フリーケスキール)は概ね皆脱し去りて正龍骨(メーンキール)亦損傷を受けたるの個所多く被セ物(シーチング)は多く裂け去りて數種の板張亦大に破れ蟲類深く木材に蝕入せり嗚呼本艦は脆弱既に斯の如き船躰を以て其至險世界中に讓る處なき海上我百「リーグ」を進航したるなり豈危きことならずや

此時ソランダー博士及バンクス氏は共に病魔の爲めに痛く衰耗し醫師之を明言して田舍に移すに非ざれば回復の望なしと云へり仍て市府を距る凡そ二哩の處に一の家屋を賃借し二名のマレー婦人を雇ひ入れしに女性の持前として温和なりしより俱に好看護婦と爲れり斯くて此に紳士の專ら其健康を回復する方法を盡すに際し彼のチュピアは疾病と其愛子タイトの死亡とに由りて終に其命を失へり初めタイトの死病に罹るや自ら其終焉期の近きを感知し往々其側に在る者に向ひ「看よ諸君余れ將に死せんとす」と陳せりとぞ嗟乎彼れタイトや其性實に順良にして與ふる所の藥劑に於ては其何たるを撰ばず常に之を服用せしも天命終に繫ぐに由なく萬里の異域に露と消へしは哀れと謂ふもおろかなりけり是に於てチュピア父子の遺骸は之をエタム島に埋葬せり

二十五日夜中本艦の乘員に於て未だ曾て覺えざる程の急雨四時間降り續きバンクス氏の寓居の如きは各

處より水漏り下段の房室は水車を運轉するに足れるが如き流を生じたり同氏も今は大に快方に赴きしを以て其翌日を以てバタヴィヤに行けり二十六日頃より偏西信風吹き定まりて晝間は北或は北西より吹き夜間は南西より吹くが常となれり而して其前數夜暴雨を來たせしが爲めに溶潦を生じて是より無數の蚊及ナット蚊の類湧き出で恰も蜂が其巣より起つが如く夥しく群を成して來襲し溝渠中の蛙鳴も亦常に其聲を絶たざりき是連雨の將に來らんこと期して待つべきの確兆たりしなり

斯くて本艦の修理既に成り患者も皆歸船して水及需用品も亦大半積み込みたれば則ち十二月八日アウラストを出帆してバタヴィヤの泊地に投錨したるが尚ほ飲水食料品其他艦中に備ふべき必要品の積殘りを運搬するに十二日間を費したり蓋し此仕事には十二日を要せざる筈なれども是れ乘員中に死去せし者數名ありて又生存者と雖も其過半は病に罹りて勞働すると能はざりし爲め斯くは手間取りしなり

二十五日（繁心子曰く此處原書には五日とあれども五日にては前後連絡せず仍て之を訛植ならんと判斷して斯く改めたり）公氏は當地の總督を始め配意を煩はしたる諸氏に別を告げしが此時一の出來事生ぜしかば定めて不滿足の結果を生ずるならんと一時大に心配せり即ち其出來事とはバタヴィヤの泊地に繫泊せる和蘭船の一水夫其船を脱して本艦に來り入籍せり是に於て其和蘭船の船長は其者を和蘭の一國民となし脱走の罪を總督に訴へしかば總督は之を引戻さんが爲め照會狀を發したり而して我が駐在官は之を接受して其者、果して和蘭の國民なれば無論之を渡さんとを答へたり然るに此時公氏は上陸中にして翌日までは歸艦せざる豫定なりしを以て我が駐在官は照會狀を携へ來れ

る和蘭官吏に交付するに本艦の副長に宛て脱走者果して和蘭の國民なれば之を渡さんとを要する旨の添翰を附せり依て和蘭官吏は本艦に來りて副長に談判せしに副長は其者を以て愛爾蘭人なりと爲し且つ愛爾蘭人たる以上は無論我が國王陛下の一臣民たる分限を有する者なりと陳し斷乎として之を渡すとを拒絶せり仍て和蘭官吏は其翌日公氏の歸るを待受けて此旨を報ぜしに公氏は即ち副長の返答を協贊せしのみならず英國の一臣民を他邦に渡す如きは余に於ては思ひもよらざる事なりと述へて更に頓着せざりき

然るに和蘭官吏は之に應して曰く其者は是迄乘組める船の乘員籍に就て調ぶればイルシノール（丁抹の一都會）に生れたりとありて即ち丁抹人たると明かなり依て總督は今更に彼を丁抹人として引戻さんとを小官に任ぜりと是に於て公氏は又之を駁して曰く或は丁抹人と云ひ或は愛爾蘭人と云ひ時に從て擇ふ如き者を以て固く其船に屬する者と信し脱走者として之を引戻さんとするの照會を發するは抑も知事に於て誤れりと謂はざるを得ず然れとも其者若し果して丁抹人たらんには總督に對し友誼上より之を引き渡さん權利上に訴へて要求すべき限りにあらず然れとも彼若し英國の一臣民たらんには飽まで之を擁護すべしと是に於て和蘭官吏は一旦暇を告げて去りしが其去るや否や公氏は副長より書狀を領したり而して書中には其者の英國臣民たる確證を擧げたり依て公氏は此書狀を和蘭官吏に送り謂て曰く「願くは之を總督に移し彼は何樣談判あるとも斷じて之を渡さゞる旨を通ぜられんとを」と公氏の此英斷なる回答は其望む所を得事遂に平穏に其局を結べり

是に於て公氏はペンクス氏及其他是迄市内に寓居せる諸紳士を引纏めて本艦に伴ひ歸り翌朝錨を揚げて出帆せしが砲臺幷に當時泊地に在りし東印度往復船エルシン號より祝砲を發せしにより即ち其禮に答へしに後ち幾ならずして海風吹き定まりしかば已むを得ず再び投錨せり蓋し本艦のバタヴィヤ泊地に着せし以來艦中幾ど一人として疾病に罹らざる者なく唯之に罹らざりしは七十有餘歳の製帆師一名のみなりき而して彼れは言へり一行の該地に滯留せる間毎日飲酒を缺かざりしと其經過斯くの如くにして本艦は乘員七名を遂にバタヴィヤに葬れり即ち其七名はチュピヤ父子水夫三名星學士グリーン氏の從僕及軍醫にして尚ほ本艦出帆の時に當ては乘員の病に罹る者四十名ありて自餘と雖も皆病後の衰弱に身を疲らし其任務に堪ふる者とては極めて僅少なりき

バタヴィヤはジャヴァ島の北側サンダ海峽を距る二十餘里に在る一大灣の濱堆上に建設したる一都會なり而して内地に上ること四十哩なるブライウェンベルグの山中より發する所の數條の小河流該市街を種々の方向に分截して海に入るなり又市内に在ては凡そ一街毎に幾ど水の停滯せる運河ありて其運河の兩岸に栽樹あるを以て其觀は極めて人意を快くせり然れども其栽樹と運河とは共に相合して空氣を甚だ有毒に導くの具となれり又河流中には往々内地へ三十里を溯航すべき者あり蓋し和蘭人の此地を港市に採擇せしは畢竟此水運の便利に着眼したるものならんバタヴィヤは實に其水運の便利に於ては世界中獨り和蘭の諸市を除き他の各地に超絶せり

バタヴィヤの市府に入るには二個の吊橋に由てす其北東隅に一城あり何人も之に上ることを許さず此城中には總督及諸議員の室を設け又數多の倉庫ありて和蘭東印度會社の貨物を之に收藏せり又該會社は多量の火藥を所有し電光の爲め一時に其全量を失ふことなからんが爲め之を數ヶ所に保存せり又大數の砲を城内に据附けバタヴィヤを距る數哩の内地處々に堡砦の設けありて又數多の郭を有せる家屋を存在せり

ジャヴァ島に於ては馬、水牛、羊、山羊、豕を産し此地の牛は歐洲の牛と大に異なり躰の瘦せ甚だしと雖ども肉は極めて精味なり水牛は支那人及ジャヴァの土人に於ては之を食するも和蘭人は熱病を惹起すを恐れて一般に之を食することを嫌へり此地の羊は多毛にして山羊の如く長き耳を有せり其肉は蓋し硬くして不味ならんと思はる又豕殊に其支那種の者は甚だ美味にして其脂膏の多きことは別に其白肉を屠者に於て販賣する程なり其屠者は則ち支那人にして其脂を米と共に食すべきやうに溶解し之を其同國人に販賣するなり

葡萄牙人は野猪及鹿を銃獵して之を廉價に販賣す甚だ好食品なり山羊は羊と均しく淡薄なりバタヴィヤの周圍に連なる水中には多種の魚類充滿し又島上には甚だ大なる蜥蜴の居ること普通なるがペンクス氏は長さ五呎の者一尾を射獲せしかば之を調理して一同食せしに其味甚だ美なりき

ジャヴァの住民は回々教徒なるを以て公然飲酒を爲さず然れども隱密の處に在ては之を嫌ふ者少し又彼等

の阿片を喫して之に沈醉するの性質は以て印度人及支那人をして之を賞贊せしむるに足れり

既にして一千七百七十年十二月二十七日木曜を以て本艦はバタヴィヤの港を發して海上に進み逆風の爲めに長く妨げらるゝの後二十九日プュロパールを上風に取りて本陸の方に進みしが同日を以てバタヴィヤと食人島の名あるパンダムとの間の一小島を通過せり

一千七百七十一年一月一日火曜日午前ジャヴァの海岸に向ふて進み風の許す限り其針路を保續せしが五日の午後三時に迨び其需品の補充且つは患者に給するの食餌を得んが爲めプリンセス島の南東側に投錨せり此時に當てや患者の多くはバタヴィヤを出發せし際に比すれば餘程惡徵を呈したりパンクス及びソランダーの二氏は公氏及數名の士官と共に上陸するの途中水瀕に於て若干の土人に出會し其徒が推戴して王となせる者の處に案内せられたり其日夕刻パンクス氏は此王の許に伺候せしに彼れ否な島王殿下は親ら其食を料理するの勞を取れる折柄なりしにも拘らず稻田の中央に在る其寓居否な其宮殿に同氏を引見して大に之を禮遇せり

七日月曜日土人は鷄、魚、尾長猿、小鹿、及び野菜を携へて市場に來りしも蝸龜は未だ一尾も見ざりしが翌日火曜日に至て初めて之を持來れり而して其後は日々數尾の供給を缺かざりき

十一日金曜日パンクス氏は其バタヴィヤに於て傭入れたる一僕の報に依て此島には是より西に方り海濱に接近したる處に一邑ありとの事を知り行きて之を觀んと決心せり是に於て同氏は午前次任の艦士と共

に出發せしが此行の或は土人に不快の念を起さしむるとのあらんを恐れたれは途中にて土人に出會ふとに自分等は草木探撿の爲め行く者なる事を告げたりといふ斯くて一老人あり此一行を見るや一邑に導きしが其邑名をサマダングと呼べり此邑は凡そ四百戸より成り稍ゝ濶き一河流によりて之を兩部に分たれ其一を舊邑と稱し其一を新邑とす一行が舊邑に到りしとき數名の土人あり之に向て聲を掛けたり其者は市場に於て既に面識せる輩にして其中一人は一名に付二「ペンス」を以て新邑に案内せんとを申出たり依て一行は之を拂ふべきの約を立て二隻の小なる蕃舟に乘りしが此二隻は互に相併び共に緊結して其顚覆を防げり途中困難なきにはあらざりしも安着して新邑に入りしときには住民之を遇するに實意を盡くし其王及重立ちたる者の家屋を示したり然るに此時到る處家屋は皆閉鎖して假に其寓を稻田の中に設けたり是れ鳥及尾長猿の爲めに其刈禾を奪はれんとを防ぐが爲めにして若し之を等閑にするときは大なる損害を免れざるなり斯くて各處を巡覽し了りて後ち二「ルービー」即ち英貨二「シルリング」を以て大なる帆走舟を傭ひ恰も會食時の前に歸艦するを得しが此日の供饌は僅に四十听の目方ある小鹿にして其味佳絶を覺えたり十七日日曜日、幾ど薪水を滿載せしを以て彼の島王殿下なる者に別を告げて數點の小間物を贈りたるが尙ほ發足に際して紙二帖を與へしに之を嘉納せり

十五日木曜日北東の輕風を得て出帆せり本艦が凡そ十日間を經過したるプリンセス島はサンダ海峽の西口に位する小島にして樹木蔚蒼し僅に其一小部分を開拓せしのみ住民はジャヴァ人種にして其領主はパン

ダムの回々教主に隨從せり擧島回々教を信すると雖も何の處にも一棟の寺堂あるを見ず本艦の寄泊中土耳其の所謂ラマダムなる齋式を守ると極めて嚴にして其の日は日沒まで一人も一片の食物を味はず又其ペッヲル(胡椒の一種)をも嚙まず

本艦は二月中其方向を保續して喜望峯に達するに最も便なる路を取れり乘員がパタヴィヤに於て感受したる惡性の病毒は今や既に艦中に發して或は赤痢或は熱病の徵候を呈し晋時にして本艦は患者を以て恰も病院と其狀を同くし幾ど毎夜死體を水葬せざるなしバンクス氏も亦患者の一人にして一時は其生命も殆と覺束なきに至れり即ち僅に六週間にして既にパタヴィヤに葬れる七人の外にバンクス氏に隨行の一紳士スポルチング氏、同隨行の博物蓄師パアキンソン氏、星學者グリーン氏、水夫長、船匠師及其屬モンクハウス氏、製帆師及其助手、厨夫、海兵の伍長、船匠師附き水夫二名、艦士候補生一名及海兵九名合計二十三人を喪へり蓋し艦中病毒の蔓延を防がんが爲めには百方盡す所ありたれども其の大害を及ぼしたるとは遂に斯の如きに至れり

三月十五日金曜日午後十時頃喜望峯の附近に投錨せり公氏は直ちに總督の許に赴き請ふ所ありしが總督は此地に相應なる諸般の便宜を與へんことを速諾し患者の爲めに家を借り一人に付一日英貨二志を以て之に宿食せしめんとを契約せり

本艦が喜望峯に繫泊せる時に當り印度往復船ハウトン號は英國に向て出帆せり該號は敗血症の爲めに既

に其乘員を喪ひたること幾ど四十名にして今や喜望峯出帆の際、其人數の多くは最早望なき容躰に陷りたり他の船舶も亦各其乘員の多寡に應じて病毒の爲めに喪亡を蒙れり本艦の如き、其英國を離れてより海上に在るの久しきことを以て之を考察するときは其損害は比較上、輕きに屬せり本艦は患者を療養し又需品を購求し又船體及船具に種々必要なる修理を加へんが爲め終に四月十三日迄當岬に滯留せしが二四日日曜日には總督に別を告げ雙錨を揚げて出帆の都合に運びたり

此週の木曜日に至て前途大に望ありし一青年ロバアト、モリノ氏逝けり其後は何等別段の事なくして其航程を運びしが二十九日月曜日に於て東より西に地球を一週して第一子午線を横過せしが故に爰に一日の損を來たせりパタヴィヤに於て本艦の日取りを訂正するとき之を見込みて餘裕を設けたり五月一日月曜日聖ヘレナ島内ゼームス砲臺(ジントフォート)の前に到りて投錨せりバンクス氏は此島の最も著名なる場所を巡覽し事物の觀るに足るべきものは悉く査察せんと其時間を全く此に費せり

聖ヘレナ島は亞非利加及亞米利加間の幾ど中央に在て其前者を距ること千二百里、後者を距ること千八百里とす該島が此名を得しは葡萄牙人が聖ヘレンの祭日に當りて此島を發見せしに因るなり此島は本艦が其上風方に接近したるとき之を望みしに慄くべき高さの絶壁を以て圍繞せる大岩積の如く見えしが其海岸に沿航するに當りては本艦より仰で觀るべき巨大なる石崖に近つきたり而して終に市邑の存せるシャルウェリーの渓谷を開視したるが乃ち其渓谷の各側は海に面せる石崖の如く突兀として不毛なりし然

れども其谷底には少しく草の蔽へるを視たり

此地は何れの方より視るも突兀たる岩石の如くなれども其頂上は良質の地層、之が表被を作し以て穀類、菓實、及各種の草を生ず又岩を登りて後ち之を見渡すに或は高丘あり平原あり或は菓樹の培養所あり或は又菜園ありて其縱横雜駁の中に家屋を撒布せり又曠原には家畜の群をなし其中には船舶の要用に應ずるが爲め飼養するものあり或は乳汁を絞る爲め或はバタ、チースを製造する爲めに飼養するものあり豕、野羊、白露國鷄及各種の家禽も亦饒く、海は魚介に富めり又菓實に至ては葡萄の外に車前實、甘蔗其他熱帶國の常產たる各種に乏しからず又眉見豆、馬鈴薯及大薯を產す

一千七百一年には全島僅に百家族ありて其大半は英人或は其子孫に屬せり

葡萄牙人の一千五百二年を以て此島を發見するや之に移殖するに豕、野羊、及家禽を以てし而して印度よりの歸途、必ず此に寄泊して水及新鮮なる食物を積入るゝを常とせり然れとも未だ嘗て此處に殖民せしことを聞かず若し殖民せし者とせば其後之を廢止せしなるべし其英國東印度會社の所領と爲りたるは一千六百年にして爾後一千六百七十三年までは連綿と其所有を保ちしが其時和蘭人突然來襲して之を掠奪せり然るに其後一年ならずしてケピテーン、マンデン、英人を指揮して之を恢復し當時泊地に繫きたる和蘭の東印度往復船三隻をも合せて收取せり是より先き和蘭人は上陸場を守衛し又砲臺を設けて大砲を列ね以て敵の來襲に備へしと雖も英人は二人以上併び行くと能はざる一條の小溪を知りしを以て夜陰に乘じ

シントヘレナ島砲臺ノ昇降梯

窮に此間道より岩の頂上に攀ぢ登り翌朝和蘭人の背後に現はれ一兵をも交へずして降を請はしめたり然るに其後は此小溪も亦守衛せしを以て今は如何なる場所と雖も敵の來襲して成功を期すべき一虛隙だも遺さゝるに至れり

此島には東印度會社より派遣せる總督、副總督及管庫ありて會社の事務を處理せり何れも一定の給料を受くるの外に海軍の司令官、商船の船長及貴顯の船客を經應する公費の盛饌に列するの餘澤あり

此島の土着者は時として是等職員の決議せる賦課を苛酷と爲して騷ぐとあり或は之を本社に愁訴して低減を蒙りしとありと雖も奈何せん路遠く書面を往復するに餘程の時日を移さゝるを得ざるが故に困者をして益ゝ困難に陷らしむることを免れず又一方より論ずるときは此地は生活の便宜に乏しからずと雖も利潤を收むべき產物は一として有らず加ふるに民間の苦情絕えず且つ費途多きが故に會社に於ても之を所有するを喜ばずと雖も其位置たる、英國に歸航する東印度往復船に取りては最も必要の地位にあるを以て亦其有を棄つると能はず

聖ヘレナ島に住する白人種の子孫は其顏の赤色なると身體の强健なるとを以て世に聞えたり其然る所以は概して左の諸因に歸すべきなり第一に其棲息する處は山嶺に在りて絕えず此島に吹く所の海風に梢けづられ又其平素に從事する作園耕畝は最も健康を進むるの勞働とす又屢ゝ一陣の凉雨ありて園島を清爽ならしめ泥沼瘴澤の一として人體を惱ますものなし又シャツベル、ウェリーの邑と園圃との間には峻險なる丘陵ありて之を攀ぢ登るを常とす其丘陵の峻險なるが爲め中央に梯を設けて足掛りと爲すが故に之を呼びて梯丘と謂ふ若し此路を取らざらんとすれば三四哩を迂回せざるを得ざるにより險にして捷なる者を擇ぶに至り之が爲め新鮮の空氣を吸ひ又身躰を運動するを以て知らず識らず衞生の二大主眼に適するとを得たり是等人民の氣質及性情に就て云はんに其外客を款待するの切なるとは恐くは未だ英人の血統に覩ざる所にして貪慾及功名心を挾むと亦た至て稀れなり

本艦は既に其需用品を補充せしを以て五月四日、我が軍艦ポートランド號及其護送船則ち東印度往復船十二隻より成れる一船隊と共に投錨して泊地を離れたり十日、金曜日までは此艦隊と相連りて英國に向ふの針路を保續せしが此時公氏は本艦の所詮之と同速に駛ると能はざるを知り信號を以てポートランド號に向ひ告る所ありしが艦長イリオットは本艦に來れり依て之に托するに本艦定式の航泊日誌及士官中若干の手に成れる航泊日誌を容れたる箱と共に海軍本部上局に宛たる一封の書面を以てせり二十三日木曜日までは船隊尙ほ未だ遠く先んぜざるを以て本艦より之を視認するを得たり此日凡そ午後の一時に於て敏活老練なる先任艦士ヒックス氏を喪へり即ち病症勞察なりしが其初め英國を離れしとき既に此長病の徵候顯はれ其航海中は顏色痛く憔悴して常に今にも死せんかと思はるゝの狀を呈せりと云ふ其ベタヴィヤに到着するまでは衰弱、極めて徐々たりしが此時以來病勢日に益ゝ加はり終に起つべからざるに至れり園艦の乘員葬場に列し相當の儀式を以て遺骸を海に投じたり翌日公氏は靑年の一士官チャールス、クラ

ーク氏にヒックス氏の職を務めんとを命じたり今や本艦は志す所の嶼を距ること近きに到り六月十日月曜日までは何等別段の事故なくして其針路を保續せしが其日に於て彼の第一にニウ、ヲーランドを視認したる僮僕ニコラス、ヤングは檣樓より一地を目擊して號へり是れ則ちリザアトなると判然たるを以て一同滿面に喜色を顯はしたるが其翌十一日火曜日を以て英吉利水道に進み水曜日にビーチー、ヘッドを通過するや各員は皆一刻も早く其親戚知友に相見えんと嬉しき勇氣を顯はしたり斯くて正午ドーバアに並び午後の凡そ三時に於て其發程より二年九ヶ月十四日目にて目出度ダウンス錨地に安着せり

第二周航記

公氏は前回の航海に世界を一周してニウ、ヲーランドの二島より成立せるとを明らかにし又現今の濠洲即ち當時ニウ、ホルランドと稱したる廣漠無限の地を探檢して其發見せし所極めて廣大なりしかば茲に又ヲヨウヲ第三世陛下は第二回の遠征を思ひ立たれ再び公氏を以て之が司令官に任ぜんと欲せられたり是に於て海軍上局(アドミラリー、ボールド)は航海に最も適當なる艦船二隻を派遣すべき命を受け即ちヒユールのケピテーンウイリヤム、ハンモンドより二隻の艦船を購求せり此二艦は即ち嚮きにエンデボーア號を製造したる造船家の手にて幾ど十六ヶ月前ホイットベイに於て竣工せし者なり其大なる者はレソリウシヨンと呼びて排水量四百六十二噸其小なる者はアドベンチューアと呼びて排水三百三十六噸なりしが前者はデプトフォードに回航して艤裝せられ後者はウールウイッチに於て艤裝せられたり

一千七百七十一年十一月二十八日公氏は海軍少佐に陞任せられてレソリウシヨン號の艦長に補せられケピテーンウォーリスに從つて二等艦士たりしトピヤス、ファルノー氏も海軍少佐に昇進してアトベンチューア號の艦長に補せられたりレソリウシヨン號には士官水兵等併せて百十二人アドベンチューア號には八十一人を乘艦せしめられたり

此二艦は至急に準備を遂ぐべき命を受けたるを以て海軍上局及衣糧局に於ては其艤裝に對し非常に勉勵

する所ありたり公氏の此遠征たるや陸地探檢の爲め古來航海したる先輩に比すれば遙かに便宜を得たる者と謂ふべし即ち一隻毎に排水二十噸量の小舟の構材を載せ不時火急の場合にはランダー船として之を使用するの便に供し又漁網、釣絲及各種の釣鉤を積み熱帶間に在る諸島の貿易に適する廉價の物品多量を搭載せり又乘員の豫備衣服特に嚴寒の氣候に堪へべき衣服を積み其外に觀象航海の精撰器械を備へたり即ちアーノルド、ケンダル兩氏の製造に係るハリソン式の經線儀四個をも此内に含有せり又山水畫工ウィリヤム、ポッヂー氏及博物學に長じたるジョン、レインホルド、フォストター氏父子此航海の爲めに備はれて其艦中に在りしがウィリヤム、ウエールス氏及ウィリヤム、ベイリー氏も亦觀象の爲めに備はれ經度局の指揮を以て前者はレンリウシヨン號に後者はアドベンチューア號に乘組みたり而して又新發見の國ある時に當つて其國へ贈與若しくは紀念のために遺し置かんことを欲して海軍大臣は特に賞牌を製造せしめて其要に供せり乃ち諸事の準備に周到なること斯の如く更に一の遺憾なかりき故に此遠征や其功を奏せんとは期して待つべきの觀ありしなり

斯くて此兩艦は尙ほ三年間の航海に充つる必要の食品各種及衛生上に缺くべからざる諸品の多量を搭載せり

此航海は國會の保護並に王室の恩賜に由て莫大の準備をなし其準備又海軍大臣諸長官及公氏の指揮監督に成りたれば古來各國に其類例なき至備を盡せり而して國王の明識克く公氏其人の如き才幹ある航海者

を拔擢して之が指揮者となす其用意の周到なる實に至れり盡せりと謂ふべし已に公氏の第一周航記を一讀したる者は氏の航海に熟練して勇敢なること部下を監督するに用意の周到なること先進航海者の訓戒に注意するの細密なること嚴寒の險難に際して忍耐の力に富むこと等に感嘆したるならん蓋し氏の擧動を簡單に約言せば賞贊するに言なしと謂ふべきなり何となれば其部下を監督するに嚴密を以てするも能く衆の感情を調和し常に尊敬を受くればなり

公氏は六月二十五日海軍上局より一篇の訓令を受けたり其要領左の如し

アドベンチューア號は公氏の指揮を受けべきと、二艦は先つマデイラ島に航し夫より喜望峯へ進航すべきこと、同港に於て艦員の勞を慰し食料及必須品を搭載しサーカム、シッシヨン岬探討の爲め南方へ航すること、但し同所はブーベー氏の觀測に據れば南緯五十四度、グリーニッチ觀象臺より東經十一度二十分餘に當れり、若し二艦此岬角に着したるときは該岬角は即ち歐洲列國の最も注目したる假定大陸の一部なるや又は唯一島の高角に過ぎざるものなるや否公氏は百方力を盡して之を探討すべきこと、此二者の内孰れに在るも二艦乘組の諸士は其力の許す限り精勵刻苦以て探討に之れ從事し此擧の大目的をして奏功せしむる爲めの視察は勿論又航海及貿易に有益なる視察を遂ぐべきこと、二艦の能くすべき限り高緯度に進み南極に近づくを專一として或は東方或は西方に艦長に於て擇ぶ所に從ひ探討の歩を伸ばすべきこと、サーカム、シッシヨン岬探討の結果如何に關せず南方へ進航して其視察を繼續すべし而して若し假定

大陸の有無を確知すると能はざれば尙ほ之を探討せんが爲め或は從來未だ世人の到達せざる南緯度に位する如き隔絶の島嶼を發見せんが爲め東方に進航すべきこと、斯くて地球を一周したるときは喜望峯を經てスピット、ヘッドへ歸航すべきこと、若し南高緯度間の進航を繼續せんとするも氣候の爲め航海危險なるときは已に世人の知りたる北方の港に寄りて船躰に修理を加へ順當の季節を待つて探討の事業を逐ひ再び南方に回航すべきこと

畢竟以上の訓令は公氏を拘束せんと欲して發付したるにあらず其乘組めるレソリウシヨン號の難破したるときはアトベンチューア號に乘り移りて更に其航海を繼續するとを允可せるなり故に公氏は此目的を達せんが爲め其部下に多數の士官を有し又其航海の日數には更に制限のあることなし之を要するに公氏は全權と專斷とを併有し不虞の事あるに當りては其欲する所に從て便宜之を處辨するとを得るなり

前顯訓令の謄寫は公氏の敎示と共に艦長ファルノーに送達せり公氏の敎示には二艦相離れて進航するの已むなきに際するときは第一の會合所としてマデーラ島第二にはポートプラヤ第三には喜望峯第四にはニウ、ヂーランドを指定せり兩艦未だプリマスを發せざるやウエールスベイリーの兩氏はドレーキ島に於て經緯度の觀測を爲せしに同島は北緯五十度二十一分三十秒にしてグリーニッチの西經四度二十分に位するとを認めたり是に依て經線儀及時辰器を起動せしむるの眞時間を確定せり時に七月十三日にして右兩星學者兩艦長及兩艦の一等艦士立合の上之を捲きて起動せしめたり此諸氏各〻時計の鍵を有し之を

捲き且つ互に比較するときは其病氣にあらざる限りは必ず列席するとに定めたり此日海軍の習慣として兩艦の乘組員は二ヶ月分の給料を支給せられ尙ほ奬勵の爲め航海中必要品購求費として翌年五月廿八日に至る給料をも貸付せられたり

一千七百七十二年七月十三日即ち月曜日を以て此兩艦はプリマスを拔錨せり此日海岸を離るゝに從ひ風力次第に加はりければ高濤奔跳して爲めに乘員の過半は病むに至れり已にして兩艦フィニステール岬の視限界内に來りしとき佛國の小形なるタルタン舟（地中海の岸航船）に會せしに此舟はフェロル及コルンナより麥粉を積載しマルセール港を解纜したるものにして舟中已に淡水盡き麵包及葡萄酒を以て露命を繫がざるを得ざるに至りしとを聞きしかば其乞に任せ淡水小量を分與せり二十二日午後西班牙の軍艦二隻に會したるに其一隻は我がアドベンチューア號に向ひ砲發して己れが方へ接近せしめんとせり仍て我が艦は唯遠方より呼びて軍艦たるとを知らしめたれば大に其無禮を謝し航海の無事を祝して辭し去れり二十九日即ち水曜日我が二艦はマデイラ島内ファンシエール泊地に投錨せり艦長は二名の林務官に伴なはれて上陸し同島駐在の副領事より迎接の爲めに出したる一紳士シル氏の案内にて英國の豪商ローナンス氏の宅に到れり斯くてシル氏は我が軍艦の碇泊中同島及同家の許す限り各品の供給に盡力して止まざりき

マデイラ諸島は唯三島より成る即ちマデイラの本島たるピウエルトー島及ポルト、サントー、イスラ、デサルタ（寂寞島の義）の二島是なり此三島を稱してマデイラ諸島と謂ふは其本島の名を藉りてなりマデ

イラは葡萄牙人の命名せし所にして樹木繁生せる森林の義なり此島は英王エドワード第三世の時に當りロペート、マシンと稱する英人の始めて發見する所なりとの說あれども其發見の功は則ち十五世紀の葡萄牙人に專ら見る所の冒險的の精神の功に歸せざるを得ず

葡萄牙王ジョン第一世は千四百十五年ムーア人と戰を開き大軍を率ゐて亞非利加に進航し遂にシウタを圍みて之を戡定したるが此遠征のとき同王に從へる公子の一人にして即ち同王第四の王子なるヘンリー親王は平常大に數學を好みて特に地理航海に關する事を講究せしかば此時ムーア人及亞弗利加の猶太人と相交はり之が爲めに外國の位置其環海及濱岸を知るの好機會を得たり

是に於てか同親王は地球上未知國の探討を爲さんと非常なる大望を起し滿腔の精神を此一途に注がんと壘寨を築きて之を防守し是より探討航海の爲めに艦船を派遣せんと決せり而して親王が此遠征の司令長官に拔擢したる人物は非常の才幹を具へたるヅニアン、ゴンサルボ、ザーコウ氏にして實に海上探討に因て其名を轟かしたるのみならず又舶砲使用の發案者なりき乃ち氏は一千四百十八年にポールト、サントを一千四百二十年にマデイラ島を發見し茴香の繁生する所に上陸せり而して茴香は葡萄牙語にて「フォンショー」と稱するを以て之より轉化して後世同所にフランシエールと稱する一邑の興るを見るに至れり」

ジュアン、ゴンザルボは同島の他所を視察し其土地の美麗なるに驚嘆し日々絕えず新發見をなしけるが此

遠征中一人を失ふことなく一千四百二十年八月下旬リスボン府に歸着せり已に歸りて國王に謁見し航海中の事を奏聞せしに王は此新發見の島に賜ふにマデイラの稱を以てせり即ち樹木森々たるの謂なり此後幾ばくならずしてジュアン、ゴンザルボはマデイラ島總督に任ぜられ翌春同島に赴任すべき命を受けたり而して此官名は氏の子孫に世襲し當今は之に加へて伯爵を授けられたり是を以て氏は王命を拜し家族の過半を携帶し一千四百二十一年五月再ひ同島に航し當時尙ほエングリス、ポルトと稱する泊地に投錨せり而して氏は初發見者たるの故を以て島名を改めてポルト、ド、マシノとせり之より方今のマシコなる名に轉化せり氏赴任後未だ幾何ならずしてフランシエール邑を建つる基礎をなせしが爾來星霜を經て著名となれり氏の携帶したる妻コンスタンシヤは木造の敎會堂を新築し聖カゼリンを奉祀せり

マデイラ本島は東より西に連亘する一脉の高丘より成り其南方に面したる山涯には耕地ありて葡萄園其間に點綴し其中央には商人別莊を構へて其風景佳絕なり

兩艦は八月一日マデイラ島を解纜し同九日北緯の回歸線を經過せり

八月十日即ち月曜日ケープ、ド、ベルド（綠山諸島の一なる聖ヂャーゴー島のプラヤ港に着せり艦中に欠乏せる需用品を購求するの許諾を得んが爲め一士官を上陸せしめしが容易く承諾せられ其歸艦するに及び同港の砲臺に向ひ十一發の祝砲を放てり兩艦は當港に於て良水の多量を積載し且つ豕、山羊、家禽等の畜產を補充せり

聖ヨハーゴー島は即ち英名の所謂聖ゼームス島にしてゲープ、ド、ベルド諸島中地味最も豊饒にして島と其名を齊ふせる首邑は山腹に立ち其間に幅二百碼の深谷あり幾ど海に通ず其海に接近する所には市街あり両側に家屋散在せり又其下に一條の澗流ありて奇麗なる沙灣に注けり即ち此灣は船舶の最も安全に繫泊するを得る所なり又上陸處の傍らに一小堡あり之を距ること遠からずして又一の砲臺あり小砲二三門を架せり

プラヤと稱する島の東側に當り稍々大なる一邑ありて良港も亦此處に在り四時船舶の出入絶えず靜穩の時季には殊に然りとす往日東印度通ひの船舶其往航には常に此港に立寄りて水、食料等を積載するの習ひありしが其歐洲への歸航には茲に繫止すること稀なりプラヤの邑には別段に目立ちたる建物なく遠望等を爲すには堡寨の小丘に登りて港内を瞰下し得べきのみ

八月十四日金曜日、両艦は飲食物を搭載したるを以て此港を扳錨し喜望峯に向ひ其針路を保續せり同十九日船匠屬の一名艦外に落ちて溺死せり蓋し其死者は一の明り取りに坐せしが之より落ちしならんと想はれたり之を救ひ上げんが爲めには固より百方盡力したれども遂に其効なかりき即ち其身躰の艦尾の下に沈みたるを暫見したるのみにて其踪跡を知るに由なかりしなり此者は性質の篤實なる良工たりしを以て艦員一同に深く之を惜みたり

二十日木曜日大に雨降り七個の空桶に天水を滿たしたり二十七日アドベンチューア號の下士の一名死去

せり然るに公氏は上甲板と下甲板との間に火を燃し以て船中を乾燥せしめては新鮮の空氣を入れ又便宜の時を計りては屢々水夫をして其寢具を曝し衣服を洗濯せしむる等衛生上に必要なる百般の豫防を怠らざりしを以て熱帶地方の多雨の大に發病の源たるに關せずレソリウシヨン號には遂に一人の患者を生ぜざりき

九月八日火曜日、西經八度に於て赤道を通過せり未だ曾て赤道を通過したるとなき乘組員の若干は潛水の常式を履行せざるを得ざるに因り即ち之を履行したる者もありしが或は要求せられたるブランデーの過料を出して此義務を免れし者あり

二十九日木曜日午後二時ラーブル灣の近傍に着せしが其着するや否や此地の城塞司令其他會社（和蘭東印度會社ヲ云フ）に屬する職員數名及ブラント氏來訪し就中ブ氏は夥多の物品を携へ來れり是船員に於て大に嘉ぶべき物品なりし斯くて該司令は當港の慣例として我が二艦の日記を調査し特に艦中天然痘の有無を尋問せり此病症は本港住民の諸病中最も懼るゝ所にして即ち其流行の際には醫官入港船舶の檢査を行へり公氏は本港知事男爵プレッテンベルグ氏に向つて着港の旨を報ぜんが爲め一士官を遣り其應答を待ちしが士官歸りて同知事の鄭重なる口上を報ぜしかば乃ち砲臺に向ひ十一發の祝砲を放ちしに砲臺よりも亦同數の答砲を發したり

十一月二十二日艦中百般の準備整頓したるを以て知事及諸官吏に告別せり此地の諸氏は艦員の望に從ひ

最も懲懲に諸般の要事を辨じ呉れたり是に於て錨を拔き十六發の祝砲を放ちしに直ちに同數の答砲を受けたり兩艦の陸地を離るゝや前文已に記載したる訓令に從ひ直ちに其針路をサーカムシッション岬に取りて進航せり而して今や兩艦は已に南極圏に向ひ進航することあるが故に嚴寒の氣候に會するの慮りなかる可らず乃ち公氏は其能ふべき限り用水の消費を節減すべき命を下せり且つ同時に海軍本部の給與したる强厚の短褐及股衣を各員に配分せり又出來合ひの衣服を望む者には之を給せり

二十九日暴風雨西北西より襲來し是より幾ど一週間は靜穩の日を視ると稀れにして波濤常に高く奔跳し時々船上を洗滌したるが故に艦中皆大に憂色を呈せり本艦の前部に居たる一僕僕は箱櫃の間に波浪の浸入する音を聞くや直に其臥床を下りしに海水幾ど其膝頭を沒せり是に於て各員皆喞筒を以て之を排除せしも海水益々加はりて遂に其水夫長需品艙室の明り取りより浸入するを發見するまでは止まざりき而して此颱風には雹雨交りて十二月八日に至るまで其暴力衰へざりしかば遂に一帆をも掛くると能はす爲めに其期する所の針路より遙かの東方に漂流せしめられしが故にサーカムシッション岬に達するの望は已に全く絶えたり斯くて不幸は啻に此に止どまらず喜望峯より積載したる畜產の過半も之が爲めに損失せり又艦員は温帶より急に極寒に移りしことなれば身躰之に堪へ難きが故に兩艦共に食料にブランデーを加ふることを許せり十二月七日には朝暾快よく上ぼりて晴朗の天氣を呈せしかば皆蘇生の思ひありしが忽ちにして又失望に歸せり即ち晴雨計非常に低落して午後一時烈風北西より來りトップ、ガランド、マスト

を御さゝるを得ざるに至りしなり斯くて八日に迨び此颱風稍〻減ぜしも波濤尙ほ高く奔跳せるを以てフォーア、トップ、マスト、ステイ、スルの外は掛くると能はざりき

九日水曜日、午前三時公氏は其艦を南方に下手回しゝたるが時に雪急に降りて颱を加へたり同八時アドベンチューア號に向て展帆の信號を發し十日に又同號に向て先行すべき信號をなせしが此時西方に當り氷山を認めたり時に霧霧起りて益〻深く密蔽しアドベンチューア號の艦長は波浪の高く氷山を打つを視て陸地と誤認し其一里内に艦を進めしに恰も好し公氏は信號を以て之を呼還し其艦尾の下に來らしめたるにより幸ひに危難なきを得たり是に於て進航するには大に警戒を加へざる可らざるの必要を感じたるを以て即ち兩艦のトップ、スルを全縮して錘測を施こせしに百五十尋にして未だ海底を得ざりき

十四日月曜日、二士の爲めに端艇を下ろし觀察實驗する所あらしめたるに二士は之に從事する際霧益〻深く塞がりて遂に二艦の所在を見失へり是に於て二士は浩渺たる洋中僅かに四挺櫓を備ふべき構造の小艇に在りて氷塊に圍繞せられ喫せんか一片の食なく走らんか二挺の櫓のみにて帆檣の備へなく其漂泊の實に危險なるより百方聲を發して兩艦を呼び若干時間あちこちに漕ぎ回はせしも遂に其甲斐なく四面益〻暗澹として其乘組たる端艇の舳艫だに通觀すると能はず又何等の音響をも更に聞くと能はざりき然るに暫くして天候靜穩と爲りしかば兩士は遂に其儘其處に居らんと決心し偏へに二艦の遠く距れざらんことを希望したるに忽ち鐘聲あり波を隔てゝ耳朶に達せしかば漸くにしてアドベンチューア號の所在を知

れり時に霧霧深く海を蔽ひ艦の四邊を辨ずると能はざりしがゆへに氷塊を避けて航するに至大の困難を覺えたりレゾリウシヨン號の乘員中に嘗てグリインランド貿易に從事したる者二名ありしが其一名は九週間、他の一名は六週間各〻同地方に於て氷原中に圍籠せられたりと語れり時に水夫より寒氣に堪へ難しとて愁訴する所ありしにより粗毛布を其短褐に縫ひ足して之を長くし且同種の織地を以て製したる帽子を分與せり又乘員中に敗血症の兆候を呈せる者ありければ醫官は即ち同症治療の爲めに携帶したる麥芽を以て新たに麥蘗汁を作り毎日之を患者に與へたり

二十七日海上異無風と爲りしかば乃ち此間を海燕及ペンギン（もぐり鳥の類）を射撃するとに費やし大に娛しめりペンギンの全羽毛は太だ厚く其各葉細長くして魚鱗の如く密接するを以て殆ど水の浸入を防ぐに足るべし又其身に具ふる厚き皮は以て其躰をして此凄澹たる地方の周年絶えざる寒氣に堪へしむるものなるべし海燕も亦嚴寒に堪ふる自然の結構は頗る巧みにして其羽の如き各其根より二羽を生し實に夥しき羽數を有せり

既にして天候甚だ悪しく即ち深霧、雨雪等交〻至り且つ艦の四邊氷塊の圍繞する所と爲りしかば絶えず其害を被むらんとを恐れたり

廿九日艦長協議の末今や海上氷塊を減ずるの觀あり且つサーカムシッション岬は此を距ること二百四十里に過ぎざるが故に途中何等の拒障に遭遇せざる限りは西方に向ひサーカムシッション岬まで進航せんと

決せり此日兩艦は氷塊を艦中に運び溶解して淡水となさんと欲し一の氷山に向て駛行せしが偶〻風濤起りしを以て氷間に艦を止どむるは甚だ危險なるにより竟に離散したる氷塊をも取らずして去れり而して此を距るや北方に又渺漠たる氷原を認めしが際涯無限眼力の克く極むべきにあらざりき

氷塊離散する圖

爰に歳改まり一千七百七十三年一月七日（原書に十二日とあり然れども十二日にては前後連絡せず依て誤植ならんと判斷して斯くは改めたり）となりて颱風は大に減ぜしが雪、霰の大に降りし爲め艦具を甚だしく凝結せしめたり斯くて其翌日は風程好く吹き續き喜望峰拔錨以來未だ嘗て見ざりし所の月を望みて大に快を覺えたり

八日火曜日、所々の氷山を通過し其夕又一の氷山に遭遇せしに其周圍に離散したる氷塊の多數あるを認めしかば時に天候の穩和なるを幸ひ端舟を遣りて其爲し得べき限り之が採獲に從事せしめたり即ち之を後半甲板に運搬し累々と堆積して糟に入れ其溶解を待ちて之を閲せしに三十日間の消費に充分なる淡水を得たり而して該氷塊に鹹水の凝著

北光と氷山の圖

せしことは甚だ僅少にして溶解せるときには良き淡水と爲れり又此處に於て巨大の白鯨を視しと屢〻なり

十七日南極圏を經過して古來未だ航海者の敢て進入せざる所の南寒帶に進航せり

同日午後氷山を視しと大小三十八に迫びしが其渺漠たる氷原は數種の氷より成りグリインランド人の所謂原氷及浮氷の如き者なりき又鯨鯢及大海燕の遊ぶを時々視たり此處は南緯六十七度十五分に當りて今や公氏は

向南の針路を固執するの良策にあらざることを悟りければ佛人が近頃發見したる所の陸地を追索せんが爲め直ちに之に發航せんと決心せり

二十九日屢〻ポーパス(ゴトウクシヲ)の走るを視たるが其速かなると驚くべきものたりし而して此ものたる其兩側に白色の一大斑點あり延きて殆ど其背部に達せり

三十一日一大火山を通過せしが恰も其邊りを進航する時に當りて一片の破碎あり轟然一發其聲大砲の如く聞えたり

二月四日密霧起りてアドベンチューア號の所在を見失へり後ち數回號砲を放ちしも應ぜざりき其相失したる理由は能く之を知るに由なしと雖も此に至りて始めて二艦相離隔せしにあらずやと憂慮せり公氏は曩きにアドベンチューア號の艦長ファルノーに命して曰く若し其艦に於てレソリウシヨン號を視失ふたる場合には其前之と相共に居れる處に歸りて三日間巡探すべしと故に公氏は短蛇行(シヨートボールド)を爲し七日の午後に至るまで三十分毎に砲發せしめたり而して時に天候晴朗なりしも遂に視限界内にアドベンチューア號を視ざりき斯くて尚ほ十日に至るまで一地に停止して夜間號砲を發し或は烽火を點ぜしも更に同號の艦影を認めず又其何等の聲をも聞かざりしかば本艦の乘員には誰ありて其失踪を惜まざる者なく此渺茫無涯の大洋中に只一艦と爲りしことを思ひ痛く憂色を表して絶えず其地平線上を四顧したり

三月十七日公氏は高南の緯度を離れニウ、ヂーランド島に至り仝所に於てアドベンチューア號を待合せ

且つ其乘員を慰勞せんと決心せり然るに北西風吹き續きたるが爲めにペン、デーメンス、ランドに寄港すると能はざりしかばニウジーランド島に直航するの針路を取れり乃ち此針路や前途に危險の恐れなきを以て帆を掛くるとに躊躇せず且つ此前三日間は寒暖計四十六度に上ぼり天候亦甚だ穩和なりしが竟に緯度七八度を經過するや頓に空氣の温度に驚くべき差を生じたるを以て艦員皆之を歎呼せり

二十六日レメリウシヨン號はニウ、ジーランド島のダスキー灣に入りしと雖も公氏は前回の航海に於て同島を發見せしも唯之に名を命じたるのみなれば本艦の乘員は一として其達錘底を知らざるが故に頗る警戒して進みたり斯くて此灣内に在る數島を通過し上ると殆ど六里にして本艦を止どめ茲に二隻の端艇を卸し其一隻に一士官を載せ左舷の地角を回りて錨地を探索せしめしに終に之を認め得て之を本艦に號報せしかば本艦を進めて五十尋深の處に至り其海岸を距ること一鏈の處に投錨せり即ち此航海たるや時間を費やすと實に一百十七日、海を走ること一萬九百八十里而して一回だも陸地を視ざりし長航海なりければ乘員擧つて此に休憩を得るの歡びは之を譬ふるに物なき有樣なりき

高南の緯度間に航海すること斯の如く久しきに渉りしにも拘らず艦中に病者とては唯一人の敗血症に罹りたる者あるのみ而して此患者の病症を重くせし原因も主として平素に不攝生なりしと他症の併發したることに在りて必らずしも航海の爲めにはあらざりき

ニウ、ジーランドの陸地は美麗にして人目を娛しましむるの觀あり

ダスキー灣の入口に散布せる諸島に

は樹木繁生し常盤木は鬱蒼彩をなし風景佳絶なり多數の海岸には水鳥群をなして亂啼し其聲噪然として全島に響き渡れり乘員試みに釣を垂れしに其餌を貪ること甚だ盛んにして遂に多數の魚尾を得たり割烹して之を食せしに其初味の美なりしことは未だ曾て試みざる所の如く覺えたり斯くて當時繫泊の有樣を言へば本艦の帆桁は海岸の樹梢に懸れり清水は涓々として艦尾に近く流れ來れり乃ち其繫泊地の位置たる飲水及食物を得るの便宜に於ては實に此上なき好位置を占めたり今や乘員は艦躰に修理を加へ且つ須要なる百般の觀測を遂げんと欲し其海岸に於て觀象臺と鍛工場の設立に着手せり時に尙ほ本艦内に殘れる畜產は僅かに數頭の綿羊及野羊に過ぎざりしが何故か海岸に生ずる生草を食ふを欲せず仍て之を診察せしに其齒牙弛みて合はず是れ慢性敗血症の然らしむる所にして他にも亦其徵候を呈せり

二十八日數名の士官は小艇に乘じ遊獵に出でしが途に住民を見しとて歸りて之を公氏に報したり暫くして土人を滿載したる一艘の蕃舟あり本艦より銃丸到達の程内に來りしも止どまりて進まず仍て之を接近せしめんと誘引するに百方力を盡せしも遂に成らず彼等は須臾にして去れり是に於て公氏は時を移さず數名の士官及紳士を伴ふて即日彼の土人の探索に出でしが前に來れる蕃舟の岸上に曳き揚げられ居たるを視て其陸上を探れば土人の小舍數軒ありて竈及網を備ふるも四邊閑として更に人影なし思ふに森林に逃げ去りしものならんか乃ち留止頃刻にして章牌、鏡其他數種の物品を蕃舟に遺して歸れり

四月一日蕃舟に遺したる物品の有無を檢する爲め艦員を遣はせしが舟中の物品は尙ほ依然として有りた

り翌二日艦員喜望峰より携帶したる黑犬忽ち林中に走り去り遂に還らざりき

六日遊獵の一行出で行きしが或る廣濶なる澳を發見し鴨を射て數羽を得たり因つて此江をダックコーブ（鴨澳の義）と名づけたり途に一男子と二女に面接せしが男子は岩角に立ち手に棒を携へ婦人は槍を携へて其背後に在り一行の接近するや男子は大に面に恐怖の色を呈せしも毅然として佇立し一行に於て之に物品を投與せしも敢て其身を動かさゝりき斯くて公氏の上陸して彼と抱合するに迨び始めて其恐怖心を脫し公氏が携帶したる諸品を受領せり士官水夫も亦次ぎで上陸し暫らく此土人と談話せり然れども双方互ひに理解する所なく二女の內若き女子は語を交へしと最も多し

翌日一行は再び此土人を訪ひ數個の物品を贈りしが手斧及大釘を除くの外は更に喜ぶ所なく冷淡に看過せり已にして一行は此土人の二妻及前に述べたる若婦十四歲餘なる一人の童子及三人の小兒を視たり是其全家族ならんと想像せられたり一行は其住家に導かれしに住家は二個の矮陋なる小舍にして林邊に近く構へり其蕃舟は小舍に近き小流に泛び其大きさ全家族を載せて諸所に漕送するに足るべし一行中是等の諸物に就き見取圖を描きし者ありたり訣別に臨み此土人は艦長に贈るに小間物若干と自製織物の一反を以てし而して我が端艇の被覆を指して之を得んと欲するの意を示せり艦長は則ち之を察知し赤色の毛布を以て被覆を作らしめ之に贈れり

九日一行は又々此土人を訪ひしが土人は毛髮を櫛り油を灑ぎ白色の羽毛を粘着し之を頭頂に挿し又其數

把を耳に着せり一行は此時大に禮遇せられたるが此土人は被覆の贈り物を以て甚だ歡び其パッツーパッツを取りて艦長に贈れり

十二日月曜日前日土人の一家族は蕃舟に乘じて本艦員を訪問せんとせしが其將さに我が艦に接近せんとするや何の故にや頗る警戒する所あり仍て之に來艦せんとを勸誘せしも遂に肯んぜずして其傍らなる小澳に退き其岸に着して安座せり是に於て公氏は艦員に風笛を吹き太鼓を打たんとを命ぜしが太鼓は頗る此土人を感ぜしめたり

夕刻に至り此土人及既に記したる其娘は氣力を起して本艦に來りしが餘の家族は此間尙ほ蕃舟に在りて釣魚せり此土人の將さに本艦に來らんとするや靑々たる樹枝を以て艏舷を敲き祈禱めきたる文句を唱へ而して之を畢るや其樹枝を擲ちて來艦せり斯くて艦室の各部を巡覽し其奇異に驚きたることは面色に溢れしも須臾も何等の一物に就きて留意注目すると能はず其目前に現出せる者は悉く皆な之を理解するの力なきが如く天造人爲の巧妙俱に之を顯みず艦中に看る所の諸物中特に其喜色を惹けるものは手斧及大釘の二種に過ぎざりき蓋し彼等にして若し一たび之を得たらんには再び之を手離すとを決して肯んぜざるべしと思はれたり公氏及三名の紳士は此土人と應接の暇を得るや之をガン、ルーム（副艦士以下の會食所）に殘し直ちに二隻の端艇を下ろして本艦を出で本灣の灣奥を巡檢したるが其夜は其處に一泊せり斯くて翌日此一行は尙ほ引續きて視察する所あり偶ゝ鴨を認めしにより之を射擊せしに其砲聲にや驚きけん是迄更に視

當らざる所の土人等各處に顯れて最も猛猛なる聲を發し大に喧擾を極めたり是に於て一行も亦之に應じて大呼しつゝ端艇に退きたるに土人等は之を追躡せずして尙ほ大に聲を放ちたり一行は尙ほ引續きて遊獵ながらに視察せしが林中に於て屢〻土人の聲を聞けり斯くて遂に男女各一人河岸に現れ和親の表徵として各〻其手に携へたる物を振れり然れども一帶の河水を隔てたるを以て一行は之に接近すると能はず土人も亦林中に去れり後又二名の土人出でしが一行の之に接近せんとするや彼等は亦去りて深く林中に入り遂に其姿影だに視せざりき此日一行は又此に一泊し翌朝々餐の後本艦に歸らんが爲め端艇に投ぜしが時に對岸に土人二名あり大に叫びて一行を招きしに因り又前岸に漕ぎ渡り公氏は身に寸鐵を帶びざりしも二名の紳士を伴ふて上陸せり然れども土人又退き公氏の單身進み來るに迫びて初めて足を留め之を待ちたり而して此二人の內一人をして其携帶したる槍を放棄せしむるやう說諭したるは頗る難事なりしが遂に之を得たり是に於て彼手に生草を携へて艦長に面接し艦長をして其一端を握らしめたり斯の如くして双方對立せる間土人に於て何か陳述する所ありしが艦長は理解せざりしも答詞の如き語を返せり斯くて彼我互ひに相視し彼は己れが背に着けたる上衣を脫して之を艦長に被らしめしが艦長は身邊に贈るべき物品を携へざりしかば其兩名へ各手斧及小刀を以て之に報ひたり而して土人は一行を其住家に招待し憂應する所あらんとせしも潮時を失ふの憂あるを以て之を辭せり又他の土人林邊に顯れしも敢て接近せず二名の土人は一行に伴ひ端艇の邊に來り小銃のあるを見て大に辟易せるもの〻如し土人等は一行の

水禽を射擊するに注目せり是全く殺害の器械と看做したればなり斯くて餘の諸物には土人等濫りに手を觸るゝが故に之を監守するの必要を感じたれども獨り小銃に至ては彼等の恐怖却て我が幸ひと爲れり彼等は我が水夫の端艇を押し出すとに助力せり而して此土人等は河岸に住し魚介水鳥の群中に在りながら何等の舸艇をも所有せざりき然れども其河流を航することは敢て之を難事とせず即ち二個若しくは三個の木材を接合し之を筏となして舟艇に代用せり此時艦員は幾組にも分れ海豹捕獲の爲めに派遣せられたり蓋し海豹其ものたる食物及油を得るに甚だ必要にして且つ其皮は乾かして艦の綱具に供すべし

二十四日木曜日公氏は喜望峰より搭載して今僅かに殘れる雌鵞五羽及雄鵞一羽を携へ或る一澳に至りて之を放ち其澳に命ずるにグーズ、コーブ（鵞澳の義）の名を以てせり此澳は住民の之を妨礙するの憂なく且つ餌食に富めるが故に水禽を養ふには最も便宜なる所たりダスキー灣には入口二ケ所あり又許多の錨地あり何れも安全にして且つ便宜なり就中傍側に美麗の瀑布の有るより瀧澳（カスケードコーブ）の名を下たしたる澳內の如き一艦隊を容るべく其出入亦極はめて易し此國は山岳甚だ多く之を眺むるに嵯峨として險惡たり海岸に臨む處及其近隣には樹木繁生せり

五月十一日即ち火曜日本艦は再び解纜せしが偶〻海上に白き斑點浮び之より一柱生じ其形恰も玻璃管の如きを觀たり時に雲間よりも同種のもの降りて之と相會し終に一躰と爲りて所謂龍卷なるものを顯せるが忽ちにして之と同きもの數ケ所に發生せり而して本艦は之を距ること二百尋內に其一を檢察するを得た

るが即ち其將さに起らんとするや海上の一局部大に動搖し其水渦形を爲して雲間に登り其色暗澹陰黑にして霰珠艦上に飛散し同時に又雲端は漸々尖りて纖長なる管となり海水の動搖したる所に直下して海上より昇騰せる渦水に投合するが如き觀を呈したり而して其起るや爆發の聲を聞かず唯一閃光を瞥見したるのみ本艦の乘員中最モ海上の經歷に富める者と雖も龍卷を斯く面前に目擊したることは初めてなるを以て大に驚愕せり其現れし初期より全滅に至るまで四十五分間を費やせり

五月十八日午前五時本艦はグイン、チャーロット浦を出るや土人の壘塞より三閃光の揚がるを視たり是歐洲人の信號に外ならざるより或はアドベンチューア號より發せしにはあらざるなきやと半信半疑の中、試みに之に向て發砲せしに其想像空しからず直ちに答砲を得たるのみならず後ち暫くしてアドベンチューア號の碇泊するを認めたり是に於て同號艦長ファーノー氏は十三發の祝砲を放ち本艦の無恙を賀せしかは本艦も亦欣然として之に答砲せり嗚呼此邂逅や茫漠たる洋中險惡なる天候に相失してより茲に幾十日何の悅びか之に若かんや其兩艦歡喜の情況は是宜しく讀者の諒察に委ぬべきのみ

ファーノー艦長がレソリューション號と相失してより以後再會迄の顚末は左の如し

二月四日即ち日曜日レソリューション號と深霧中に相失するや後ち其相失したる位置に歸りて巡搜せしと久し且つ同號と相失したる後間もなくして砲聲を耳にし之を左舷の方と鑑定せしかば乃ち南東に轉じ三十分間毎に四斤砲を放ちたり然れども更に答砲を得ざりしに因り未だ深霧の起らざる前に取りし所の

針路に復して進航せり斯くて此日夕刻に至りて烈風起り時々稍ゝ晴天と爲りしも波浪の高きことは艦首を超え桁端に到て碎散せり然るも本艦は兩艦相失ふの場合に於ける訓令を守りレソリューション號を視失ひたる場所の緯度内を巡航せんとして西方に駛行せしが此時に當り暴風再び起りて其衝激を新たにし天候亦再び非常の密霧を呈したるを以て已むなく漂泊法(ブリングツー)を行なはざるを得ざりしに至れり仍て遂に其志ざせし所に達するとを得ざりしが三日間は本艦の能ふべき限り其相失したる場所の最寄を巡航し此大に懼るべき天候中百方之を搜索したり然れども終に之を認め得ざりしかば茲に初めて望を絶ち即ち是より四千二百里を隔ちたる處に駛行し以て當冬を凌がんと決心せり然るに此航行や航海者の未だ全く歷驗せざる海上を横斷する事なるが故に各員一日の用水を一「クヂート」に節減せり

三月一日即ち月曜日を以て水の積入れ且つ破損索具修理の爲めブァン、ヂーメンス、ランドに向ひ進航せんと決せり

十一日即ち木曜日同地に着し最も便宜なる一の港を發見し兩岸より各一里許を隔て七尋深の處に投錨せり而して此碇泊中には一人の土人をも視ざりしが北方八哩乃至十哩の處に當り人煙の揚るを認めたり

既にして艦中薪水を搭載したるを以て此港を出帆しブァンヂーメンス、ランドはニウ、ホルランドの一部なりや否を確定せんとする目的にて其海岸を探驗せり

同廿四日ブァン、ヂーメンス、ランドを離るゝや烈颷起り怒濤の艦中に亂入すると多く遂に大なるカッヂー

艇を擔破せり此時小カツター艇の如きは艦外に掠め去られざらんが爲め之を防ぐに艦員をして痛く勞せしめたり斯くて此猛颱は十二時間吹き續きしが其後は天候稍〻穩和に歸して無風と爲れり遂に十五日間を以て經度の二十四度を航し後ちニウ、ジーランドの海岸に到着せり

四月九日三艘の蕃舟男女の土人拾五名を乘せアドベンチューア號の舷側に來りしが何れも斧鉞其他堅木より製作したる武器の長さ四呎餘なるを帶びたり然るに一人の弓矢を携ふあるを視ず又其肩には網の如きものを纏ひ而して生草より作りたる帶を以て之を其腰の邊に結べり男女俱に生蕃の觀を呈し敢て我が艦に上ほることを好まず仍て之に或る物品を贈與し且つ形容を以て交易せんとを勸誘せしに土人は贈品を收受し其內若干人は氣力を得て來艦することを肯んじたり此面接の折柄、彼等はチュピヤの名を記憶して安否を問ひしが其既にパタビヤに於て死去せりと聞くや其若干人は頗る哀悼し其死は天譴を以てなりしや或は殺害なりしやを尋ねたり

五月十一日即ち火曜日我が乘員は海岸に於て工作に從事したるが著るしく地震を感じたり其翌日は好天氣にして土人も亦和親の態を表せしが故に艦長及士官は上陸せんと用意したるに時に十艘より少なからざる蕃舟此浦に漕ぎ來れり其人數を計ふるに百三十人にして何れも兵裝せざる者なし而して我が艦側に着するや頻りに入艦の許可を得んとを請ひしがファーノー艦長は其擧動に怪むべき所あるを以て其總員をして一時に入艦するを許さず少數交代にて入艦せしめたり然るに其我々に對するの動作甚た放恣不法

なりしにより遂に之を追拂はざるを得ざるに至れり蓋し其意向を察するに本艦を奪ひ己れが有となさんと欲せしや明らかなり然れども艦員の本艦を護衛すること嚴密にして遂に一發の巨砲其頭上に轟きしかば之に辟易したりけん稍〻禮讓を爲すに至れり是に於て艦員は秩序の復するを視て諸種の物品即ち飾珠、摺刀、剃刀、織物、紙及其他些少の品を出たし此地の製作に係る斧、鉞、槍、諸種の武器、釣鉤其他奇物と交易せしが土人等は其大目的の達せざりしより大に失望の色を顯して其舟に歸れり去りながら其本艦を辭するに先だち艦長及士官等は其首魁と見ゆる者に物品を贈與せしが是は彼大に喜びて受領せり

斯くて後本艦は遂に十七日に至り此浦の口を隔てゝレソリューション號を視るの一大吉事に逢へりと是即ちファーノー艦長がレソリューション號と相失したる以來の顚末なりとす

アドヴェエンチューア號の乘員が此前數日間荒天候の爲めに蒙りし所の困難はレソリューション號に於ても亦之を免かれざりき然るに爰に驚くべき一事あり即ちレソリューション號の乘員には僅かに唯一名の病者ありしのみにて他は皆な其健全を保ちしと是なり蓋し斯の如きは畢竟公氏が其部下の衛生に盡力したる精意の致す所に外ならざれば吾人只願感嘆敬服するの外なきなり斯くて公氏は上は高等の士官より下は最下等の水兵に至るまで嚴正の規律を服膺するに馴致せしかば其號令は一として毫も差ふことなく實行せられ所謂手の指を使ふが如き實況なりき即ち仕事の困難なるときには屢〻休憩を與へて其勞を慰すと雖も好天の日には其部下の一人をも遊惰に居らしめず兵器工、船匠師、水夫に論なく絕えず之を

使用して假令焦眉の急にあらずとも航海中早晩必要の起るならんと認めたる各事は各〻其職に從づて豫じめ之を爲さしめたり

此地に到着の翌日即ち十九日水曜、公氏は黎明を待ちて山蕪菜、芹其他の野菜を摘み取らんが爲めに出で行きたるが朝餐の時其一艇は兩艦の總員に給するに足るべき量を得て歸れり即ち是等の野菜は其質、敗血症を治するの効あるを以て毎朝々餐には之を小麥及ホルテーブル、プロッス（蕎の一種）と共に煮又正餐には豌豆及蕎に加へんとを命じたり又ファーノー艦長は多量の野菜種を蒔きしが其生長甚だ宜しく苣及歐洲の野菜を澤山に供給せり

公氏は喜望峯より携へ來れる畜産の中今僅かに殘れる牝牡羊各〻一頭を艦より出たしてアドヴェンチューア號の營所に近き汲水場に遣れり二十一日長島（ロングアイランド）に渡り特に育種の爲めに耕鋤したる土地に野菜種の數種を蒔きたり

二十二日土曜牝牡羊共に斃れたるが是其毒草を食ひしに因するものと思はれたり正午五名の土人二艘の小形なる蕃舟にて來訪せしが乘員と會食して去れり

二十四日月曜公氏はファーノー艦長及フォスター氏と共に遊獵の爲め同艇にて西灣に赴きしが途に十四五人を載せたる大なる蕃舟に遇ひ第一にチュピアの安否を問はれたり依て其死せしとを告げしに彼等大に哀悼の意を示したり

二十九日土曜、許多の土人、蕃舟を以て本艦を取卷きしが我が乘員は此地の産物を得んと欲し競ふて之と貿易せり

公氏は土人の一名をモルッーアヲに伴ひ行きアドヴェンチューア號の航海師ファチン氏が種栽せる馬鈴薯の繁生したる模樣を示せしに其者大に喜びたるの餘り自ら好みて此植物の周邊に生じたる雜草を除きたり斯くて後ち又蕪菁、胡蘿蔔、和蘭防風（パースニップ）の種栽處に誘導せしが其何物たるかは彼が善く知れる所の草根に比較して容易く之を了解せしむるを得たり

六月四日金曜は我が國王陛下の誕辰に當るを以て定例宴會を開き遙かに祝賀の意を表せり此翌早朝既に懇意と爲りたる土人、多量の魚類を携へ來りて供給せり而して其一人は本艦に乘組みて航海せんとを約せしが後ち變心せり

アドヴェンチューア號の艦長にも同一の約を爲せし者數人ありしが是又果さず此所の土人の風として兒童を携へ來りて交付せんとするもの常に尠なからず其意自ら陳ずる如く之を賣却せんとする如き不人情を挾むにあらず全く贈物に充てんと欲してなり此日凡そ三十人を載せたる大なる蕃舟一艘本艦を距ること銃彈射程内に來りしが是皆初めて視る所の輩にして舳艫に各一人佇立し其餘は皆坐せり而して艦に在る者は其手に綠枝を携へて數言を述べしが舳に居る者は嚴格亮明なる音聲を以て長演說を爲せり乃ち其了るを待ち招きて來艦を促がせしに其一人初めて之を肯んじたり斯くて其餘の者は後ち暫らくありて艦に入りしが直ちに忙がはしく乘員と貿易せり此輩は既に艦中に在りたる土人と互ひに擦

鼻して其無事を祝し又後甲板に居れる我が諸士にも同一の挨拶を爲せり又是等の土人は是迄ニウジーランドに於て視し所の何れよりも身丈高くして其衣服及粧飾は以て其クィン、シャロットス浦の住民に優れることを表せり又其道具を覽るに其製作に深く意を用ひ彫刻も亦奇麗に成れり其數種と共に樂器をも購求したり皆く艦中に留どまりて後ち一同其舟に移りモルツーアラに渡れり而して望遠鏡を以て此島を視しに海岸に四五艘の蕃舟と數人とを認めたり正午頃公氏は數士を伴ひ之に尾して上陸せしに甚だ親和なる歡迎を受けたり公氏は數種の贈物を分配せしが其中には黃銅の章牌にして一面に國王の名、一面に艦號を銘刻したるもの許多を交へたり公氏は此島の酋長なるテーラツーヲ誘導して其種栽せる園圃に到り彼をして之に妨害を加ふる等のことは決して爲す間敷き旨を諾さしめたり

六月七日早朝兩艦は此處を出帆せしも逆風に遇へり公氏はアドヴェンチューア號の乘員中に患者の多きことを聞き七月二十九日該艦に抵りて之を見分せしに厨夫一名既に死し現に敗血症及赤痢に罹る者二十名ありたり然るにレソリューション號に於ては患者名簿に登る者僅かに三名に過ぎざりき此幸福は全く公氏が乘員の食物に芹及山葵を交へて給し其初め之を嫌ひしにも關せず勉めて之を喫せしめたるに因すると必然たり

兩艦は既にケピテーン、カルテレットの航跡の北方に達せしと雖も今や一大陸を發見するの望は全く絶え唯其南方に歸るまでに島嶼を認めんとを期するの外他に望なかりき

八月六日ファーノー艦長は會食の爲めにレソリューション號の艦中に來りしが其報ずる所に據ればアドヴェンチューア號の患者も目下は餘程快方に赴きたり即ち赤痢の如きは既に絶滅し敗血症の尙ほ存するのみなりと謂へり

十八日兩艦はオタハイテーを距ること一「リーグ」の處に來りしが風の落ちたるより端艇を下ろして之を挽かしめたり時に多數の土人諸方より果實を携へ來りて貿易を促がせり其過半は既に公氏を知りてパンクス氏等の安否を問ひしがチュピアの事を尋ねたる者は一人もあらざりき

時に兩艦は石花礁より甚だ危險の位置に迫れり仍て該礁脈の西角を回りて入灣せんと欲し人を派して其水深を探らしめしに派遣者は終に十分の水深なきことを探れり然るに兩艦は早や急速なる進行力を以て礁脈の方へ進み其礁端の破浪を距ること二鏈以內に達せしに未だ投錨すべき底地を得ざりき斯くてレソリューション號は終に三尋深の處に到り波浪の跳落するごとに底地に牴觸せしがアトヴェンチューア號は吃水の淺かりし爲め此變なく繫泊するを得たり

既にして錨地終に看出されしかば今や船首錨を揚げて本艦を泛べ先つ端艇を以て挽かしめ次に諸艇を擧げてアドヴェンチューア號の助勢に遣り辛ふじて難破を免れ再び海に出づるの幸福を得たり此危急の時に當りて數多の土人艦中に在りしが彼等に在ては毫も危懼する所なく兩艦の海底に衝觸する間と雖も自若として常に異ならず斯くて兩艦共にオアチピ灣に入り極はめて海濱に近く投錨せしに土人の來訪せし者

甚だ多く即ち酋長に贈るに襯衣、斧、其他數品を以てせしかば其返禮として豕及家禽を呈せんことを約せり

公克ファーノー兩艦長は土人の風俗等を視察し且つ汲水場を看出さんが爲めに上陸せしが土人は敬禮を盡して之を迎へ汲水場も亦極はめて便なるものを得たり

一人あり酋長の眸に擬して其數名の黨類と共に艦中に來りしにより之に惠與するに物品を以てせしが彼尙ほ之を以て足れりとせずクォーター、ガンリーに陳列したる各種の物品を窃取せんとせり斯くて又甲板に居たる者にも同犯ありとの訴頻りに起りしにより公氏は乃ち此徒を悉く艦外に驅逐し尙ほ僞酋長の忌まはしき擧動を怒りて其頭上に二回發銃せり是に於て彼大に恐怖し躍りて水に入れり仍て其舟を捕へんが爲め端艇一隻を遣りしに岸上の土人我が水夫に石を打擲せり公氏は之に應援せんと欲して自ら他の端艇にて出で行き且つ命じて圓彈を裝したる大砲を岸邊に一發放たしめしが之が爲めにか土人は大に辟易して退きたり乃ち公氏は何等の抗爭にも遇はずして終に蕃舟を捕へ歸れり然るに其後間もなく平和親交に復し蕃舟も亦彼に返せり又二三の土人にチュピアの安否を問ふ者ありしが其殺されたるにあらず病を以て死せることを聞き天命已むを得ずと放念せりバンクス氏其他此前公氏と共にオタハイテーに到りしを存問せし土人又數名ありたり想ふに當時此兩王國間兵を交へて大なる方の半島に攝政たりしツータハー戰死しオッーなる者代りて王位に即きしもの、如し此戰爭に於てツーブーライ、タマイド其他舊識の者は皆な斃れたり

十九日兩艦長海岸に沿ふて巡行せしが一酋長ありて之を饗するに美味の魚を以てせり乃ち兩艦長は其返禮として之に數種の物品を贈れり翌日一名の土人岸上に居れる我が乘員の銃を窃みしが土人の數名全く自己の意を以て之を追ひ打倒して銃を取返し持主に渡せり二十一日一酋長あり來訪して椰子を贈れり然るに此果實は腐敗物なりしかば直ちに艦外に投棄して彼に告ぐるに其旨を以てせしが彼は恬として毫も氣色を變せず全く之を知らざるもの、如き樣なりき然れども試みに自ら其二三を開割して果して然るとを知りしかば驚きたる眞似して不敬を謝し岸上に歸りて甘蔗及車前實若干を送致せり時に一報ありワヒートゥなる一酋長、公氏に相見えんと欲して近傍まで來れりと依て公氏はファーノー艦長其他數士と共に出で行きしが土人も亦多く之に同伴せり斯くて上陸所を距ること凡そ一哩にして此酋長が多勢を從へて進み來るに遇へり彼は此前數回公氏に面會せしを以て善く公氏を知れり然るに其當時彼れの名はテレースと呼ばれたり普通の挨拶終るや否、彼は自身と共に公氏を腰掛けに就かしめ自餘は地上に坐せり斯くて此前面會せる人々の安否を問ふて友情を示し又其翌日出帆せざるを得ずと告ぐるを聞き若し此地に滯在するあらば澤山に豕を辨ずべきに明日の出帆にては所詮及ばずと遺憾の思ひあるが如く見えたり公氏は之に贈るに多くの物品を以てし午前の間は彼と共に居りしが食事の爲めに歸艦し午後又之を訪ひ互ひに贈物を替はせり

二十四日兩艦共に海に出でしに數艘の蕃舟販賣の爲めに果實を積みて之に伴ひ來りしが乍ちにして賣り